

# 武藏国分寺遺跡発掘調査概報

VI

市公共下水道南部地区15号工事に伴う調査

1982年3月

武藏国分寺遺跡調査会  
国分寺市教育委員会



## 序　　言

武藏国分寺遺跡は、金堂、講堂等の主要建造物が置かれた僧・尼両寺の各寺域、付属施設等が置かれたと考えられる僧・尼両寺を含む寺地、その周辺に展開する竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡などから成り立っていることが次第に明らかになりつつある。

これらの成果は寺域確認調査の他に、個人住宅建設に伴う小規模な調査や、下水管埋設工事に伴う道路下での地道な調査の積み重ねによるものである。

近年、市内の開発が進むにつれて、このような記録・保存措置を講ずるための事前発掘調査を行う機会が増え、住宅密集地域内や、往来がはげしい道路での調査であるために実施には多くの困難が伴うが、それにもかかわらず奮闘されている調査員諸氏には、改めて敬意を表するとともに、国分寺市教育委員会の文化財保護行政の指導には感謝いたすしだいである。

今回報告の南部地区15号工事に伴う発掘調査は、これまで比較的調査例の少なかった国分寺崖線直下（黒鐘谷）の様相の一端に触れるものとして意味があると考える。調査の具体的な内容は各章に詳述してあるが、まだまだ不備な点も眼につくかと思います。御批判、御教示をいただければ幸いかと存じます。

最後に調査にあたって、終始御協力をいただいた国分寺市都市整備部下水道課の方々に感謝の意を表するものである。

調査会長　星　野　亮　勝

## 例　　言

1. 本書は、東京都国分寺市西元町に所在する武藏国分寺跡において、昭和48年以来実施されている調査の内、第37次、市公共下水道面整備南部地区15号工事に伴う事前調査の成果をまとめたものである。発掘調査は国分寺市都市整備部下水道課より委託金を受けて実施した。
2. 本調査は、昭和52年10月27日より昭和53年4月17日まで実施した。行田裕美(昭和54年退出)が現場を担当した。
3. 報告書作成は、武藏国分寺遺跡調査会事務所で行った。
4. 本書の執筆、図集は滝口宏・永峯光一・大川清・坂詣秀一の監修のもとに、調査員全員の検討、討議を経て上村昌男が行った。出土遺物、瓦の一覧表は有吉重蔵が行った。
5. 出土遺物の実測・写真撮影・図版作成は、井田淑子・木村初江・小峰ミコ子・山口啓子・若林雅子の協力を得た。
6. 石器の実測は、小松真名(昭和55年恋ヶ窪道路調査会退出)が行った。
7. 報告書作成の過程で、次の方々の御教示を賜った。厚く御礼申し上げます。  
浅野晴樹・岡崎完樹・斎藤孝正・砂田伸弘・高林均・橋崎彰一・長谷部栄爾・服部敬史・坂野和信・守屋雅史
8. 発掘調査、ならびに整理作業に参加協力いただいた方々は、下記の通りである。

### 発掘参加者

大久保敏明・工藤健司・小鳥居均・小林俊猛・清水隆博・高橋健司・田中克宜・中村亨・長神明・成田昭・平野進・古見雅紀・真島謙三

### 整理参加者

上原政江・岡田忠理・川岸みつ子・神田礼子・鎌田育美・北畠博子・柳原優子・中村順子・長岡サカエ・馬上久美子・山口京子・草野夏美

## 凡 例

### 本 文

1. 遺構は、各遺構毎にはば発見順に連続番号を付し、下記の遺構記号を冠して表示する。本文中においては、「S D 73溝跡」・「S S 13集石跡」の様に記述し、図版においては、「S D 73」・「S S -13」の様に記す。

S D 溝跡・溝状遺構	S K 土坑・瓦窓
S S 集石	P 小穴

2. 調査地区的名称について「人孔」と記したが、下水道工事の立坑、マンホール部分の名称である。

### 図 版

#### 1. 遺構

①スクリーントーンの指示は次のとおりである。

平面図	焼土	集石
断面図	盛土	黒褐色土
	漸移層	ローム層
	硬層	砂礫層

②平面図表示の数字は、発掘基準線中心点からの距離を表わす。発掘基準線中心点と僧寺金堂中心点の位置関係は、前者の南北基準線上、中心点南 26.276m に後者がある。また僧寺中軸線の方は発掘南北基準線と一致し、真北から  $\pi 08' 03''$ 、磁北から  $0^{\circ} 38' 03''$ 、それぞれ西偏する。

③断面表示の数字は水位レベルで、海拔高を示す。

④縮尺は次の通り統一した。

土坑・小穴	1/50	集石跡	1/25
溝断面・平面図	1/50	遺構全体図	1/250
標準土層断面図	1/50	遺構配置図	1/2500

#### 2. 遺物

①土器類におけるスクリーントーンの指示は次のとおりである。

遺物	須恵器・土師器	灰釉陶器
	縄釉陶器	青磁

②墨書きはベタであらわした。

③縮尺は、実測図においては実大・1/2.5・1/4、写真においては実大・1/2・1/3・1/4。何れかに統一してある。

④写真図版のうち出土遺物は、本文中の挿図番号と対照にした。例えば、「7-8」は、「第7図-8」のことと指す。

## 本文目次

序　　言	
例　　言	
凡　　例	
I 調査に至る経過	1~2
II 調査地区の概観	3
III 層　　序	3
IV 調査工程と経過	4
V 検出遺構	7
No. 1, 2, 3, 4 人孔	7
No. 5, 6, 7 人孔	8
No. 8, 9 人孔	9
VI 出土遺物	14~15
土器一覧	16~25
瓦一覧	26~31
繩文土器、石器一覧	32~34
VII 小　　結	67~70

## 挿図目次

第1図 調査地位置図	6
第2図 標準土層断面図	(6~7の間折込)
第3図 調査地区全体図	10
第4図 No 4 人孔小穴・硬質面、No 7 人孔 SD 73溝跡、No 9 人孔土坑実測図	11
第5図 No 8 人孔 SD 73溝跡実測図	12
第6図 No 7・8 人孔集石実測図	13
第7図 4・6 人孔表土出土遺物	35

第8図	7人孔SD73出土遺物	36
第9図	7人孔SD73出土遺物	37
第10図	7人孔表土出土遺物	38
第11図	7人孔出土遺物 表土・1~14、黒褐色土・15・16	39
第12図	8人孔SD73A期出土遺物	40
第13図	8人孔SD73A期出土遺物	41
第14図	8人孔SD73B期出土遺物	42
第15図	8人孔SD73B期出土遺物	43
第16図	8人孔出土遺物 SD73B期・1~7、表土・8~12	44
第17図	1・2・3人孔表土出土遺物	45
第18図	4人孔表土出土遺物	46
第19図	5人孔出土遺物 表土・2・6、黒褐色土・1・3・4、暗茶褐色土・5	47
第20図	5・6人孔出土遺物 表土・1・2・3、暗茶褐色土・4	48
第21図	6人孔出土遺物 表土・2・3、暗茶褐色土・1	49
第22図	6人孔表土出土遺物	50
第23図	6人孔表土出土遺物	51
第24図	6人孔表土出土遺物	52
第25図	6人孔表土出土遺物	53
第26図	6人孔表土出土遺物	54
第27図	7人孔SD73出土遺物	55
第28図	7人孔SD73出土遺物	56
第29図	7人孔表土出土遺物	57
第30図	7・8人孔出土遺物 表土・1・2・3・4、SD73A期・5・6	58
第31図	8人孔SD73A期出土遺物	59
第32図	8人孔SD73A期出土遺物	60
第33図	8人孔SD73B期出土遺物	61
第34図	8・9人孔出土遺物 表土・1・2・3、SK286・4	62
第35図	5・8人孔出土遺物	63
第36図	8人孔出土遺物	64
第37図	5・7・8人孔出土遺物 SS-21・1、SS-13・7	65
第38図	7・8人孔出土遺物	66

## 図 版 目 次

第1図版 調査地区.....	1. 調査地点遠景（南より） 2. 調査地点遠景（東より） 3. 調査風景
第2図版 1・2人孔.....	1. 1人孔調査区全景（北より） 2. 2人孔調査区全景（東より） 3. 2人孔調査区西壁断面
第3図版 3・4人孔.....	1. 3人孔調査区北壁断面 2. 4人孔調査区全景（西より） 3. 4人孔調査区北壁断面
第4図版 5・6人孔.....	1. 5人孔調査区全景（東より） 2. 6人孔調査区全景（東より） 3. 6人孔調査区南壁断面
第5図版 7人孔.....	1. 7人孔調査区全景（東より） 2. 7人孔調査区西壁断面 3. 7人孔SD73溝跡全景（東より）
第6図版 7人孔.....	1. 7人孔堆積状態（東より） 2. 7人孔SS21集石出土状態（南より） 3. 7人孔SS21集石出土状態（西より）
第7図版 8人孔.....	1. 8人孔SD73A期溝跡全景（東より） 2. 8人孔SD73B期溝跡全景（東より） 3. 8人孔SD73A・B期溝跡断面
第8図版 8・9人孔.....	1. 8人孔SS13集石出土状態（西南より） 2. 9人孔SK286土坑全景（東より） 3. 9人孔SK286土坑断面
第9図版 4・6・7人孔出土遺物	
第10図版 7人孔出土遺物	
第11図版 7人孔出土遺物	
第12図版 7・8人孔出土遺物	
第13図版 8人孔出土遺物	
第14図版 8人孔出土遺物	
第15図版 1・2人孔出土遺物	
第16図版 3・4人孔出土遺物	
第17図版 4人孔出土遺物	
第18図版 5人孔出土遺物	

- 第19図版 5 人孔出土遺物  
第20図版 6 人孔出土遺物  
第21図版 6 人孔出土遺物  
第22図版 6 人孔出土遺物  
第23図版 6 人孔出土遺物  
第24図版 6 人孔出土遺物  
第25図版 6 人孔出土遺物  
第26図版 6・7 人孔出土遺物  
第27図版 7 人孔出土遺物  
第28図版 7 人孔出土遺物  
第29図版 7 人孔出土遺物  
第30図版 7 人孔出土遺物  
第31図版 7・8 人孔出土遺物  
第32図版 8 人孔出土遺物  
第33図版 8 人孔出土遺物  
第34図版 8 人孔出土遺物  
第35図版 8 人孔出土遺物  
第36図版 8 人孔出土遺物  
第37図版 8・9 人孔出土遺物  
第38図版 繩文土器  
第39図版 繩文土器  
第40図版 石器  
第41図版 石器・鉄器



## I 調査に至る経過

昭和52年3月11日、国分寺市都市整備部下水道課より南部地区15号工事に伴う、立坑推進部分の埋蔵文化財の調査について、市教委社会教育課に届出があった。

この地域は、昭和51年度28次調査でSD23溝跡（僧寺々城西辺）SB39掘立柱建物跡、建物跡に伴う瓦積み基壇状遺構、SK163土坑が検出されており、良好な状態で遺構が保存されていることが判明している。また立坑部分の一部は国の指定地となっていることにより、文化庁、市下水道課、社会教育課で協議をおこなった結果、つぎの方法で本調査を実施することに協議がととのった。

- ①調査は、下水道推進人孔（立坑）工事区域No.1～No.9人孔の9カ所を対象とする。
- ②工事期間の短縮をはかるため、試掘を実施しないで本調査を行う。
- ③出土遺物が多いことが予想されるため、掘削は地表面より人力で行う。
- ④調査区内で重要な遺構が検出される場合は、再度協議し立坑の位置を変更する。
- ⑤奈良・平安時代遺構の検出後、縄文時代の遺構の検出を行う。

### 武藏国分寺遺跡調査会組織

（57年3月現在）

会長	星野亮勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副会長	滝口宏	東京都文化財保護審議会専門委員
"	内野孝治	国分寺市教育委員会委員長
理事	永峯光一	東京都文化財保護審議会専門委員
"	大川清	國立館大学教授
"	坂詰秀一	立正大学教授
"	本多良雄	国分寺市長
"	奥津精二	国分寺市教育委員会教育長
"	山本耿	東京都教育庁社会教育部文化課副主幹
"	坂本喜市	国分寺市社会教育委員会議々長
"	佐藤敏也	国分寺市文化財保護審議会委員
"	松井新一	"
"	吉田格	"
"	藤間恭助	"

### I 調査に至る経過

監 事	浅 見 正 平	国分寺市社会教育委員
"	齊 藤 龍 司	東京都教育庁社会教育部文化課・埋蔵文化財企画調査担当主査
事務局長	大 阪 喜 七	国分寺市教育委員会次長
事務局長補佐	江 端 昭 彦	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財係長
"	安 田 駿	国分寺市教育委員会文化財課長
事務局員	小 林 文 治	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長
"	鈴 木 晃	国分寺市教育委員会文化財庶務係

### 調 査 団

團 長	滝 口 宏	東京都文化財保護審議会専門委員
副 団 長	永 峯 光 一	東京都文化財保護審議会専門委員
"	大 川 清	国士館大学教授
"	坂 詰 秀 一	立正大学教授
調 査 員	西 臨 俊 郎	東京都教育庁社会教育部文化課学芸員
"	有 吉 重 藏	国分寺市教育委員会文化財課保護係員
"	福 田 信 夫	"
"	上 村 昌 男	"
"	平 田 貴 正	"
"	高 橋 和 恵	"
"	樋 口 喜 重 子	"

## II 調査地区の概観

武藏国分寺跡は、国分寺市西元町1～4丁目を中心とする付近一帯に所在し、僧寺金堂跡を中心にして、東西2km、南北1kmの範囲に遺構の分布が認められる。

遺構北方部分には、国分寺崖線（通称ハケ）と称される比高12mほどの急崖が東西方向に蛇行しながら走り、上面の武藏野段丘面、下面の立川段丘を境としている。従って、遺跡は両段丘にまたがって立地する特徴をもっている。

この崖線直下には、現在でも各所に豊富な湧水が認められ野川の水源の一つとなっているが、黒鐘公園付近に発源する湧水が流れる地域は、立川段丘と武藏野段丘との間にあって、比高差2m前後の浅い谷を形成している。この谷は黒鐘谷と呼ばれている。（鈴木隆介他 1974）

今回実施した第37次調査は、黒鐘谷に沿って僧寺々域内北側部分、No.1、2、3、4人孔調査区と僧寺を画する溝（SD23）西辺の西側部分、No.5、6、7、8人孔調査区、一部国分寺崖線の中位、No.9人孔調査区に当る。（第1図）

付近一帯は、第13次調査、市立第四中学校排水工事に伴う立会い調査の際、須恵器、土師器、瓦等の遺物が多量に出土した地域である。また、第28次調査においては多数の遺構が検出された（II）ことにより国分寺関連の遺構が予想されていたところである。

註1 SD23溝跡、SB39掘立柱建物跡、建物跡に伴う瓦積み基礎状遺構、SK163土坑等が検出される。  
「文化財の保護」12号

## III 層序

盛土 暗褐色（表土）、黒褐色土、ロームブロック等を含む搅乱土層、No.9人孔にて2.0～2.5mの層厚をもつ。おそらく国分寺崖線を宅地造成の際に掘削されてできたものと考えられている。

I 層 表土、地表面近くは、畑の耕作により搅乱をうけている。層厚は人孔によって異なるが、約1.0～2.0m前後の厚さをもつ。奈良・平安時代の遺物を多量に出土する。

II 層 黒褐色土層、僧寺々域内、No.2人孔から4人孔までは単一な土層であるが、僧寺々域外、No.5人孔から8人孔においては、炭化物、粘土粒、小礫、砂粒等の混入物により3区分（II<sub>1</sub>、II<sub>2</sub>、II<sub>3</sub>）できる。今回の調査では、奈良・平安時代の遺構は黒褐色土上面ないし中位で検出された。層厚は人孔により異なるが、約0.5～1.0m前後である。

III<sub>a</sub> 層 暗茶褐色土層、色調、粘性、混入物等により分層（III<sub>a1</sub>、III<sub>a2</sub>）が可能である。暗茶褐色土層上面ないし中位から、縄文時代の遺構が検出された。

- III<sub>b</sub>層 茶褐色土層、立川段丘面におけるローム層への漸移層に対比されるものと考えられる。
- IV TcL層 黄褐色土層、立川ローム層にあたる。
- IV M L層 黄褐色土層、武藏野ローム層にあたる。
- T G層 立川礫層にあたる。
- M G層 武藏野礫層にあたる。

(第2図)

## IV 調査工程と経過

各人孔の発掘調査にあたり、次の工程で作業を実施した。

- ①調査区の設定、市下水道工事課より、各人孔の位置を現地で設定してもらう。
- ②測量、武藏国分寺中袖線、トラバーポイントを現地に移動する。
- ③表土掘削、ベルトコンベアを使用し、人力で掘削作業を行なう。排土はダンプにより調査地区外に搬出する。
- ④奈良・平安時代遺構の検出と調査。
- ⑤縄文時代遺構の検出面までの掘削、表土掘削の方法と同じ。
- ⑥縄文時代遺構の検出と調査。
- ⑦立川礫層まで調査区の一部分を掘削、調査区の土層図を作成するための作業。

昭和52年10月27日からNo.2人孔より本調査を開始した。以下、下水道推進工事の工程進行にあわせて、No.1、6、5、4、7、8、3、9人孔の順序で調査を実施し、昭和52年4月17日で調査を終了した。調査総面積は約181.89m<sup>2</sup>である。

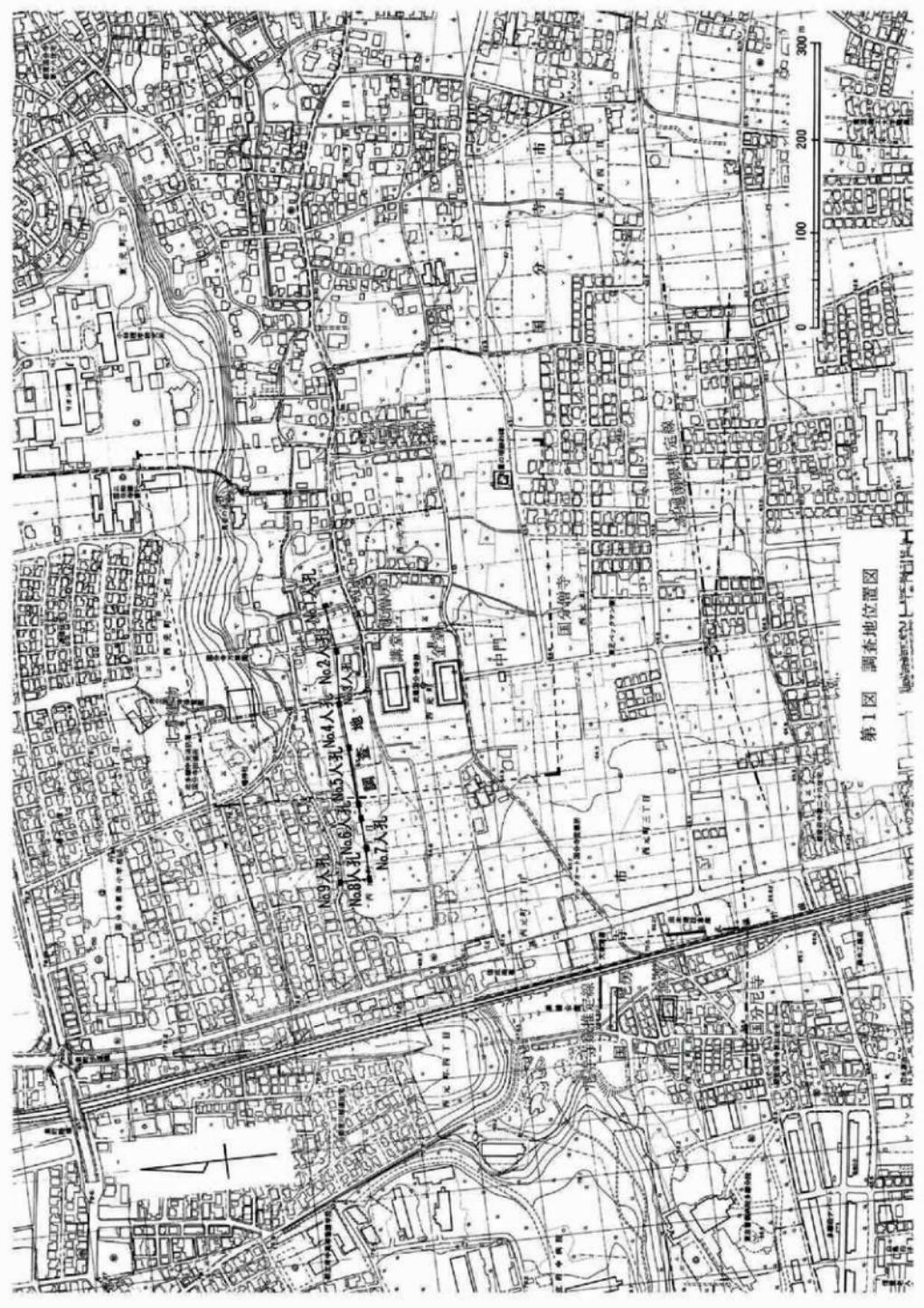
各人孔ともに表土層が厚く粘質であること、出土遺物が表土層より多量に包含されていること、黒鐘谷の谷底低地で土の堆積が複雑であることにより、遺構確認面までの掘削作業、遺構の検出作業に時間を費してしまった。また、ベルトコンベア等の機械の使用が不慣れのために、故障し調査が中断したこともあり、遺構数にくらべて調査期間が長くなってしまった。

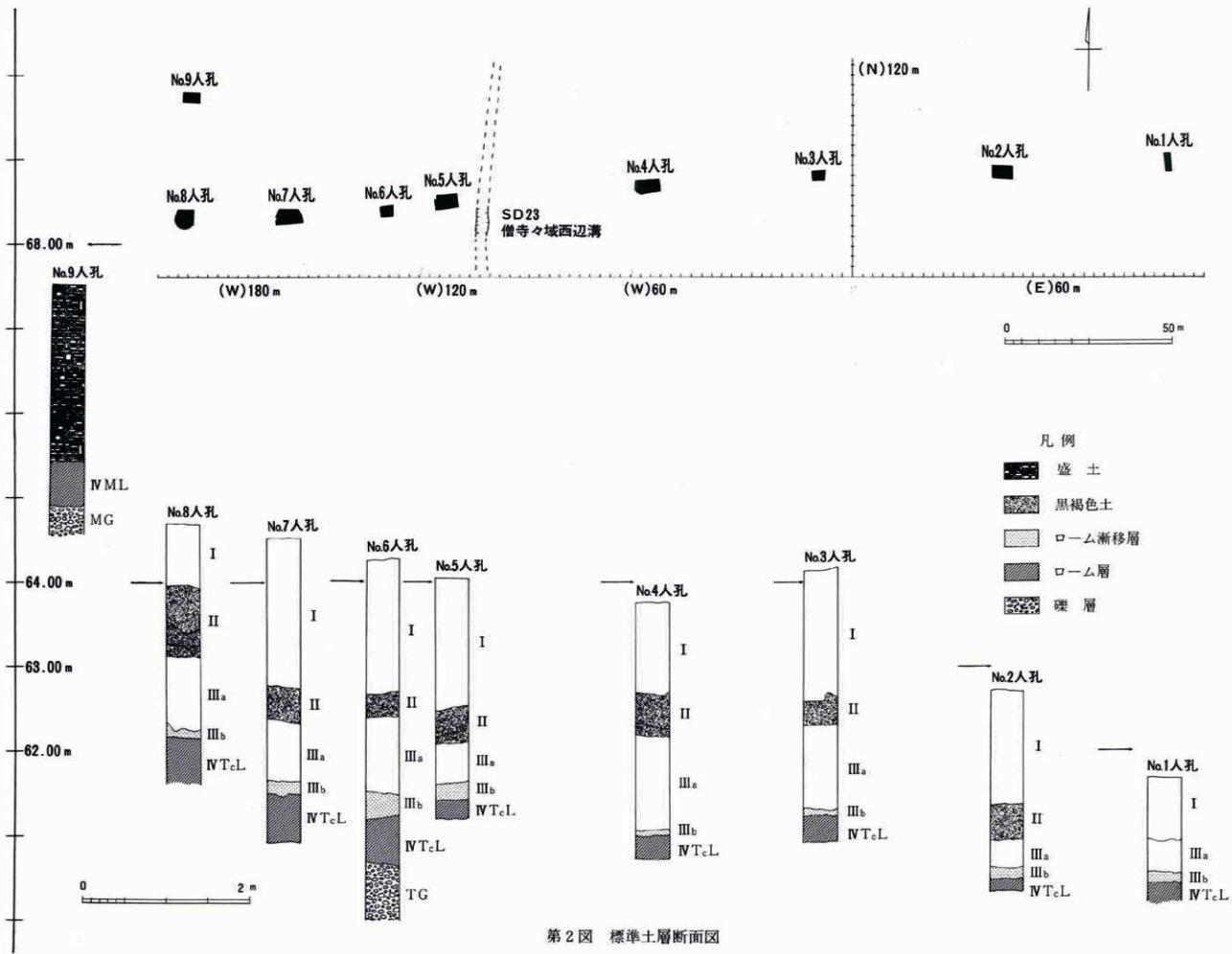
(第1表)

## IV 調査工程と経過

第Ⅰ表 調查工程表

第1図 調査地位置図





第2図 標準土層断面図



## V 検出遺構

本調査で検出された遺構は、武藏国分僧寺に關係を有する奈良・平安時代の遺構と、多喜窯遺跡に關係すると思われる縄文時代の遺構である。

各地区人孔の検出遺構を示しておく。(第3図)

No.1、2、3、5、6人孔、遺構は検出されない。

No.4人孔、硬質面、小穴3個

No.7人孔、SD73溝跡、SS21集石跡

No.8人孔、SD73溝跡、A期、B期、SS13集石跡

No.9人孔、SK286土坑、小穴2個

### No.1人孔 (第3図、第1図版)

僧寺中軸線から東へ94m、北へ94mの位置にあり、今回の調査区のいちばん東にあたる。III<sub>a</sub>層暗茶褐色土、III<sub>b</sub>層漸移層面において遺構の検出作業をおこなったが、遺構は確認されなかつた。

### No.2人孔 (第3図、第2図版)

僧寺中軸線から東へ45m、北へ90mの位置にある。II層黒褐色土上面と、III<sub>b</sub>層漸移層にて遺構の検出をおこなったが確認されず。

### No.3人孔 (第3図、第3図版)

僧寺中軸線から東へ10m、北へ90mの位置にあたる。遺構の確認をII層黒褐色土上面と、III<sub>b</sub>層漸移層上面においておこなったが検出されず。

### No.4人孔 (第4図、第3図版)

僧寺中軸線から西へ60m、北へ87mの位置にあたる。II層黒褐色土中において、硬質面、III<sub>a</sub>層暗茶褐色土上面において、小穴3個が検出される。

#### 硬質面

調査区の南東部分に位置し、全体の広がりについては未発掘部分に入っており把握できないが、調査区内では東西3m、南北5m、層厚は10~20cmを測る。僧寺々域SD23溝跡の上面にて検出される硬質面と同質のものである。

硬質面よりの遺物は検出されなかった。

#### 小穴

P-1は円形を呈し、長径58cm、短径50cm、深さ40cmを測る。P-2は梢円形を呈し、長径50cm、短径40cm、深さ25cmを測る。P-3は隅丸円形を呈し、長径55cm、短径38cm、深さ36cm

を測る。小穴の堆積土は、II層黒褐色土である。

小穴中よりの遺物は検出されなかった。

#### No.5人孔 (第3図、第4図版)

僧寺中軸線より西へ140m、北へ82mの位置にあたる。II層黒褐色土上面と、III<sub>a</sub>層暗茶褐色土上面において遺構の検出をおこなったが確認されなかった。

調査区西南断面において一部SD73溝跡のフク土と思われる砂礫層の痕跡が確認される。

#### No.6人孔 (第3図、第4図版)

僧寺中軸線より西へ168m、北へ78mの位置にあたる。II層黒褐色土上面と、III<sub>a</sub>層暗茶褐色土上面において遺構の検出をおこなったが確認されなかった。

調査区西壁断面においてSD73溝跡のフク土と思われる砂質層の痕跡が認められる。

#### No.7人孔 (第4・6図、第5・6図版)

僧寺中軸線より西へ168m、北へ78mの位置にあたる。II層黒褐色土上面において、SD73溝跡、III<sub>a</sub>層暗茶褐色土上面において、SS21繩文時代集石跡が検出される。

#### SD73溝跡

SD73溝跡は調査区を東西に走り、僧寺中軸線東西方向より約13度南偏する。北壁または底面は、四中排水管の掘削の際にこわされている。現存する溝の上端幅は約146cm、底面幅は約92cm、確認面からの深さ西側で約30cm、東側で約40cmで、断面形は逆三角形を呈する。溝の堆積土を観察すると、やや水分を含む砂粒と小礫が多量に混入している土層である。

出土遺物は、フク土中に瓦類、土師器、須恵器等が多量に含まれている。遺物等の出土状態より溝は二期にわたり存在した可能性も考えられるが、旧排水管等の掘削で大半がこわされているために遺構を区分することができず、溝の一括遺物として扱った。

また、SD73溝跡北側部分において焼土の堆積が2箇所認められた。範囲は直径30cmのほぼ円形のもの、調査区の北西コーナーにかかるおり全体の広がりは把握できないが、東西約220cm、南北約60cmのものである。焼土中より遺物は出土していない。

#### SS21集石跡

集石跡の規模と形態、北側部分は未発掘部に入っており全体の広がりは不明であるが、調査区内では東西約100cm、南北約150cm、厚さ10cmを測る。礫の大半は破碎礫であり、焼礫等は含まれていない。集石底面の状況は、土坑等の掘込みは検出されず、ただ単に平面的な広がりを示すものである。

出土遺物は、石槍（第37図、1）が1点出土している。

#### No.8人孔 (第5・6図、第7・8図版)

僧寺中軸線より西へ198m、北へ78mの位置にあたる。II層黒褐色土上面において、SD73A

期溝跡、II層黒褐色土中において、SD73B期溝跡、SK256土坑、III<sub>a</sub>層暗茶褐色土中より、SS13縄文時代集石跡が検出される。

#### SD73A期溝跡

溝は調査区を東西に走り、僧寺中軸線東西方向より約7度北偏し、調査区中心部で約11度南偏する。その規模は上端幅130cm、底面幅50cm、確認面からの深さ西側で20cm、東側で30cmで、断面形は丸味をもった逆台形を呈する。溝の堆積土は、砂粒と礫が多量に含まれる砂礫層である。

出土遺物は、フク土中に瓦類、土師器、須恵器、灰釉陶器が多量に検出される。

#### SD73B期溝跡

溝はA期と同じく調査区を東西に走り、僧寺中軸線より約3度北偏する。その規模は上端幅150cm、底面幅60cm、確認面からの深さ調査区西側で20cm、東側で35cmである。断面形は丸味をもった逆台形を呈する。溝の堆積土は、砂粒と小礫が多量に含まれた土層である。

出土遺物は、瓦類、土師器、須恵器が多量に含まれる。

#### SK256土坑

B期溝跡南側部分において検出される。平面形は隅丸長方形で、長径136cm、短径116cm、確認面からの深さ20cmである。

遺物は検出されなかった。

#### SS13集石跡

集石跡の規模と形態、全体の広がりは調査区の北東コーナーにかかるおり把握はできない。調査区内では東西約3m、南北約3.3m、厚さ0.35mを測る。礫は自然石が大半であるが、一部火熱された礫が含まれている。集石底面の状況は、SS21集石跡と同じく、底面に土坑状の掘込みは検出されず、平面的な広がりを示すものである。

出土遺物は、打製石斧（第37図、7）を1点出土している。

#### No.9人孔（第4図、第8図版）

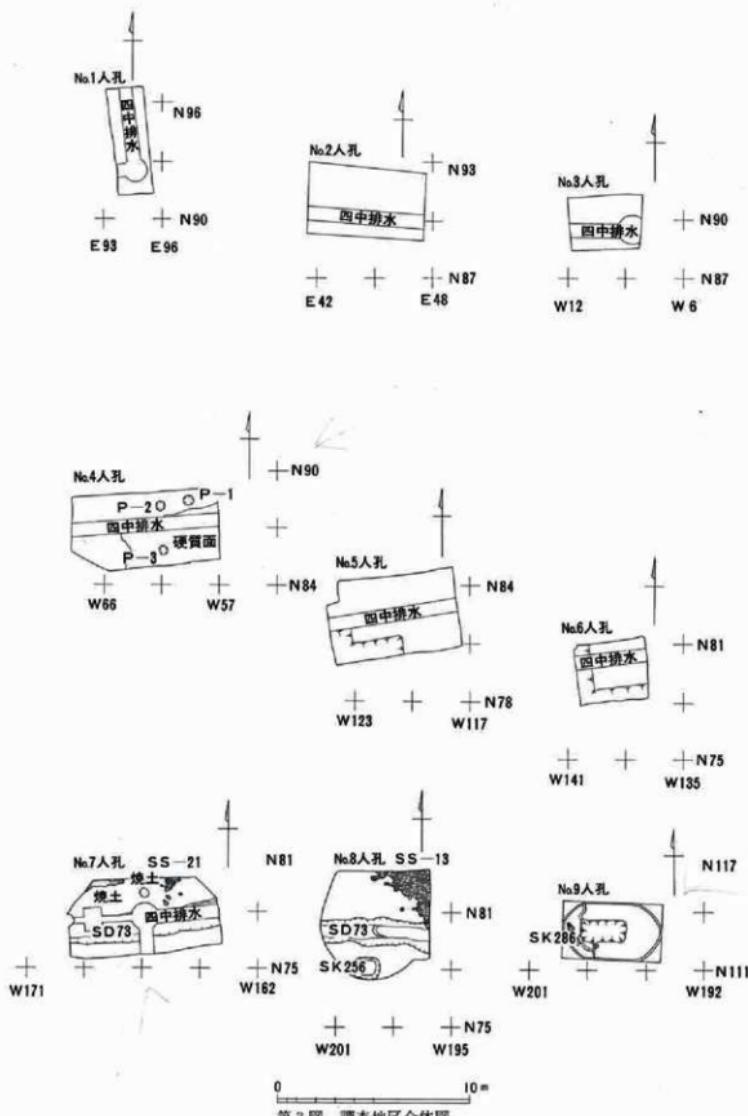
僧寺中軸線より西へ197m、北へ112mの位置にあたる。IVML層ローム上面において、SK286土坑が検出された。

#### SK286土坑

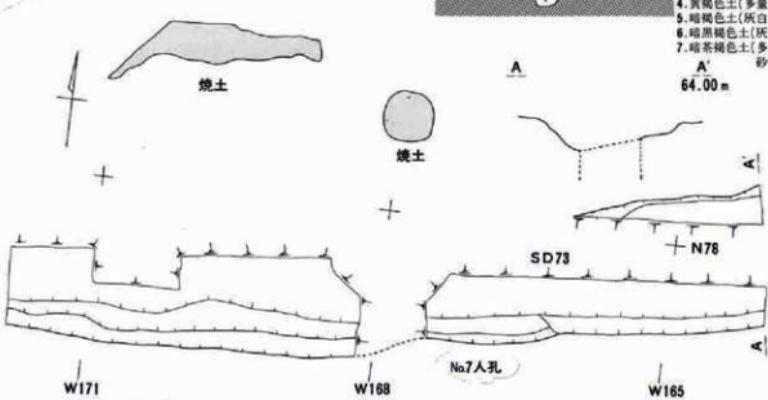
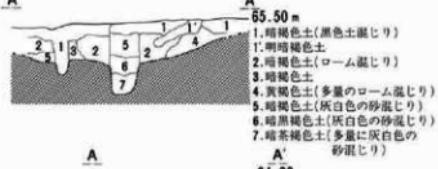
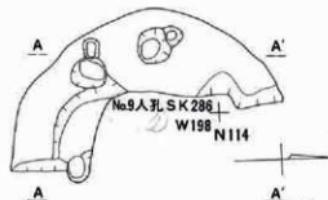
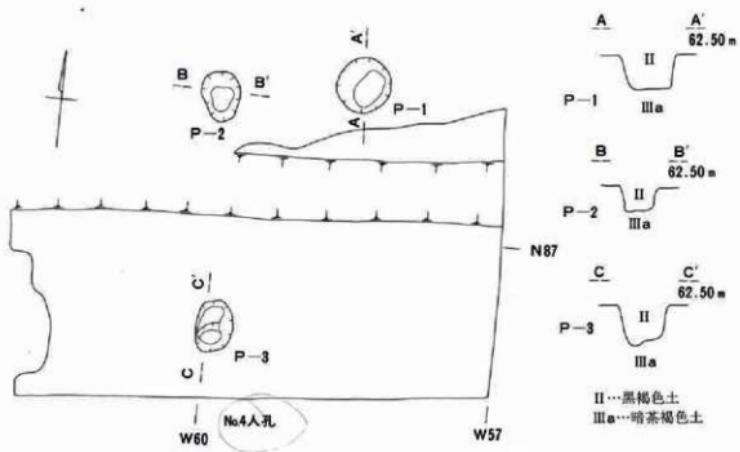
土坑の規模は、東側については擾乱により破壊されている。西側については調査区外にのびていてるために広がりは把握できない。堆積土は、暗褐色土に砂粒が混った土層が主体で、小穴2個がフク土中より検出される。

遺物は、瓦片が小量出土している。

V 檢 出 道 槽

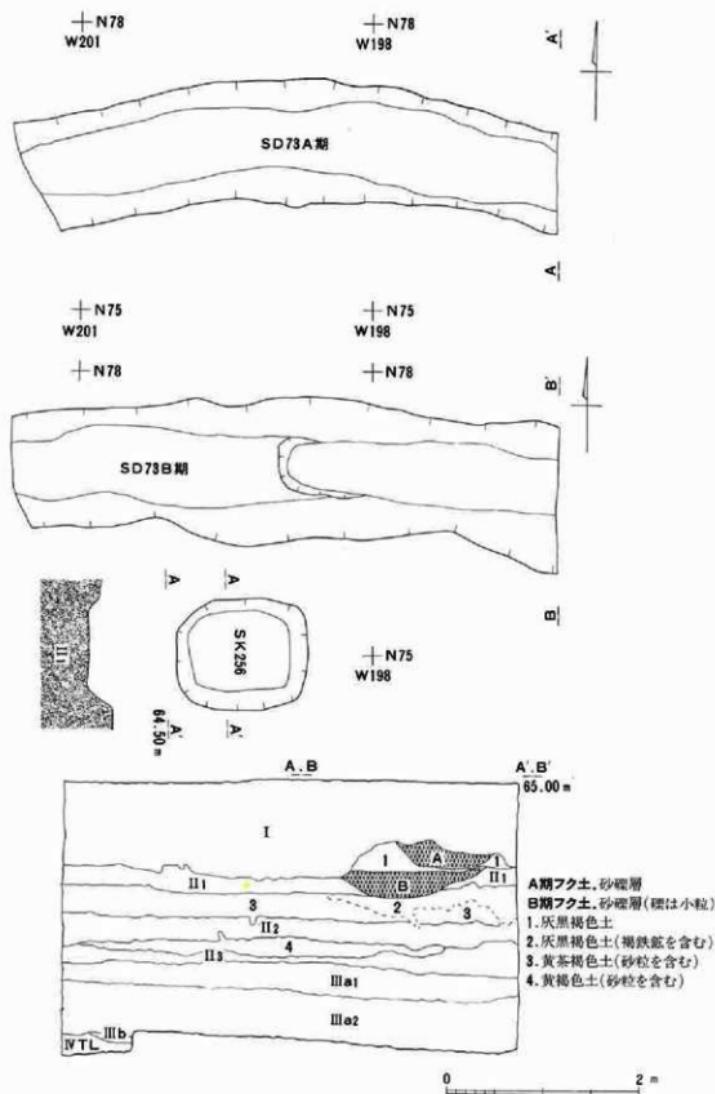


V 檢出遺構



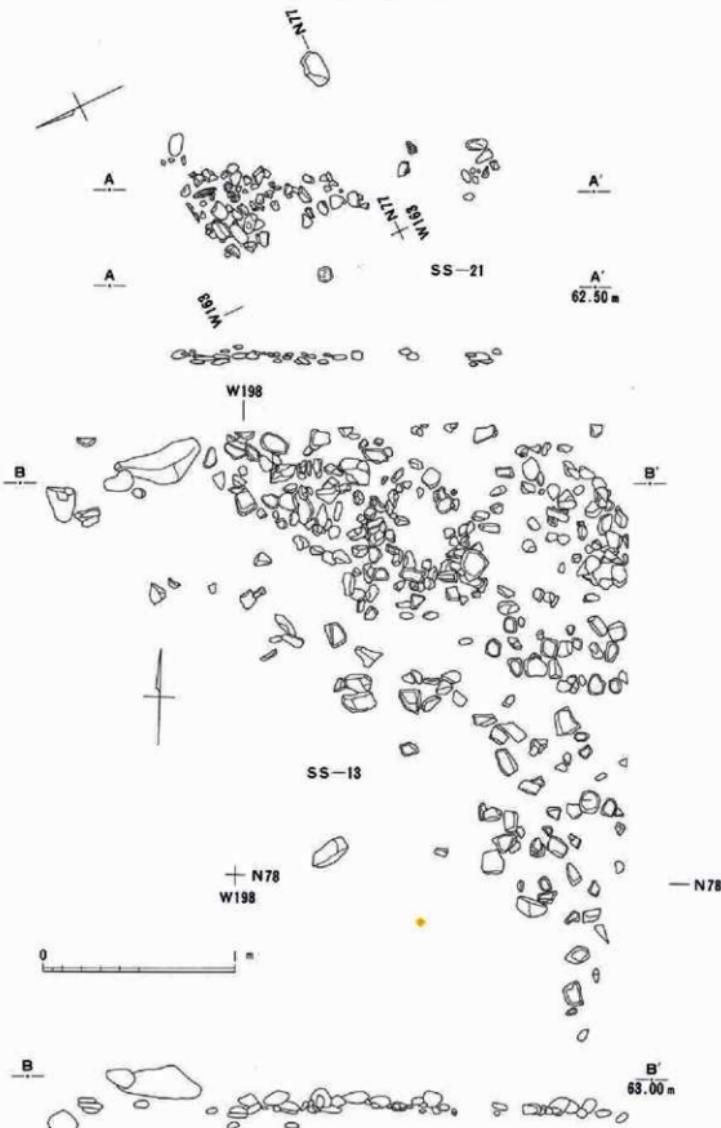
第4図 Na4人孔小穴・硬質面、7人孔SD73溝跡、9人孔土坑実測図

## V 檢 出 遺 構



第5図 No.8人孔SD73溝跡実測図

Y 檢 出 遺 槽



第6図 No.7・8入孔集石実測図

## VI 出 土 遺 物

今回の調査により出土した遺物には、土器・瓦・石製品・土製品・金属製品などがある。総量はコンテナ70箱ほどであり、その多くは表土層・SD73溝跡から出土している。

遺物の記述は全て一覧表によったが、表記の方法について以下補足説明しておきたい。

### (1) 各遺物共通

イ. 法量（寸法）数値 明朝体は完数値・復原数値・ゴシック体は残存数値を表わし、單位はcmである。

### (2) 土器

イ. 法量 上より順に口径・器高・底径を表わす。

ロ. 種別 土：土師器、須：須恵器、灰：灰釉陶器、綠：綠釉陶器

ただし須恵器については、還元焰焼成のものを須A、酸化焰焼成のものを須Bとした。

### (3) 瓦

#### 鎧瓦

イ. 内区文様および弁数 T：単弁、O：特異文

弁数は明朝体は完弁数・復原弁数、ゴシック体は残存数を表わす。

ロ. 外区文様 以下の組合せによる。ただし内外縁の区別のないものについては外縁欄に記入した。

形態 A 内外縁の区別のあるもの 内・外縁の文様 a 素文

B 内外縁の区別のないもの b 珠文

c その他

#### 宇瓦

イ. 内区文様 G：重弧文、KK：均正唐草文、HK：偏行唐草文、H：ヘラ書き文、T：竹管文、K：格子文（ヘラ書きは除く）、J：繩文、O：その他

ロ. 上・下外区、脇区文様 a 素文、b 珠文、c 長円珠文、d 圏線文、e 鋸齒文、f 凸線文、g その他

ハ. 頸の形態 以下の組合せにより記入

E 直線頸

a 凸面を整形するもの

b 瓦当部と女瓦部境部分のみ整形するもの

c 不整形のもの。

F 段類

F<sub>1</sub> 瓦当凸面と凹面が平行するもの

F<sub>2</sub> F<sub>1</sub>以外のもの

a 瓦当凸面および瓦当裏面を整形するもの

b 瓦当凸面のみ整形するもの

c 瓦当裏面のみ整形するもの

d 不整形のもの

G 曲線類

G<sub>1</sub> 瓦当凸面が内傾しながら女瓦凸面に移行するもの

G<sub>2</sub> 瓦当凸面がやや直線的に内傾しながら女瓦凸面に移行するもの

a 瓦当凸面を整形するもの

b 瓦当部と女瓦部境部分のみ整形するもの

c 不整形のもの

男瓦・女瓦

イ. 布目本数 3cm四方内での側端縁に平行する糸数と狭・広端縁に平行する糸数を表わす。

ロ. 繩叩き目本数 3cm四方内での繩数を表わす。

ハ. 繩の撚り L 繩圧痕が右上り左下りの傾斜をなすもの

R 繩圧痕が左上り右下りの傾斜をなすもの

ニ. 粘土板合せ目 佐原真氏の「平瓦桶巻き作り」での分類S・Zによる。

ホ. 布合せ目 粘土板合せ目の分類S・Zに準ずる。

## 土器一覧

4人孔

種 類 版	種 別 器 形	出 土 位 置	法 量	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
7 - 1 9回版	頸A-風字瓶	表 土		頸圓の後部の開きが大きい支撑は三角形をしている。	頸圓部分ナデ。細面ヘラ削り。	前部汚残存。 海綿骨針を含む。
7 - 2	頸A-壺	表 土	— 3.5 12.7	底部と体部のさかいに沈線あり。	外面は底部にかけ、腰にヘラ磨き。粘土の輪積み痕あり。	破片
7 - 3	底-皿	表 土	— 1.8 8.4	高台部分、台形を呈す。	底部、体部の内外面ともロクロによるナデ。高台部分ロクロによるナデ。先端は削りかけ。	破片

6人孔

種 類 版	種 別 器 形	出 土 位 置	法 量	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
7 - 4 9回版	頸A-环	表 土	13.3 3.7 5.0	体部はやや内側し、口唇部は肥厚する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	
7 - 5	頸A-环	表 土	14.1 3.6 5.0	底部より体部にかけて内側し口縁部はやや外反する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	脇残存。
7 - 6 9回版	頸B-小皿	表 土	9.9 2.4 5.9	口縁部外反する。口縁部内面に粘土の繊維目あり。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	汚残存。 カワラケ。
7 - 7 9回版	頸A-小皿	表 土	9.1 1.8 5.5	体部はやや内側し、口縁部はやや強く外反する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	脇残存。 カワラケ
7 - 8 9回版	縁-手付瓶	表 土	— — 12.5		ロクロ整形、内外面とも施釉。	内面にスス付着。釉は黄緑色。
7 - 9 9回版	土-瓶脚	表 土	— — 2.4		脚面に、粗頭紋。	

7人孔

種 類 版	種 別 器 形	出 土 位 置	法 量	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
8 - 1 9回版	土-环	S D 73 フク土	11.8 3.75 5.3	底部から口縁部にかけて、やや直線氣味に開く。	底部から体部下半分手持へラ削り。体部中央指痕有り。体部上半分から、口縁部にかけ横ナデ。	汚泥残存。
8 - 2 9回版	頸B-环	S D 73 フク土	12.0 4.0 6.8	底部から口縁部にかけて直線氣味に開く。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	汚泥残存。

## 土器一覧

掲 題 名	図 版	種 類	形 態	出 土 位 置	法 量	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
8 - 3 9回版	須A一环	S D 73 フク土	11.8 4.5 5.5	底部から体部にかけて内側し 口縁部は外反する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	光残存。		
8 - 4 10回版	須A一环	S D 73 フク土	11.8 3.4 5.7	底部から体部にかけて直線氣 味に開く。	底部回転糸切り。口縁に粘土 紐の巻き上げ痕あり。	光形。		
8 - 5	須A一环	S D 73 フク土	12.7 3.4 6.3	底部から体部にかけて内側し 口縁部にかけ外反する。	底部回転糸切り。体部に粘土 紐の巻き上げ痕あり。	底部残存。口縁わずか残存。		
8 - 6	須A一环	S D 73 フク土	12.5 3.95 7.0	底部から体部にかけて内側し 口縁部やや外反する。	底部回転糸切り。口縁部に粘 土紐の巻き上げ痕あり。	光残存。		
8 - 7	須A一环	S D 73 フク土	12.0 3.8 7.0	底部から口縁部にかけて直線 氣味に開く。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	光残存。		
8 - 8 10回版	須A一环	S D 73 フク土	11.8 3.6 6.6	底部から体部にかけて内側し 口縁部はやや外反する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。 口縁部に粘土紐の巻き上げ痕 あり。	光残存。		
8 - 9	須A一环	S D 73 フク土	12.0 3.5 5.8	底部から口縁部にかけて直線 氣味。口縁はやや外反する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	光残存。		
8 - 10	須A一环	S D 73 フク土	11.6 3.8 5.9	底部から体部にかけて内側し 口縁部はやや直立氣味。	ロクロ整形、底部回転糸切り。 粘土紐の巻き上げ痕あり。	光残存。前縁骨針を含む。		
8 - 11 10回版	須A一环	S D 73 フク土	2.6 6.9		ロクロ整形、底部回転糸切り。	底辺に「土」のヘラ書き文字あり。		
8 - 12	須A一皿	S D 73 フク土	15.8 1.65 7.1	口縁部水平に開く。	ロクロ整形。	破片		
8 - 13 10回版	須A一皿 高台付	S D 73 フク土	14.3 3.4 5.9	底部から体部にかけて内側し 口縁部は強く外反する。	ロクロ整形、底部糸切り後高 台部分付着し横ナテ。体部に 粘土紐の巻き上げ痕あり。	光残存。		
8 - 14	須A一皿	S D 73 フク土	15.0 6.2 7.2	底部から体部にかけて内側し 口縁部はやや外反する。	底部回転糸切り。	光残存。		
9 - 1 10回版	須B一皿	S D 73 フク土	15.0 5.9 8.4	底部から体部にかけて直線氣 味に立ち上り。口縁部はやや 外反する。	ロクロ整形、底部回転糸切り 後外縁部へラ削り。	光残存。内面タール付着。		
9 - 2 10回版	須A一鉢 高台付	S D 73 フク土	18.7 9.95 9.3	底部から体部にかけて内側し 口縁部やや外反する。高台部 分「へ」の字状に開く。	ロクロ整形。高台部分貼付け 板、ロクロによるナテ。	光残存。		
9 - 3	灰一 短頭壺	S D 73 フク土	8.4 1.9	口縁部短く。やや内傾し肩 部は撫で肩。	ロクロ整形、口縁肩部ナテ。	口縁破片。物は銀灰色に黒色の斑点。		

## 土器一覧

施用	國版	種別形	出位	土質	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
9 - 4	灰一 長頸瓶	S D 73 フク土	14.0 1.0		口部はラッパ状に開く。	施釉は刷毛塗り。	釉は緑褐色。 口縁の小破片。	
9 - 5	灰一 長頸瓶	S D 73 フク土	— —	— —	7.8		ロクロ整形。内外面とも丁寧なナナ。頂部・肩部の二段巻き。施釉は刷毛塗り。	頭部残存。釉は薄灰褐色。
9 - 6	須A一塊	S D 73 フク土	19.1 8.0		体部から口縁にかけて内側し 口縁部でやや外反する。	体部・口縁部の内外面ともロ クロによるナナ。	底部なし。体部沿残存。	
9 - 7	須A一塊	S D 73 フク土	17.6 7.2		体部はやや内側しながら立ち 上り、口縁は直線的である。	体部・口縁部の内外面ともロ クロによるナナ。高台の付いた可能性あり。	底部なし。体部沿残存。	
9 - 8	須A一塊	S D 73 フク土	15.4 5.9		体部は内側気味に立ち上り。 口縁部はやや外反する。	体部内外面ロクロによるナナ 後、体部外面下半分ヘラ削り。	底部なし。沿残存。	
9 - 9 10国版	灰一 長頸壺	S D 73 フク土	6.1 19.6 6.0		頭部から口縁にかけて直立氣味に立ち上り、口縁で外反する。	頭部・肩部・脚部ともロクロ によるナナ。底部圓板系切り。	完形。	
10 - 1 11国版	土一環	表 土	11.8 3.65 6.4		底部から体部にかけて内側し 口縁部はやや外反する。	底部は手持ヘラ削り。体部外 面に指頭底あり。	内面スス付着。赤色スコリア状物質 を含む。	
10 - 2 11国版	須B一塊 高台付	表 土	— — 2.75 8.3		高台部分外反する。	高台部分貼付け後ナナ。底部 内面墨書き文字あり。	赤色スコリア状物質を含む。	
10 - 3	土一環	表 土	12.2 3.3 6.0		底部から体部にかけて内側し 口縁部はやや外反する。	底部から体部下端にかけてヘ ラ削り。体部中央指頭痕あり。	赤色スコリア状物質を含む。	
10 - 4 11国版	須A一環	表 土	12.0 3.4 6.4		底部から口縁部にかけてやや 直線気味に開く。	ロクロによる糸切り後、中心 部分糸切り痕残してヘラ削り。	完形。	
10 - 5 11国版	須A一環	表 土	12.1 3.7 6.6		底部から体部にかけて内側し 口縁部はやや直立氣味に開く。	ロクロによる糸切り後、中心 部分糸切り痕残してヘラ削り。	海綿骨針を含む。	
10 - 6	須B一環	表 土	12.9 4.2 5.3		底部から体部にかけて直線氣 味に開き、口縁部はやや外反 する。	底部回転糸切り。	赤色スコリア状物質を含む。	
10 - 7 11国版	須A一環	表 土	11.9 3.9 6.9		底部から体部にかけて内側し 口縁部はやや外反する。	底部回転糸切り。体部内面に 粘土紐の巻き上げ跡あり。	ほぼ完形。海綿骨針を含む。	
10 - 8 12国版	須A一環	表 土	12.8 4.9 6.3		底部から体部にかけて内側し 口縁部はやや直立氣味に開く。	底部回転糸切り。口縁部に粘 土紐の巻き上げ跡あり。	完形。黒色スコリア状物質を含む。	
10 - 9	須A一皿	表 土	13.6 2.8 5.7		底部から体部にかけて直線氣 味に開き、口縁部はやや外反 する。	底部回転糸切り。	底部沿残存。口縁一部残存。	

## 土器一覧

7人孔

拂 団 版	種 別 器 形	出 土 位 置	体 量	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
10 - 10	須A一环	表 土	12.3 3.7 5.5	底盤から体部にかけて直立気味に開き、口縁部はやや外反する。	底部回転糸切り、口縁に粘土の継ぎ目あり。	底部残存。海綿骨針を含む。
10 - 11	須A一塊	表 土	17.1 6.0 9.1	底盤から体部にかけて内凹し口縁部でやや外反する。	体部から口縁部にかけて、ロクロによるナギ。底部は回転糸切り後、外縁部へラ削り。	底部残存。海綿骨針を含む。
10 - 12	須A一羽蓋	表 土	17.1 3.7 —	底部は「ハ」の字状に開く。	ロクロ整形。	有残存。
10 - 13 12団版	須A一長頸瓶	表 土	8.5 10.0 —	口縁部ラッパ状に開く。	ロクロ整形、頸部と胴部の接合は三段継ぎ。	
10 - 14 11団版	須B一壺	表 土	— 9.6 —	最大径は肩部にあり。	外面は肩・胴部とも横ナギ。一部へラ削り。内面の肩部に指頭痕あり。	胴部のみ残存。海綿骨針を含む。
11 - 1 12団版	灰一塊	表 土	— 1.8 6.0	高台部分直立した四角形を呈す。	高台貼り付け後、ロクロによるナギ。底部内面に焼台の底あり。施物は流しがけ。	底部残存。釉は薄黄緑色
11 - 2	灰一塊	表 土	— 1.8 7.0	底部外面に段を有する。高台は三角形を呈する。	高台貼り付け後、ロクロによるナギ。体部に点々と釉がかかる。	底部破片
11 - 3	灰一塊	表 土	— 1.9 7.3	高台部分や内側する三角高台である。	底部ロクロによるへラ削り後高台を付け、ロクロによるナギ。	破片。
11 - 4	灰一塊	表 土	— 1.9 7.0	高台部分や内側する三角高台である。	高台部分付着後、ロクロによる横ナギ。施物は濁け掛け。	底部残存。釉は緑色。
11 - 5	灰一塊	表 土	— 2.0 8.0	高台部分や内側する三角高台である。	底部内面に重ね焼痕あり。高台部分付着後ロクロによるナギ。	底部残存。底部内面研に使用した可能性あり。
11 - 6	灰一塊	表 土	— 3.8 8.4	高台部分「ハ」の字状に開く三日月型である。	底部下端より底部をへラ削り後、高台付着し横ナギ。	底部沿剥残存。
11 - 7	灰一塊	表 土	— 2.85 7.6	高台部分「ハ」の字状に開く、逆三角形高台である。	高台ロクロによる横ナギ。底部内面重ね焼痕あり。施物は濁け掛け。	内外面ヌス付着、釉は薄灰緑色。
11 - 8	灰一壺	表 土	— 4.0 5.9		底部回転糸切り。	
11 - 9	灰一長頸瓶	表 土	12.7 1.75	口縁部ラッパ状に開く。	頸部内外面ともロクロによる横ナギ。施物は刷毛塗り。	口縁部の破片。
11 - 10	灰一長頸瓶	表 土	— 7.65		頸部内外面ともロクロによる横ナギ。刷毛塗り。	頸部破片。

## 土器一覧

7人孔

種 固 版	種 別 形	出 土 位 置	法 量	器 形 の 特 徴	成・整 形 の 特 徴	備 考
11 - 11	灰 - 長頸壺	表 土	4.5		ロクロ整形によるナデ。口縁部と胴部の接合は二段巻き。	破片
11 - 12	灰 - 長頸壺	表 土	1.6		ロクロ整形によるナデ。口縁部と胴部の接合は三段巻き。	破片
11 - 13	灰 - 漆 高台付	表 土	4.0 10.0	高台部分「へ」の字状に開く。 三角高台である。	ロクロ整形によるナデ。刷毛塗り。	破片
11 - 14	灰 - 壺	表 土	1.2 8.8	高台部分直立する三角高台である。	ロクロ整形によるナデ。	底部破片
11 - 15	須A - 环	黒褐色土	12.0 4.0 6.8	底部から口縁部にかけて、やや直線気味に立ち上り。口縁部はやや外反する。	ロクロ整形、底部回転糸切り後、外縁部ヘラ削り。	足残存
11 - 16	須A - 壺	黒褐色土	8.6 6.7	肩部「く」の字状を呈す。	ロクロ整形、体部内外面ナデ。口縁部ナデ。	口縁部少存。

8人孔

種 固 版	種 別 形	出 土 位 置	法 量	器 形 の 特 徴	成・整 形 の 特 徴	備 考
12 - 1	須B - 环 高台付	S D73 - A期 フク土	2.3 7.0	高台部分三角である。	底部回転糸切り。高台貼り付後横ナデ。	底部のみ。赤色スコリア状物質含む。
12 - 2	須B - 环	S D73 - A期 フク土	2.7 6.0		底部回転糸切り。	底部のみ。赤色スコリア状物質含む。
12 - 3 12回版	須B - 环 高台付	S D73 - A期 フク土	3.0 8.4	高台部分は強く外反する。	ロクロ整形による高台部分横ナデ。	高台のみ。赤色スコリア状物質含む。
12 - 4 12回版	須B - 器台	S D73 - A期 フク土	4.7 11.7	台部は直線ぎみに開き下端は外反する。	ロクロ整形によるナデ。粘土の織目有り。	台部のみ。スス付着赤色スコリア状物質含む。
12 - 5	須B - 体 高台付	S D73 - A期 フク土	5.8 16.6	器内は厚い。	ロクロ整形による横ナデ。	台部一部残存。
12 - 6	土 - 器 台 付	S D73 - A期 フク土	4.75		底部内面タタキ板有り。体部内外面横ナデ。	台部内面スス付着台部一部残存。
12 - 7 12回版	須A - 环	S D73 - A期 フク土	13.3 3.9 5.1	底部より口縁部にかけて外傾する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	ほぼ完形。

## 土器一覧

排 区 域	図 版	種 類	器 形	出 土 位 置	法 量	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
12 - 8 12回版		頸A-环	S D73-A期 フク土	12.4 3.85 5.4	底部より口縁にかけて内寄しながら外傾し口縁部は、外反する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	完形。	
12 - 9		頸B-环	S D73-A期 フク土	12.5 4.5 5.25	底部より、体部にかけやや内寄する。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	肩残存。底部、スス付有	
12 - 10		頸A-环	S D73-A期 フク土			ロクロ整形	破片。墨書き文字有 文字は不明。	
12 - 11		頸B-皿	S D73-A期 フク土	1.9 4.9	底部より、体部にかけて、大きく開く。	ロクロ整形、底部回転糸切り。	底部残存。	
12 - 12		頸A-环 高台付	S D73-A期 フク土	2.5 2.2	高台部分「ハ」の字状に開く三角高台。	底部回転糸切り。高台貼り付け後横ナデ。	底部のみ。	
12 - 13 12回版		頸A-皿 高台付	S D73-A期 フク土	14.5 2.0 6.4	底部より口縁にかけて大きく開く水平に近い。	底部糸切り、高台部貼り付け後ナデ。	光裸容。	
13 - 1		頸A-环 高台付	S D73-A期 フク土	3.4 8.1	高台部分「ハ」の字状に開く三角高台。	ロクロ回転による糸切り後、高台部を付ける。先端部へラ削り。	底部のみ。	
13 - 2		頸A-环 高台付	S D73-A期 フク土	3.2 9.3	高台部分は舌形を呈す。	ロクロ回転糸切り後、高台部を付けナデ。	底部のみ。	
13 - 3		頸A-蓋	S D73-A期 フク土	2.8	宝珠状つまみ。	つまみの部分ロクロ回転によるナデ。	つまみ残存。	
13 - 4		頸A-蓋	S D73-A期 フク土	1.5	宝珠状つまみ。	つまみの部分天井部ロクロによるヘラ削り。	つまみ部分と天井部残存。	
13 - 5		頸A-蓋	S D73-A期 フク土	1.7	擬宝珠状つまみ。	天井部ナデとヘラ削り。	つまみ部分と天井部残存。	
13 - 6		頸A-鉢	S D73-A期 フク土	6.8 8.7	底部から体部にかけ直立ぎみに立上る。器内は厚い。	底部内面ロクロによるナデ、外表面はヘラ削り。体部粘土ひもまき上げ痕有り。	光裸容。	
13 - 7		頸A-大腹	S D73-A期 フク土	40.9 4.8	口縁はラバ状に開く。	口縁部ロクロによるナデ。	口縁部破片	
13 - 8		頸A-蓋	S D73-A期 フク土	17.1 6.9	口縁部は鶴頭状。	口縁部ロクロによるナデ。	口縁部破片	
13 - 9		頸A-蓋	S D73-A期 フク土	4.5 12.4	器肉は厚い。	高台部ロクロによるナデ。	底部破片	

## 土器一覧

博物館	國版	種別	器 形	出 土 位 置	法 量	器 形 の 特 徴	成・整 形 の 特 徴	備 考
13 - 10	須A-大甕	S D73-A期 フク土	口縁部は鶴頭状。			頸部外面、鶴状工具による波状の線あり。	口縁部破片	
13 - 11	須A-大甕	S D73-A期 フク土	器肉は厚い。		3.7 12.95	体部内面、下部へラ状工具によるナデ。	底部体部一部残存	
13 - 12	灰-壺	S D73-A期 フク土	高台部分やや内側した三日月高台。		3.5 7.7	ロクロ整形高台部貼り付後ナデ。施釉は横け掛する。	底部破片釉は灰白色。	
13 - 13 13国版	灰-壺	S D73-A期 フク土	高台部分やや内側した三日月高台。		1.6 6.6	ロクロ整形高台部貼り付後ナデ。	底部汚残存釉は薄黄色。	
13 - 14 13国版	灰-壺	S D73-A期 フク土	高台部分やや外反した舟形を呈す。		2.0 6.5	ロクロ整形、高台部貼り付後ナデ。内面に重ね焼き底有り。施釉は刷毛塗りする。	底部汚残存釉は黄緑色。	
13 - 15	灰-壺	S D73-A期 フク土	やや内側した三日月高台。		1.5 6.8	ロクロ整形、高台部貼り付後ナデ。施釉は刷毛塗りする。	底部のみ。釉は薄緑色。	
13 - 16 13国版	灰-壺	S D73-A期 フク土	高台部分直立した三日月高台。		3.0 6.6	ロクロ整形、高台部貼り付後ナデ。施釉は刷毛塗りする。	底部汚残存釉一部分、釉は薄緑色。	
13 - 17	灰一段壺	S D73-A期 フク土	体部内外面に段を有し口縁部直線に閉く。		18.8 2.0	ロクロ整形。	口縁部破片	
13 - 18 13国版	灰-手付瓶	S D73-A期 フク土			2.5 10.3	ロクロ整形、糸切り後、外縁部へラ削り。施釉は刷毛塗りする。	底部一部残存	
13 - 19 13国版	青磁-壺	S D73-A期 フク土	底部外面凹む。		1.9 5.4	ロクロ整形、底部蛇の目高台。	底部汚残存釉は薄黄緑色。	
14 - 1	土-杯	S D73-B期 フク土	底が浅く丸底。		11.7 2.4	底部へラ削り。体部内外面共にナデ。	酸化鉄分によるサビ、スス付着。破片	
14 - 2	土-杯	S D73-B期 フク土	体部下部内側する。		1.9 6.8	底部へラ削り。体部指頭底あり。	底部のみ汚残存	
14 - 3	土-杯	S D73-B期 フク土	底部から口縁部にかけてやや内側し、口縁部はやや外反する。		4.0 5.5	底部手持へラ削り。体部内外面共ナデ。指頭底有り。	汚残存	
14 - 4	土-杯	S D73-B期 フク土	器肉は薄い。底部から口縁部にかけ直線立ち上り。口縁部は内側する。		11.0 3.2 8.0	底部手持へラ削り、体部内外面共ナデ。指頭底有り。	赤色スコリア状物質を含む。破片	
14 - 5	土-杯	S D73-B期 フク土			2.0 5.25	底部内面から体部にかけへラ削き。	汚残存 赤色スコリア状物質を含む。	

## 土器一覧

排 國 版	種別 器形	出 土 位 置	法 量	器 形 の 特 徴	成・整 形 の 特 徴	備 考
14 - 6	頸B-环 高台付	S D73-B 期 フク土	2.0 6.5	高台部直形状。	底部糸切り後高台部を貼り付け後ナデとヘラ削り。	底部糸と体部破片
14 - 7	土 - 环	S D73-B 期 フク土	18.8 8.9 8.4	底部から体部にかけ直線込みに立ち上り、口縁部はやや外反する。	底部ナデ体部内外面上端にかけ横ナデ。体部外面指頭痕あり。	汚残存底部内面から体部にかけてスス付着赤色スコリア状の物質有り。
14 - 8	土 - 瓢	S D73-B 期 フク土	15.2 4.25	「コ」の字状の口縁を有する。	口縁部内外面横ナデ。	口縁部のみ。
14 - 9	頸A-环	S D73-B 期 フク土	13.2 3.5 7.7	底部から口縁部にかけて直線込みに立ち上がる。	底部ロクロ回転糸切り後、外縁部ヘラ削り。	汚残存
14 - 10	頸A-环	S D73-B 期 フク土	12.4 3.8 7.2	底部から体部にかけやや外傾し、体部上端やや内脣し、口縁部外反する。	底部ロクロ回転糸切り、体部ロクロによるナデ。口縁部ナデ。	完形。海綿状骨針の物質有り。
14 - 11	頸A-环	S D73-B 期 フク土	12.15 3.25 7.3	底部から口縁部にかけてやや直線的。口縁部やや外反する。	底部ロクロ回転糸切り、体部口縁部ロクロによる横ナデ。	完形。
14 - 12	頸A-环	S D73-B 期 フク土	12.9 3.6 7.4	底部から体部にかけてやや内脣し、口縁部外反する。	同 上	汚残存。 粘土の跡目有り。
15 - 1	頸A-环	S D73-B 期 フク土	13.4 4.1 6.3	体部はやや内脣し、口縁部にかけやや外反する。	底部ロクロ回転糸切り。体部粘土ひも有。体部、内外面ロクロによるナデ。	汚残存
15 - 2	頸A-环	S D73-B 期 フク土	10.35 3.7 6.3	底部から口縁部にかけ直線込み、全体にやや器内は厚い。	底部ロクロ回転糸切り。体部内外面共にロクロによるナデ。	汚残存 一部スス付着
15 - 3	頸A-环	S D73-B 期 フク土	13.7 4.3	体部はやや外反し器内は薄い。	体部内外面共ロクロによるナデ。口縁部、粘土巻上げ痕有り。	底部なし。体部内面スス付着
15 - 4	頸A-环	S D73-B 期 フク土	2.4 4.7	全體に器内は薄く、底部から体部にかけ外脣する。	底部ロクロ回転糸切り。	汚残存
15 - 5	頸B-环	S D73-B 期 フク土	15.8 5.4 6.25	体部は内脣し、口縁部外反する。	底部ロクロによる糸切り。体部内外面ロクロによるナデ。	一部欠損 口縁部スス付着。
15 - 6	頸A-环 高台付	S D73-B 期 フク土	13.7 3.9 9.4	底径が大きく器内は厚い。	底部糸切り。高台部を貼り付け後、体部口縁部ナデ。粘土ひも有り。	汚残存 内外面スス付着。
15 - 7	頸A-皿	S D73-B 期 フク土	15.3 2.3 6.0	底部から口縁部にかけ直線的に外傾する。	底部ロクロによる糸切り。体部内面はロクロによるナデ。	汚残存

## 土器一覧

博 蔵 版	種 別 器 形	出 土 位 置	法 量	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
15 - 8	須A-壺	S D73-B期 ヲ土	2.2 7.7		底部ロクロによる系切り。	底部のみ鉄さび付着。
15 - 9	須A-壺 (高台付)	S D73-B期 ヲ土	4.7 7.15	底部から体部にかけ直立立ち上る。器肉は厚い。	底部ロクロによる系切り後中心を残し、その他ナヂ。	汚穢存
15 - 10	須A-壺	S D73-B期 ヲ土	15.0 5.5 7.5	体部中央内側し、口縁、高台は外反する。	底部ロクロによるナヂ。口縁部ナヂ。	汚穢存
15 - 11 14回版	須A-壺	S D73-B期 ヲ土	8.7 8.9	高台部分「ハ」の字状に聞く凸形を呈す。	底部静止系切り後、高台を付ける。	底部汚穢存 自然鉄さび付着。
16 - 12	須A-壺	S D73-B期 ヲ土	23.6 4.0	口縁部内傾し断面は長方形を呈す。	ロクロ整形。天井部へラ削り。	口縁部のみ鉄さび付着。
15 - 13	須A-蓋	S D73-B期 ヲ土	3.5	瓶宝珠状 天井部器肉は厚い。	ロクロ整形。天井部へラ削り。	天井部汚穢存 スス付着。
15 - 14	須A-蓋	S D73-B期 ヲ土	16.9 3.6	口縁部先端部分やや外反する。	ロクロ整形。天井部へラ削り。	口縁部のみ。
16 - 1	須A-蓋	S D73-B期 ヲ土	1.6		天井部外面はヘラ削り。	汚穢存
16 - 2	須A-長頸瓶	S D73-B期 ヲ土	8.5		首部外面ロクロ回転ナヂ。二段研ぎ、胴部ロクロ回転によるナヂ。	汚穢存
16 - 3 14回版	須A-羽量	S D73-B期 ヲ土	3.3		ロクロ整形。羽の部分体部につけた後ナヂ。	汚穢存 鉄さび付着。
16 - 4	灰-壺	S D73-B期 ヲ土	1.7 7.4	高台部分外反した台形を呈する。	底部ロクロによる系切り後高台部略り竹抜ナヂ。	底部のみスス付着。 物は薄緑色。
16 - 5 14回版	灰-壺 (高台付)	S D73-B期 ヲ土	10.0 5.25	肩部のはりが強い。器肉は厚い。高台はカギ形を呈する。	高台部ロクロによるナヂ。胴部ロクロによるナヂ。後中央部分へラ削り。	首部欠損 肩部に緑色の釉。
16 - 6	灰-壺 (高台付)	S D73-B期 ヲ土	3.9 7.8	器肉はやや厚い。高台部は長方形を呈する。	高台部ロクロによるナヂ。	底部汚穢存 物は緑色。
16 - 7	灰-長頸瓶	S D73-B期 ヲ土	9.4 4.4	口縁部はラッパ状に聞く。	頭部ロクロによるナヂ。施釉は済み。	口縁部汚穢存
16 - 8 14回版	須A-蓋 蓋土	—	2.0	高台状つまみ。	天井部中央ロクロ回転によるヘラ削り。	天井部汚穢存 天井部内面研に使用した痕跡有り。

## 土器一覧

地図版	種別 器形	出 土 位 置	法 量	器 形 の 特 徴	成・整 形 の 特 徴	備 考
16 - 9 14図版	頸A-蓋	表 土	18.8 5.0	宝珠状つまみ。天井部から口縁部にかけて内凹する。	天井部ロクロ圓軸によるヘラ削り。体部ロクロによるナデ。	口縁部一部欠損
16 - 10 14図版	頸A-壺 (高台付)	表 土	9.5 10.0	高台部は低く「ハ」の字状。底部と台部の間に工持による穴有り。底部から体部にかけて大きく内凹する。	ロクロ整形高台部へラ削り、底部内面タキ痕有り。体部へラ削り。体部中央より上に太い沈線あり。	另残存
16 - 11 14図版	底 - 壺	表 土	6.65 11.5	器肉は厚い。台部は低く内面凹む。	ロクロ整形高台部貼り付け後ナデ。体部内面ナデ。外面はヘラ削り。施釉は横け掛け。	高台部体部破片 釉は緑色。
16 - 12 14図版	底 - 長頸瓶	表 土	12.0 10.7	口縁部ラッパ状。	頸部ロクロによるナデ。頸部と胴部は二段つなぎである。施釉は、はげ坐り。	頸部光殘存 釉は緑色。

## 3人孔

## 鐘瓦一覧

拂 団 版	出 土 位 置	直 径	内 区				外 区				幅	内 縁 幅 文様	外 縁 幅 高 文様	金 長	備 考	
			中 房 徑	蓮子數	弁 区 徑	弁 幅	弁 数									
17-1 16回版	表土	11.1	5.8	1+4	11.1	4.8	T8								22	間弁を有する。 蓮子はわざかに残存。

## 4人孔

18-1 16回版	表土	20.0	5.6	1+6	16.6	5.5	T8	1.7	0.3	a	14	0.2	a	3.1	瓦当裏面捺ナデ(?) 海綿骨針を含む。
--------------	----	------	-----	-----	------	-----	----	-----	-----	---	----	-----	---	-----	------------------------

## 6人孔

20-2 20回版	表土	8.6	2.0	1+6	6.6	5.0	T7	1.1			1	0.5	Bn	5.3	
--------------	----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	--	--	---	-----	----	-----	--

## 7人孔

29-1 29回版	表土	22.2	7.6	1+6	18.0	5.5	T8	1.8			1.8	0.8	Bn	10.2	海綿骨針を含む。
--------------	----	------	-----	-----	------	-----	----	-----	--	--	-----	-----	----	------	----------

## 2人孔

## 字瓦一覧

拂 団 版	出 土 位 置	寸 法				内 区		外 区				基 区		文様 深さ	金長	備 考
		上 弦 弧 幅	下 弦 弧 幅	強 度	厚 さ	厚 さ	文様	上 厚さ 文様	下 厚さ 文様	幅	文様					
17-4 15回版	表土	9.5	1.3		3.6		G							0.3	7.0	頸F1-a。

## 4人孔

18-2 16回版	表土	10.0	4.5		5.6	3.7	HK	0.9	a	1.0	a	4.5	0.3	a	10.7	頸G2-a。 瓦当面及び女瓦部凸面一部朱付墨。女瓦部凸面黒目印書き、黒色スコリア含む。
18-3 17回版	表土	10.2	11.8		3.7		G					4.0		0.6	15.6	F1-a。 女瓦部凹凸両面經ナデ、海綿骨針を含む。

## 6人孔

20-3 20回版	表土	15.5	15.0		3.8		G					4.0		0.75	12.9	頸E-a。 文様芯型横ナデによる施文。女瓦部凹面系切り底。凸面不整形。
20-4 20回版	暗茶 褐色土	14.5	8.7		5.3	3.9	HK (左→右)			1.3	a			0.3	18.9	頸G-1。 女瓦部凸面黒目印書き。
21-1 21回版	暗茶 褐色土	16.5	18.1		5.0	3.7	HK (左→右)	0.4	a	0.9			a	0.2	7.5	頸F2-a。 海綿骨針を含む。

## 7人孔

27-1 26回版	SD73 フク土	6.5	7.8		4.0	2.0	H	0.8	a	1.0	a			0.1	8.6	頸E-C。
--------------	-------------	-----	-----	--	-----	-----	---	-----	---	-----	---	--	--	-----	-----	-------

## 8人孔

34-1 37回版	表土	17.7	17.4		4.2		KK		a		a	4.1	a	0.2	20.2	頸F2-C。 女瓦部凸面輕位網目印書き(L15本)瓦当部左側端面に「丁」のへら書き文字。黒色スコリア含む。
34-2 36回版	表土	9.5	7.8		4.8	3.6	HK (左→右)	0.5	a	0.7	a	5.5	a	0.3	8.1	頸F2-a。 海綿骨針を含む。

## 6人孔

## 男瓦一覧

拂因 國版	出 土 位 置	寸 法				成・整 形 の 特 徴						備 考	
						凹 面			凸 面				
		狭 端	広 端	金 長	厚 さ	素 材	布 目	特 徵	印 き	特 徵	特 徵		
21-2 21國版	表 土			11.3	1.6			23×25	不整形	繩 目	横ナデ(回転利用?)	左側端ヘラ削り	凹面に判読不明のへラ書き文字。
21-3 21國版	表 土	12.9	15.3	42.1	1.9			21×22	両側端縦幅広くヘラ削り	繩 目	全面板状工具による横ナデ	全面面ヘラ削り	全面に粘土板合せ目S。
22-1 21國版	表 土	11.4		22.4	1.75	粘土紐 6本 左巻き 上げ	19×23	広端を除く3端幅狭くヘラ削り			板状工具による横ナデ	斜端指ナデ左・右側端ヘラ削り	海綿骨針、墨色スコリアを含む。
22-2 22國版	表 土		24.3	18.9	2.7	粘土紐	24×27	狭端を除く3端幅狭くヘラ削り	繩 目	繩目印き良 全面板ナデ	狭端を除く3端面ヘラ削り	全面繩ナデ、広端小さく隅切り。	全面繩ナデ、広端小さく隅切り。

## 7人孔

## 男瓦一覧

拂因 國版	出 土 位 置	寸 法				成・整 形 の 特 徴						備 考
						凹 面			凸 面			
		狭 端	広 端	金 長	厚 さ	素 材	布 目	特 徵	印 き	特 徵	特 徵	
27-2 27國版	SD73 ア 土		21.5	17.5	2.0	粘土紐 左巻き 上げ	18×19	狭端を除く3端幅広くヘラ削り		左側端ナデ	狭端を除く3端ヘラ削り	凸面に「豈」の押印。黒色スコリア含む。
27-3 27國版	SD73 ア 土			5.4	1.9		20×23	両端幅狭くヘラ削り	繩 目	側端幅狭くヘラ削り	右側端ヘラ削り	凹面「十」のへラ書き。
29-2 29國版	表 土		18.8	24.0	2.4		30×33	広端幅広くヘラ削り		広端指ナデ その他横ナデ	広端・左側端ヘラ削り	全面布継ぎ目指ナデ消し。

## 8人孔

30-5 31國版	SD73 A 期		10.5	10.7	2.5		27×28	広端幅広くヘラ削り		全面横ナデ	広端ヘラ削り	広端面に「十」のへラ書き。
30-6 31國版	SD73 A 期		5.1	12.1	1.9		27×32	広端・左側端幅狭くヘラ削り		全面回転ナデ	広端・右側端ヘラ削り	側端面自然剥着。
31-1 31國版	SD73 A 期		7.5	7.8	1.8	粘土紐	38×37	広端幅狭くヘラ削り		回転ナデ、 広端幅狭くヘラ削り	広端・右側端ヘラ削り	広端面小さく隅切り。海綿骨針、墨色スコリア含む。
31-2 31國版	SD73 A 期		10.3	13.1	1.6		全面繩ナデ消し	広端・左側端狭くヘラ削り		左右側端幅狭くヘラ削り	広端・右側端ヘラ削り	全面全面繩ナデ、広端面やや大きく隅切り。
31-3 32國版	SD73 A 期		5.4	15.5	4.2		33×30	広端・右側端幅狭くヘラ削り	繩 目	印き換全面繩ナデ	広端・左側端ヘラ削り	全面部分的に繩ナデ(指)、 広端面小さく隅切り。
31-4 32國版	SD73 A 期			13.6	1.6	全面繩ナデ	側端幅狭くヘラ削り		全面繩ナデ	左側端ナデ	全面全面繩ナデ判読不明 朱墨書。海綿骨針、黒色スコリア含む。	
32-6 34國版	SD73 A 期		9.4	12.4	2.5		22×19	広端・右側端幅広くヘラ削り			広端・左側端ヘラ削り	黑色スコリア含む。

## 1人孔

## 女瓦一覧

棒 圓 版	出 土 位 置	寸 法				成・整形の特徴						備 考	
		四 面		凸 面		端 面							
		旗 端	広 端	全 長	厚 さ	素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴	特 徴		
17-1 15回版	表土			9.45	2.7		16×20		塊目L 9本			四面に「花」のへら書き文字。	
17-2 15回版	表土			3.8	2.2		17×19		塊目L 7本			四面に「大」のへら書き文字。	
17-3 15回版	表土			18.0	2.7		24×23	左側端縫幅 狭くへら削り	格子目 (小)	叩き落	左側端へら 削り	海松骨針及び墨色スコリ ア含む。	

## 2人孔

17-5 15回版	表土			8.6	2.6		17×17	側端縫幅狭くへら削り	格子目		右側端へら 削り	赤色スコリア含む。
--------------	----	--	--	-----	-----	--	-------	------------	-----	--	-------------	-----------

## 3人孔

17-7 16回版	表土	6.1		11.9	2.5		20×18	端縫幅狭く へら削り	塊目L	側縫に斜 行	狭端・右側 端へら削り	凹凸面側糸切り同一方向。 側縫端に斜行(右 上り、左下り)海松骨針 ア含む。
17-8 16回版	表土		1.0	10.9	2.5			報ニア、横 ナラ端縫幅 狭くへら削 り	板目	広端縫にや や平行、叩 き密	広端へら削 り	広端部粘土折り返し。 海松骨針及び墨色スコリ ア含む。

## 4人孔

18-4 17回版	表土			7.6	2.4			側端縫幅狭く へら削り			右側端へら 削り(2面)	凸面「大井」の押型文字。 海松骨針を含む。
18-5 16回版	表土	8.6		12.6	2.2		14×19	狭端縫幅広 く側端縫幅 狭くへら削 り	格子目	叩き薄	狭端・右側 端へら削り	海松骨針を含む。
18-6 17回版	表土		12.0	21.9	2.7	粘土縫	15×17	端縫幅狭く へら削り	塊目L 14本	小単位側端 縫に斜しや や弧を描く	広端へら削 り、右側端 指ナラ	四面「中」の横骨文字。

## 5人孔

19-2 18回版	表土		9.5	10.7	2.8		18×21	左側端縫幅広 くへら削り	斜格子	叩き疏	広端・左側 端へら削り	凸面「花」の押型文字。 赤色スコリア含む。
19-6 19回版	表土		15.7	28.8	2.5		14×18	周側端縫幅 広く、へら削 り。	正格子	側縫端に斜 行(A)	側縫端に斜 行(B)	金体に自然粘付着、凹面 中央「男」のへら書き文字。
20-1 19回版	表土		7.1	25.65	2.8	粘土 横縫?	28×23	広端・左側 端縫幅やや広 くへら削り	塊目L 12本	側縫端に斜 行(C)	側縫端に斜 行(D)	繩目押圧、広端面「上」 のへら書き文字。 凸面端縫幅広くへら削り。
19-3 18回版	黒褐色 土		15.55	18.75	2.5		21×19	側端縫幅狭く へら削り	塊目 9本	側端縫に平行 (長単位)	左側端ナラ	広端面ワラ状压多し。 赤色スコリア含む。
19-4 18回版	墨褐色 土			8.2	2.2			不整形	塊目L	側端縫に平 行	右側端へら 削り(二面)	四面「矢口」のへら書き文字。
19-5 19回版	暗茶褐色 土			9.5	2.4				塊目 8本		左側端へら 削り	四面全面横ナラ、「口右 小」へら書き文字。黒色 スコリア含む。

## 6人孔

## 女瓦一覧

掉 國 國 版	出 土 位 置	寸 法				成・整形の特徴						備 考	
		底 端		廣 端	全 長	厚 さ	素 材	布 目	特 徴	印 き	特 徴	特 徴	
		底 端	廣 端										
22-3 22國版	表 土	4.7		7.2	1.9			24×21	狭端縁幅広くへラ削り	繩目L 11本		狭端へラ削り	四面「大星」の押印。海綿骨針を含む。
23-1 22國版	表 土		28.5	29.6	2.35			18×16	広端左側端縁幅狭くへラ削り	繩目L 7本	弧を描く	狭端歛く3面へラ削り	
23-2 22國版	表 土			15.3	2.35			21×22	側端縁幅狭くへラ削り	斜格子目	印き、やや疊	左側端へラ削り	四面に判読不明のへラ書記。
23-3 23國版	表 土	13.7		18.1	2.1				狭端縁幅狭くへラ削り	繩目L	側縁線に斜行	狭端・左側端へラ削り	四面全面模ナダ、海綿骨針を含む。
24-1 23國版	表 土		12.9	16.2	2.3			18×18	広端・右側端縁幅広くへラ削り	格子目	印き密	広端・右側端へラ削り	海綿骨針、黒色スコリア含む。
24-2 23國版	表 土		17.45	14.1	2.8			17×14	広端端縁幅狭くへラ削り	繩目L 9本	側縁線に平行斜行現在	広端・左側端へラ削り	四面に判読不明の朱墨畫文字。
24-3 24國版	表 土		18.8	19.2	2.6			18×21	端縁幅広くへラ削り	斜格子目	印きやや疊	広端・左側端へラ削り(二面)	四面「庄」の押印。凸面「庄」の押型。黒色スコリア含む。
24-4 24國版	表 土		12.1	12.8	2.6			17×21	端縁幅狭くへラ削り	繩目L 7本	側縁線に斜行	広端へラ削り左側端へラ削り(二面)	海綿骨針を含む。
25-1 24國版	表 土			15.95	2.6			16×18	側端縁幅狭くへラ削り	繩目L 9本	側縁線には平行	左側端へラ削り	板状の形(一枚作り)。四面に指頭痕、海綿骨針を含む。
25-2 25國版	表 土	12.7		24.2	3.3			21×22	狭端側端縁幅狭くへラ削り	繩目L 6本	側縁に付しやや弧を描く	狭端・右側端へラ削り(三面)	
25-3 25國版	表 土		21.5	25.3	2.65			26×27	側端幅広くへラ削り	格子目	印き疊	広端・左側端へラ削り	凸面部分的に繩ナダ。海綿骨針、赤色スコリア含む。
26-1 25國版	表 土	11.1		19.7	2.6			19×19	側端縁幅広く左側端狭くへラ削り	繩目L 7本	側縁線には平行印き疊	狭端・左側端へラ削り	海綿骨針、赤色スコリア含む。
26-2 26國版	表 土	21.1		21.0	2.55			17×15	端縁幅狭くへラ削り	繩目L 10本	弧を描く(内添B)	狭端へラ削り、右側端ナダ	凸面棒状压痕(1条)。

## 7人孔

27-4 27國版	SD73 フク土		24.5	16.6	2.6			18×20	広端・左側端縁幅広くへラ削り	繩目L 7本	印きやや疊 側縁線に平行	広端・左側端へラ削り	広端面にワタ状痕多し 凹凸画面糸切り(同方向右上り)。
28-1 27國版	SD73 フク土		11.9	9.3	2.1			18×23	右側端縁幅狭くへラ削り	繩目L 10本	側縁線に斜行	広端・右側端へラ削り(二面)	四面模ナダ、広端側隅切り。
28-2 28國版	SD73 フク土	10.9		15.7	2.7			21×23	狭端・左側端縁幅狭くへラ削り	繩目	側縁線に斜行 印き疊	狭端・左側端へラ削り	
28-3 28國版	SD73 フク土		14.6	27.2	2.5			24×27	広端・左側端縁幅狭くへラ削り	繩目L 11本		広端・左側端へラ削り	凸面広端岩に「上」のへラ書き文字。
28-4 28國版	SD73 フク土		17.9	15.7	2.0			20×19	広端・右側端縁幅狭くへラ削り	繩目 8本	側縁線に斜行	広端・右側端へラ削り	四面に判読不明朱墨書。 凸面棒状压痕。

## 7人孔

## 女瓦一覧

排 固 固 版	出 土 位 置	寸 法				成・整 形 の 特 徴						備 考	
		凹 面		凸 面		稚 面							
		狹 端	広 端	全 長	厚 度	著 材	布 目	特 徵	印 き	特 徵	特 徵		
29-3 29固版	表 土			11.5	2.7		18×16	側端幅広く へラ削り	格子目	叩き跡	左右側端へ ラ削り	塊瓦(女瓦半載)、海綿骨 針、黒色スコリア含む。	
29-4 30固版	表 土		24.5	15.7	3.0	粘 土 積 紐	20×20	広端・左側 端縫幅狭く へラ削り	繩目 L 8本	やや弧を描 く	広端へラ削 り、左側端 指ナデ		
30-1 30固版	表 土			15.7	2.2		17×20		繩目 L 8本			凹面に「国成」のへラ書き 文字。黑色スコリアを含 む。	
30-2 29固版	表 土	3.0		9.3	1.8		24×17	側端幅狭く へラ削り	繩目 L 10本		狭端へラ削 り	凹面に「監守」のへラ書き 文字。	
30-3 30固版	表 土	8.6		17.7	1.8		24×27	狭端右側端 幅広くへラ削 り	格子目		狭端へラ削 り、右側端 へラ削り(二面)		
30-4 31固版	表 土			20.0	2.2		20×17	側端幅狭く へラ削り	繩目 L 6本	側端縫に斜 行	右側端へラ 削り	凹面に「+」の横骨文字 (原体陽刻)。	

## 8人孔

31-5 32固版	SD73 A 期		2.6	10.2	2.9		18×18	広端へラ削 り	斜格子		広端へラ削 り	凸面「花」の押型文字
31-6 32固版	SD73 A 期	5.5		10.6	1.8		15×18	狭端・右側 端縫幅広くへ ラ削り	繩目 L 12本	側端縫に直 行	狭端へラ削 り右側端へ ラ削り(二面)	海綿骨針を含む。
31-7 33固版	SD73 A 期			17.4	2.8		18×19	側端幅広く へラ削り	繩目 L 9本	長単位(長 さ12cm以上) 無端縫に斜 行斜行縫在	左側端へラ 削り	凹面系切り痕顯著。
31-8 32固版	SD73 A 期		7.2	7.3	1.9		17×18	広端幅狭く 側端幅広くへ ラ削り	繩目 L 7本		広端・左側 端へラ削り	凹面に凸型の縫、凹面に 布縫目。海綿骨針を含 む。
32-1 33固版	SD73 A 期	18.8		22.5	2.5		16×19	側端幅狭く へラ削り	繩目 L 10本	側端縫に斜 行	狭端へラ削 り左側端指 ナデへラ削 り	
32-2 33固版	SD73 A 期	10.35		12.8	2.4		23×24	狭端幅広く 右側端幅狭く へラ削り	繩目 L 12本	叩き目底押 圧を受け不明瞭	狭端・左側 端へラ削り	
32-3 34固版	SD73 A 期	11.4		8.7	2.3		28×21	側端幅広く へラ削り	繩目 L	ナデ後叩き?	狭端へラ削 り	凹面に布束縫(端縫に平 行)凸型1枚作り?
32-4 34固版	SD73 A 期	9.1		22.0	3.2		23×26	狭端幅広く へラ削り	正格子 目	やや難な印 き	狭端不整形	
32-5 34固版	SD73 A 期	6.0		10.0	2.1		21×17	狭端・左側 端縫幅狭くへ ラ削り			狭端・左側 端ナゲ	
33-1 35固版	SD73 B 期			11.5	2.4		17×23	側端幅広く へラ削り	正格子 目	側端縫に斜 行	右側端へラ 削り(二面)	海綿骨針を含む。
33-2 35固版	SD73 B 期	8.3		8.9	2.3		23×22	狭端・左側 端縫幅狭くへ ラ削り	板 目	側端縫に斜 行	狭端不整形 左側端へラ削 り	
33-3 35固版	SD73 B 期	7.6		19.4	2.5		18×16	側端・右側 端縫幅狭くへ ラ削り	繩目 L 6本	側端縫に斜 行	狭端・右側 端へラ削り	赤色スコリアを含む。
33-4 36固版	SD73 B 期		12.4	13.4	2.5		18×14	広端・左側 端縫幅狭くへ ラ削り	繩目 L 9本	側端縫に斜 行	広端・左側 端へラ削り	全体に自然軸付着、海綿 骨針を含む。

## 8人孔

## 女瓦一覧

持 国 國 版	出 土 位 置	寸 法				成・整 形 の 特 徴						備 考
		長 边		広 雜	余 長	厚 さ	凹 面		凸 面		端 面	
		素 材	布 目	特 徵	叩 き	特 徵	特 徵	特 徵	特 徵	特 徵	特 徵	
33-5 36回版	SD73 B期		18.9	20.7	3.3		17×16	広端・左側 端縁狭くへ ク削り	織目L 9本	側端縁に斜 行	広端・ヘラ 削り、左側 端指ナガ	凹面に「上」逆字横骨文主 (上一)。凸面に押送圧痕 広端面に「キ」及び「○」の ヘラ書き。
34-3 37回版	表 土			10.9	2.3		21×22	側端幅広く ヘラ削り	織 目 8本	側端縁に斜 行	左側端ヘラ 削り	凸面に押送圧痕(幅3.5mm) 凸面側縁端狭くへク削り

## 9人孔

34-4 37回版	SK286 アク土			11.8	2.1			側端幅広く ヘラ削り	織目L	部分的に残 存	右側端ヘラ 削り	凸面指痕痕多し。 黒色スコリア含む。
--------------	--------------	--	--	------	-----	--	--	---------------	-----	------------	-------------	-----------------------

## 6人孔

## 博 一 覧

持 国 國 版	出 土 位 置	寸 法			表 裏	舞 面	備 考
		長 边	短 边	厚 さ			
26-3 26回版	表 土	16.2	18.4	7.0	全面ヘラ削り、裏面 部分的に布目压痕残 存	全面ヘラ削り	海綿骨針、黒色スコリア含む。
26-4 26回版	表 土	23.8	16.8	6.0	全面ヘラ削り	全面ヘラ削り	海綿骨針を含む。

## 8人孔

## 石 製 品 一 覧

持 国 國 版	種 别	出 土 位 置	石 質	寸 法	重 量	備 考
38-5 41回版	紙 石	SD73 B期	砂 岩	長さ 6.2 幅 4.0 厚さ 1.7	65g	上面砥石として使用。

## 8人孔

## 鐵 製 品 一 覧

持 国 國 版	種 別	出 土 位 置	寸 法	備 考
38-6 41回版	不 明	SD73A期	長さ 7.6 幅 5.2	

## 縄文土器一覧

博 国 版	器 部	種 位	出 土 置	文 様 構 成 標 準	内 面 調 整	備 考
35 - 1 38国版	深 刷	鉢 部	8人孔 黒褐色土	沈涼 (小さい刺突)	ナテ	諸磯B式
35 - 2 38国版	深 刷	鉢 部	8人孔 黒褐色土	押引き	ナテ*	五領ヶ台式
35 - 3 38国版	深 刷	鉢 部	8人孔 黒褐色土	縄文	ナテ (粗雑)	五領ヶ台式
35 - 4 38国版	深 口 刷	体 部	8人孔 表 土	押引き、隆帯	ナテ (浅)	特版式
35 - 5 38国版	深 刷	体 部	8人孔 黒褐色土	准続矢形文様、隆帯、 押引き	ナテ	勝坂式
35 - 6 38国版	深 刷	体 部	8人孔 黒褐色土	連續矢形文様、隆帯	ナテ	勝坂式
35 - 7 38国版	深 刷	体 部	8人孔 黒褐色土	押引き	ナテ (粗雑)	勝坂式
35 - 8 38国版	深 口 刷	体 頸 部	8人孔 黒褐色土	半截竹管による平行沈 線、刺突条線隆帯	ナテ	曾利式
35 - 9 38国版	深 口 刷	体 部	8人孔 黒褐色土	隆帯、沈線、条線	ナテ	加曾利E式
35 - 10 38国版	深 口 刷	体 部	8人孔 黒褐色土	条線、沈線	ナテ (粗雑)	加曾利E式
35 - 11 38国版	深 口 刷	体 部	8人孔 黒褐色土	沈線、条線	ナテ	加曾利E式
35 - 12 38国版	深 口 刷	体 部	8人孔 黒褐色土	沈線	ナテ (粗雑)	加曾利E式
35 - 13 38国版	深 口 刷	体 部	5人孔 黒褐色土	隆帯、沈線、縄文	雁 (丁寧)	加曾利E式
35 - 14 38国版	深 口 刷	体 部	8人孔 黒褐色土	隆帯、	ナテ (粗雑)	加曾利E式
35 - 15 38国版	深 刷	体 部	8人孔 黒褐色土	縄文、沈線	ナテ*	加曾利E式
35 - 16 38国版	深 刷	体 部	8人孔 黒褐色土	縄文、沈線	ナテ	加曾利E式
35 - 17 38国版	深 刷	体 部	8人孔 黒褐色土	縄文、沈線	ナテ	加曾利E式
35 - 18 38国版	深 刷	体 部	8人孔 黒褐色土	縄文、沈線	ナテ	加曾利E式
35 - 19 38国版	深 刷	体 部	8人孔 表 土	条線	ナテ	加曾利E式
35 - 20 38国版	深 刷	体 部	8人孔 黒褐色土	鶴目 (6本単位) 沈線	ナテ (粗雑)	加曾利E式
35 - 21 38国版	深 刷	体 部	8人孔 黒褐色土	沈線	ナテ	加曾利E式
35 - 22 38国版	深 刷	体 部	8人孔 黒褐色土	鶴目 (12本単位)	ナテ (丁寧)	加曾利E式
35 - 23 38国版	深 刷	体 部	8人孔 黒褐色土	条線	ナテ	加曾利E式

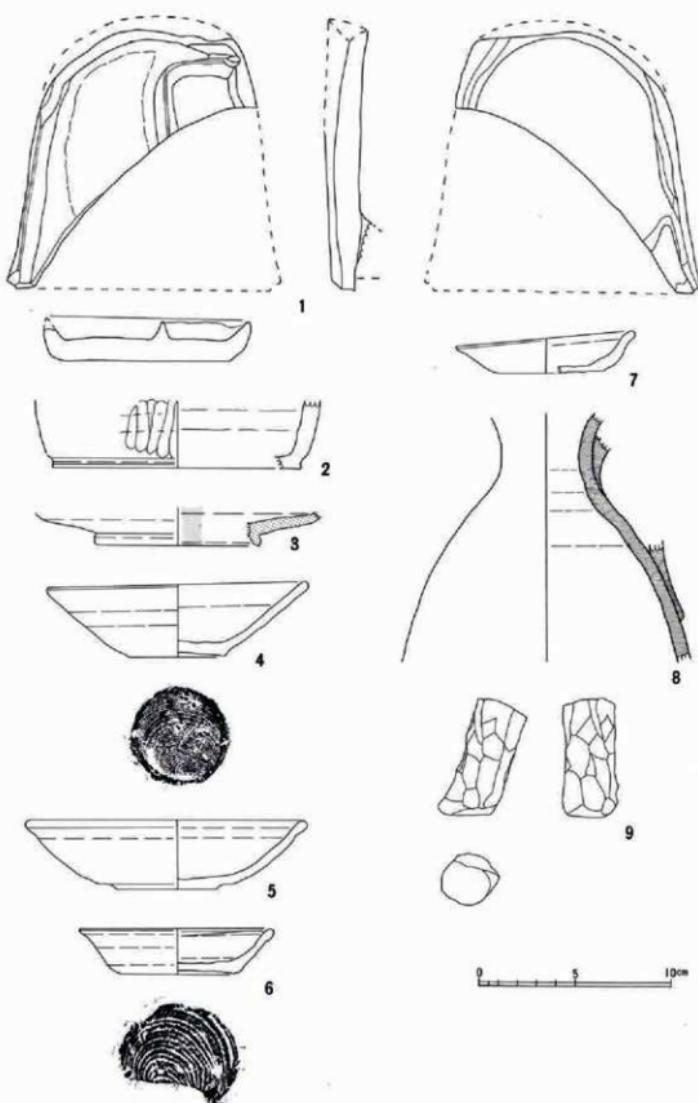
绳文土器一覧

博 国 版	器 部	様 位	出 土 盒	文 様 構 成 要 素	内 面 調 整	備 考
36 - 24 38国版	深 附 部	8人孔 表 土	横目(6本単位)	ナテ	加曾利E式	
36 - 1 38国版	深 附 部	8人孔 黑褐色土	横目(5本単位)	ナテ	加曾利E式	
36 - 2 39国版	深 底	8人孔 黑褐色土		磨(粗稚)	加曾利E式	
36 - 3 39国版	耳 杆	8人孔 黑褐色土	左巻、偶巻		加曾利E式	
36 - 4 39国版	土 雜 (半掛)	8人孔 黑褐色土			片側刺み込み 周囲磨 重量-20g	
36 - 5 39国版	深 把 手	8人孔 黑褐色土		ナテ	称名寺式	
36 - 6 39国版	深 把 手	8人孔 黑褐色土	沈線		称名寺式	
36 - 7 39国版	深 把 手	8人孔 黑褐色土			称名寺式	
36 - 8 39国版	深 口 線 部	8人孔 黑褐色土	沈線、繩文	ナテ(粗稚)	称名寺式	
36 - 9 39国版	深 体 部	8人孔 黑褐色土	隆帯、沈線、刺突	ナテ(粗稚)	称名寺式	
36 - 10 39国版	深 附 部	8人孔 黑褐色土	沈線、繩文	ナテ	称名寺式	
36 - 11 39国版	深 附 部	8人孔 黑褐色土	沈線、繩文	ナテ	称名寺式	
36 - 12 39国版	深 附 部	8人孔 黑褐色土	沈線、繩文	ナテ	称名寺式	
36 - 13 39国版	深 附 部	8人孔 黑褐色土	沈線、繩文	ナテ	称名寺式	
36 - 14 39国版	深 附 部	8人孔 黑褐色土	沈線	ナテ	称名寺式	
36 - 15 39国版	深 附 形	8人孔 黑褐色土	沈線、刺突	ナテ	称名寺式	
36 - 16 39国版	深 附 口 線 部	8人孔 黑褐色土	平行沈線、繩文、隆帯 押压底	磨	加曾利B式	
36 - 17 39国版	深 附 口 線 部	8人孔 表 土	隆帯、刺突	ナテ(丁寧)	加曾利B式	
36 - 18 39国版	深 附 口 線 部	8人孔 黑褐色土	(口縫部、沈線)点列	ナテ(丁寧)	加曾利B式	
36 - 19 39国版	深 附 口 線 部	8人孔 黑褐色土	無文	ナテ(丁寧)	加曾利B式	
36 - 20 39国版	深 附 口 線 部	8人孔 黑褐色土	(格子目状、沈線)	ナテ(丁寧)	加曾利B式	
36 - 21 39国版	深 附 部	8人孔 黑褐色土	網代(摩滅)	ナテ(粗稚)	加曾利B式	
36 - 22 39国版	深 底	8人孔 黑褐色土	網代	ナテ	縫、2本潜り。1本超え 縫、2本超え。1本潜り	

## 石器一覧

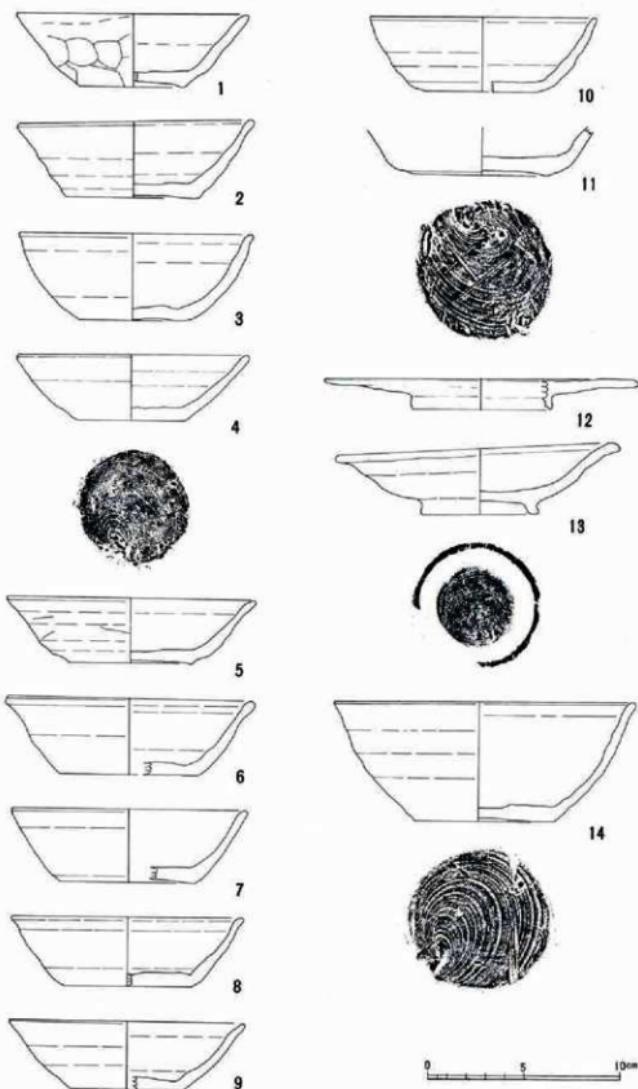
種別	出土地	石質	寸法	重量	備考
37-1 40回版	石槍	7人孔 SS-21	安山岩	長さ12.9 幅 3.7 厚さ 2.1	95g 左側縁を敲打製形。
37-2 40回版	削器	8人孔 黒褐色土	安山岩	長さ11.8 幅 8.9 厚さ 2.4	横円の薄い縁長削片の下半部の端辺をそのまま刃部として使用している。
37-3 40回版	削器	8人孔 黒褐色土	頁岩	長さ12.7 幅 6.2 厚さ 1.8	右側辺を刃部として使用。
37-4 40回版	削器	8人孔 SD73 B期	玄武岩	長さ 4.4 幅 5.1 厚さ 0.9	18g 下部を刃部として使用。
37-5 40回版	打製石斧	8人孔 黒褐色土	粘板岩	長さ 9.9 幅 7.4 厚さ 2.4	137g 下端から打撃で大きく刃部を削出したのち両側縁に敲打を集中し整形している。片刃の直刃や技法が特徴的であり、形状も複数であるところから、トランシェとも考えられる。?
37-6 40回版	打製石斧	5人孔 表土	砂岩	長さ 9.4 幅 7.6 厚さ 2.3	216g 斧頭部に若干の両縁に微底した敲打整形による済水がみられる。最大幅を刃部付近に持つ指形である。
37-7 40回版	打製石斧	8人孔 SS-13	砂岩	長さ10.7 幅 8.1 厚さ 2.8	193g 両側縁に敲打を集中し着柄を直固したと思われる湾入が窺える。刃部は使用の結果、大きく削損、欠損している。又純器である。器体裏面中央に着柄の結果ズレが生じ磨滅している。金体によく磨減し顕著でないが指跡沢がある。最大幅を刃部付近に持つ指形である。
37-8 40回版	凡字形 石器	8人孔 黒褐色土	砂岩	長さ 8.2 幅 6.7 厚さ 3.6	254g 側平横円の礫を素材として下端を半裁して得た底面の傾辺を調整している。周縁部に敲打を集中し側辺は「ハ」の字状に開く。
38-1 41回版	スタンプ 状石器	8人孔 黒褐色土	砂岩	長さ 8.9 幅 4.9 厚さ 3.8	210g 中高断面三角の石器である。折断面は右側方向からの力で折れたかのようである。頂部は頂部端方向から数次の打撃で、純くはあるが刃のように複数の小剣縁を作出している。
38-2 41回版	石皿	8人孔 黒褐色土	花崗岩	厚さ 2.9	208g 磨耗部分が平坦である。
38-3 41回版	凹石	7人孔 SD73 フク土	花崗岩	長さ12.7 幅 7.9 厚さ 4.5	700g 横円形を呈し、両面に凹が2個ある。側辺部分一部磨減している。
38-4 41回版	磨凹石	8人孔 黒褐色土	砂岩	長さ 9.0 幅 7.2 厚さ 3.5	272g 不整円形を呈す。凹は浅くて広い。側辺に剝離痕がある。

出土遺物



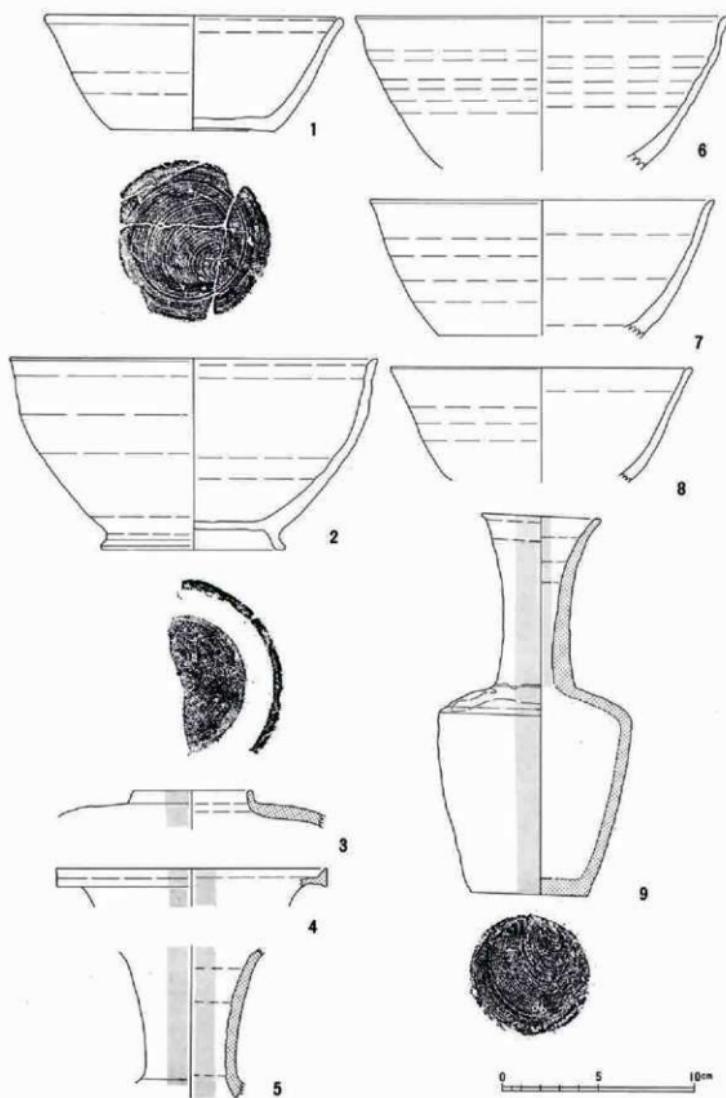
第7図 4・6人孔表土出土遺物

VI 出 土 遺 物

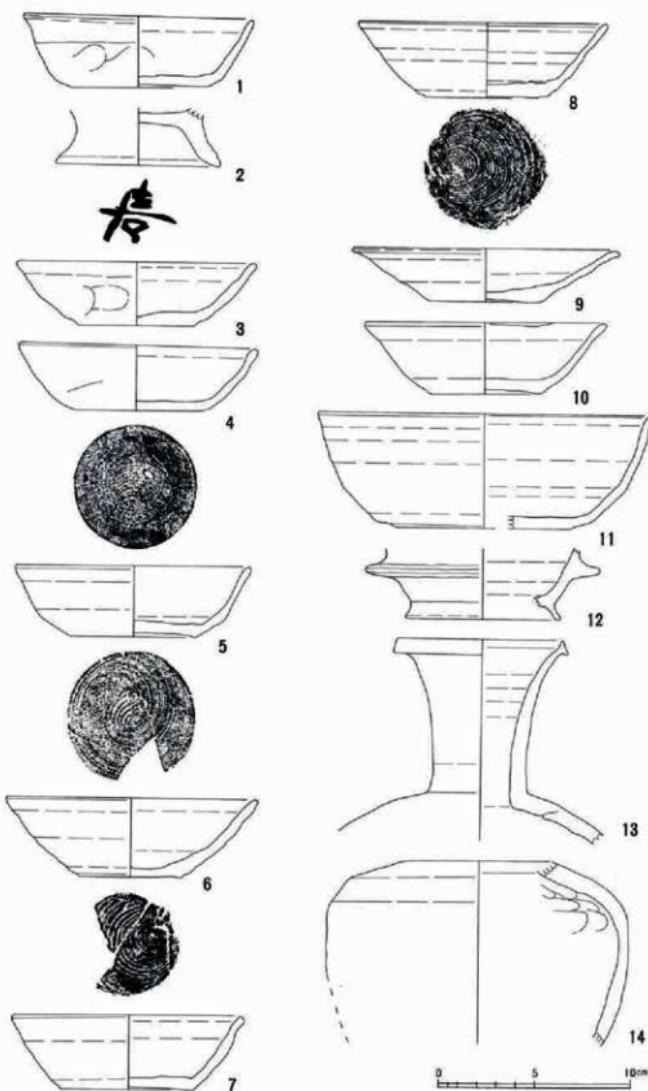


第8図 7人孔SD73出土遺物

出 土 遺 物

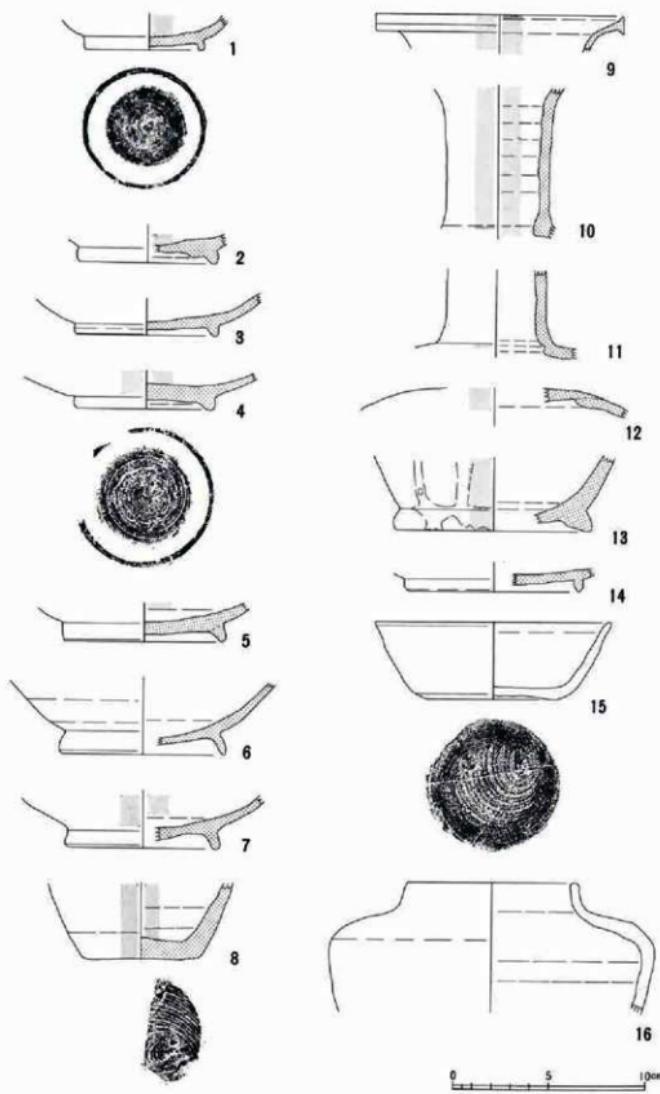


第9圖 7人孔SD73出土遺物



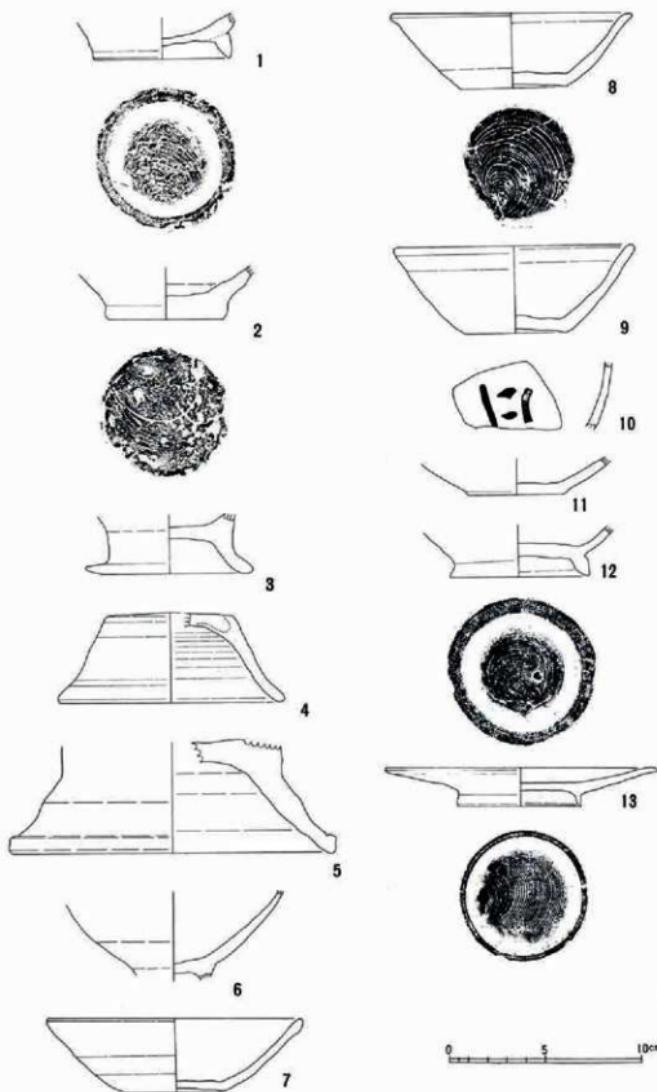
第10圖 7人孔表土出土遺物

出土遺物



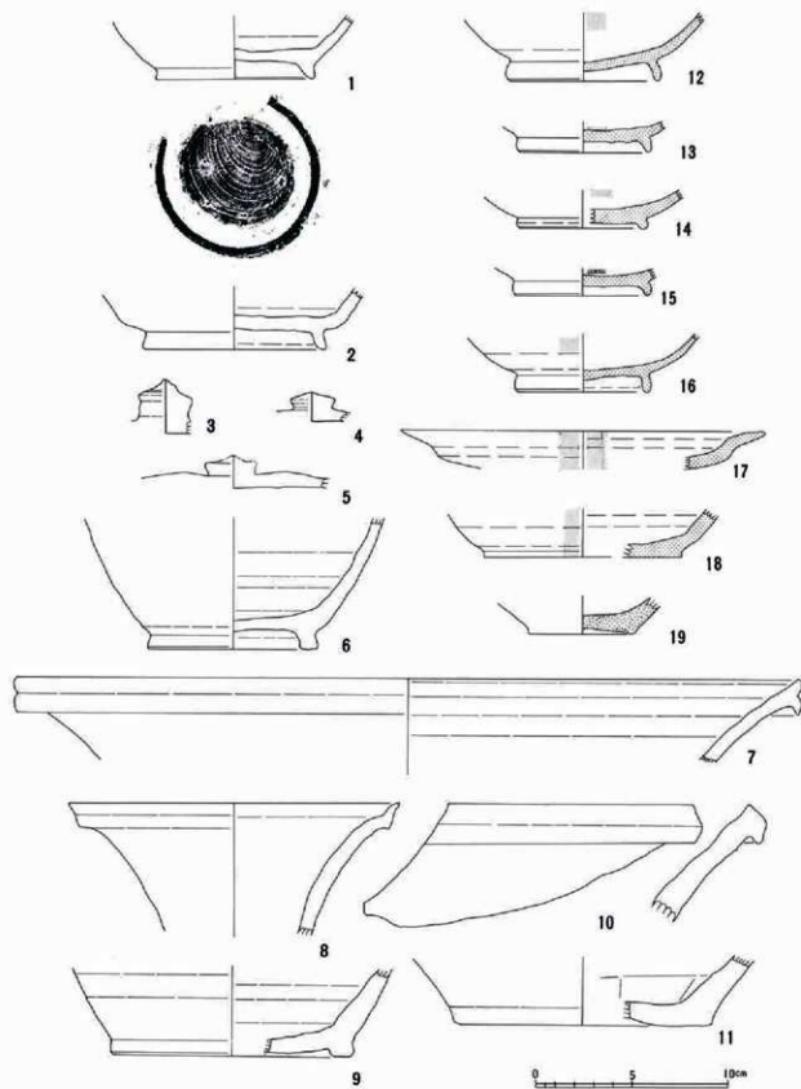
第11図 7人孔出土遺物  
表土・1~14、黒褐色土・15・16

VI 出 土 遺 物



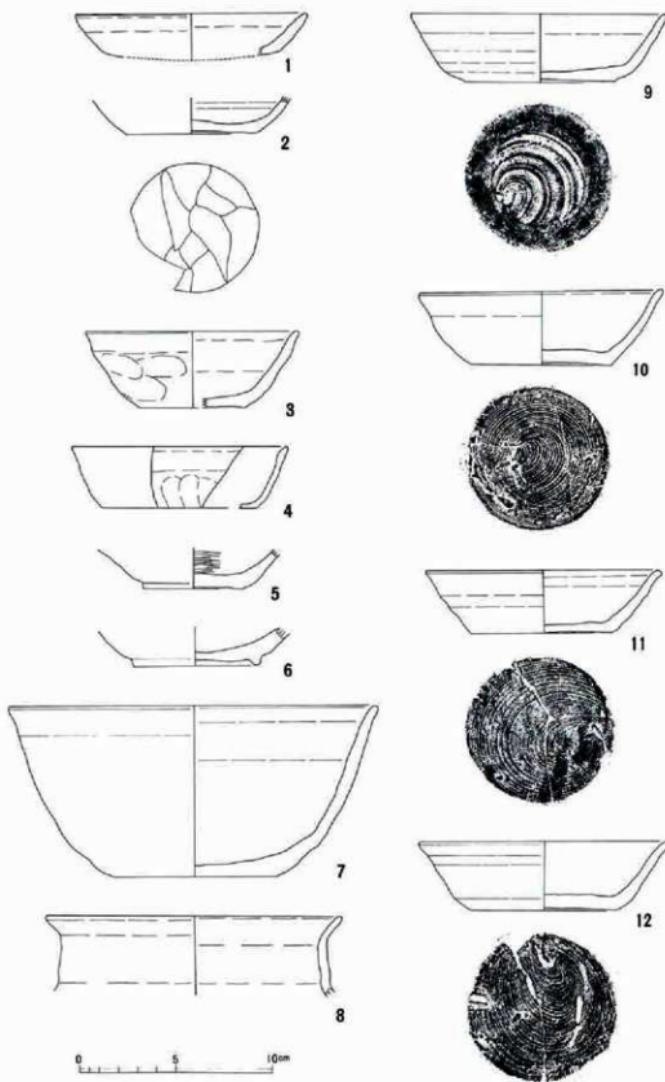
第12図 8人孔LSD73A期出土遺物

出 土 遺 物



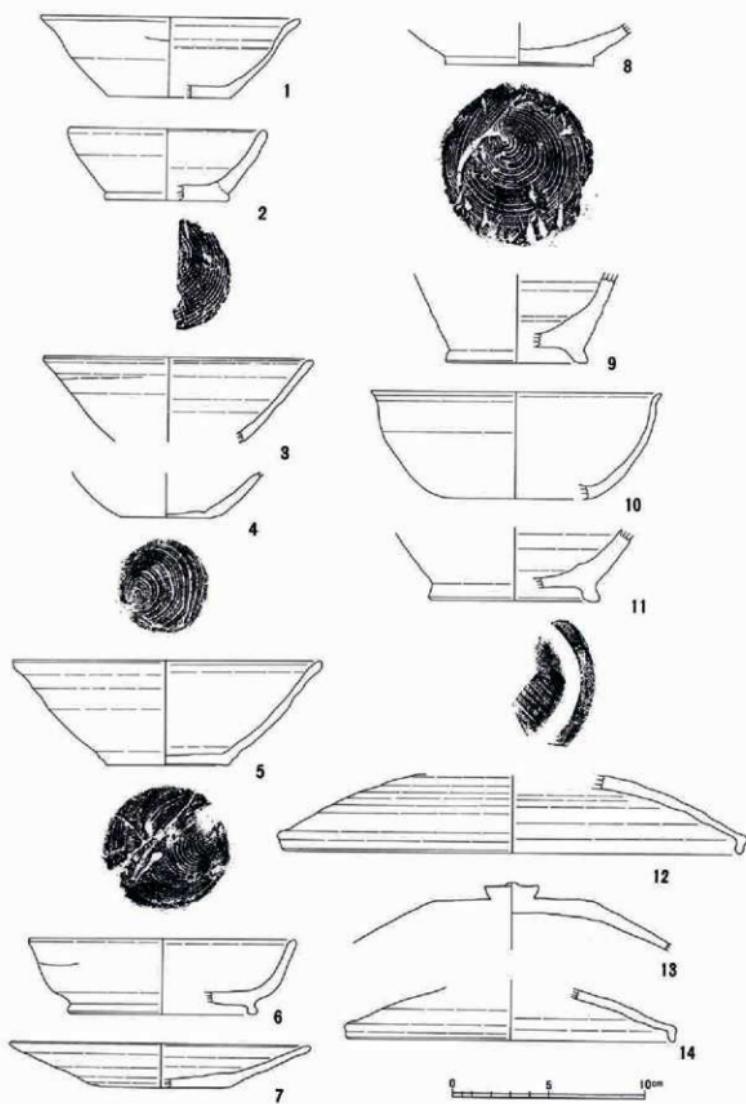
第13圖 8人孔 SD73A期出土遺物

VI 出土遺物



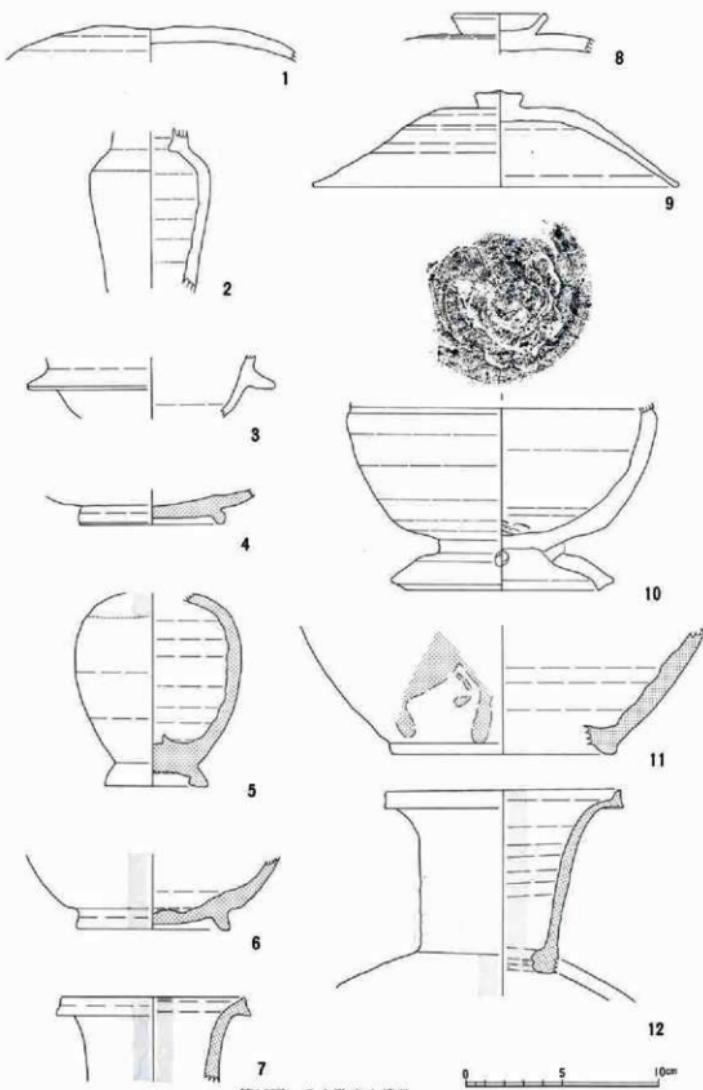
第14図 8人孔SD73B期出土遺物

出 土 遺 物



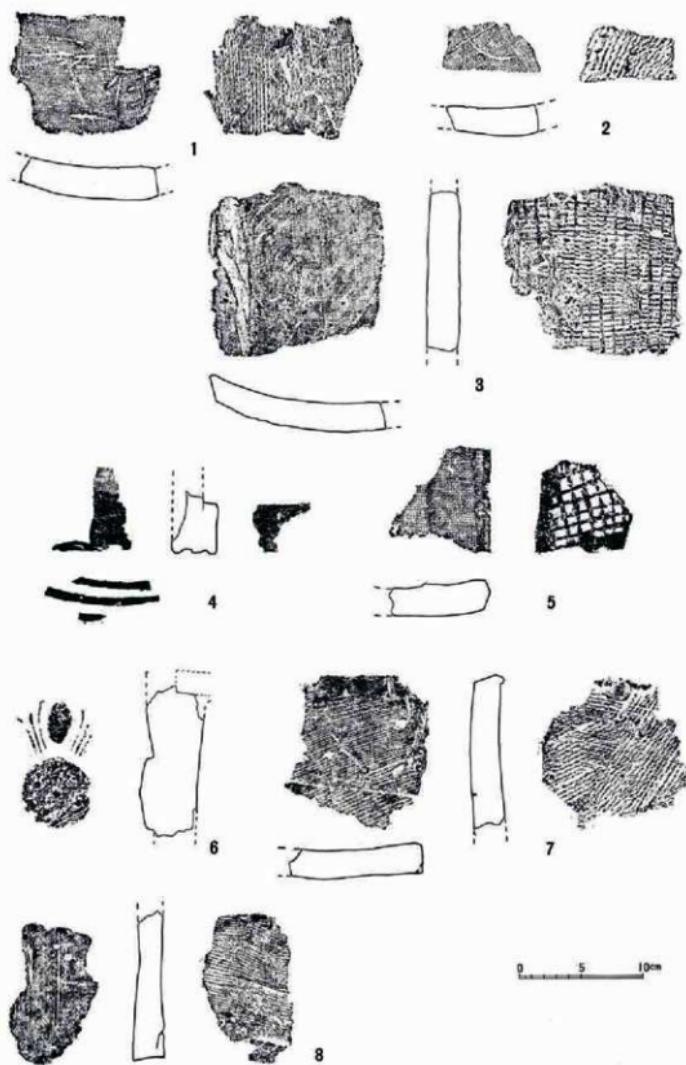
第15図 8人孔 LSD73B期出土遺物

VI 出土遺物



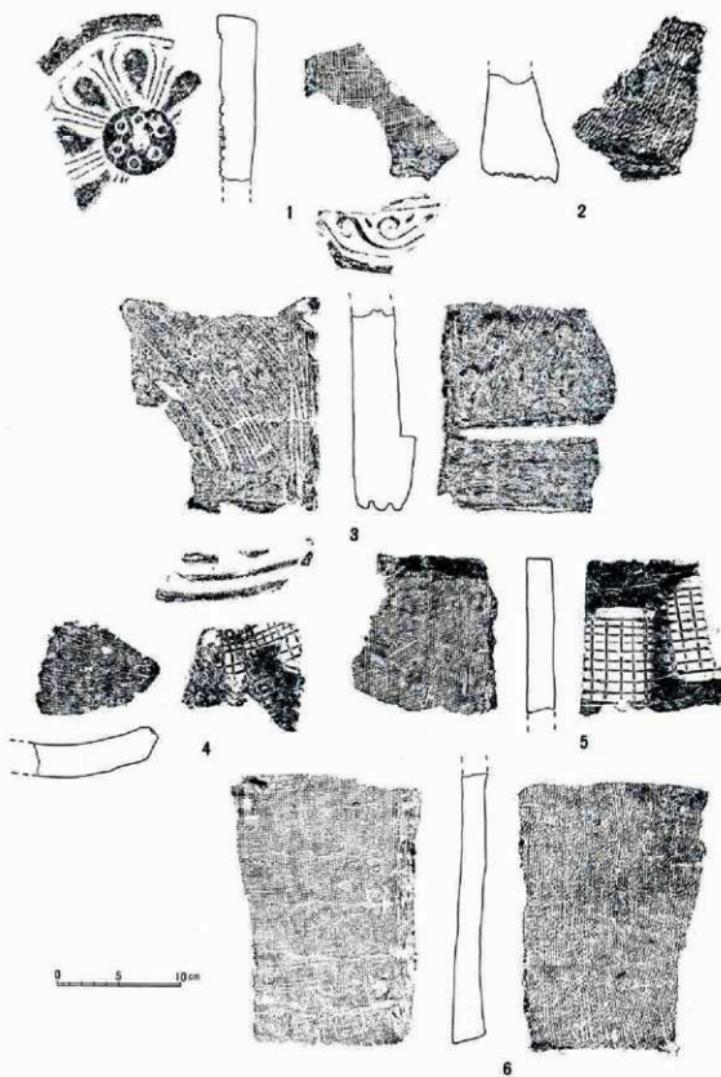
第16図 8人孔出土遺物  
SD73B期・1~7、表土・8~12

石出土遺物



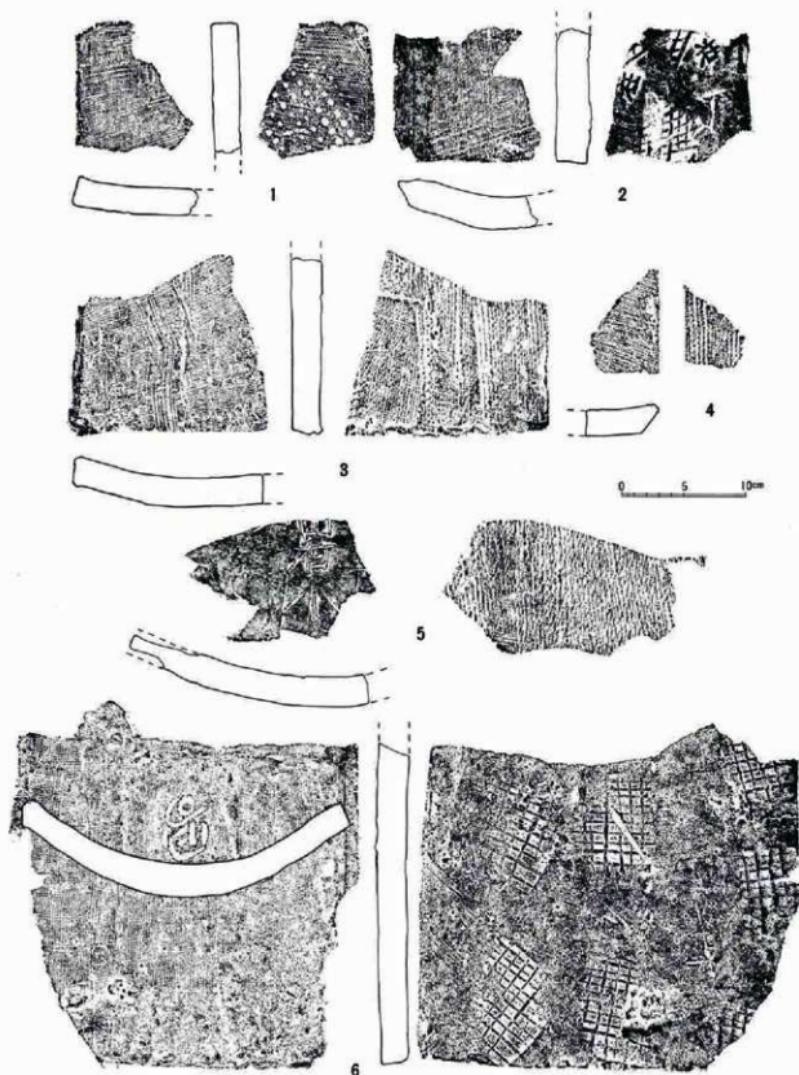
第17圖 1·2·3人孔表土出土遺物

VI 出 土 遺 物



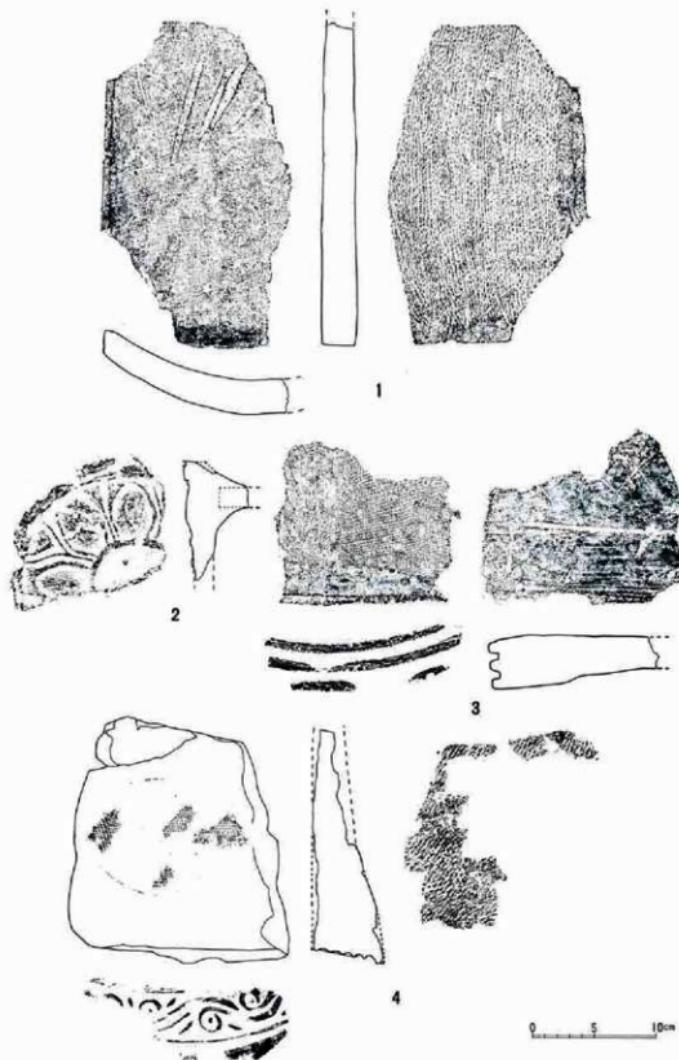
第18図 4孔表土出土遺物

VI 出土遺物



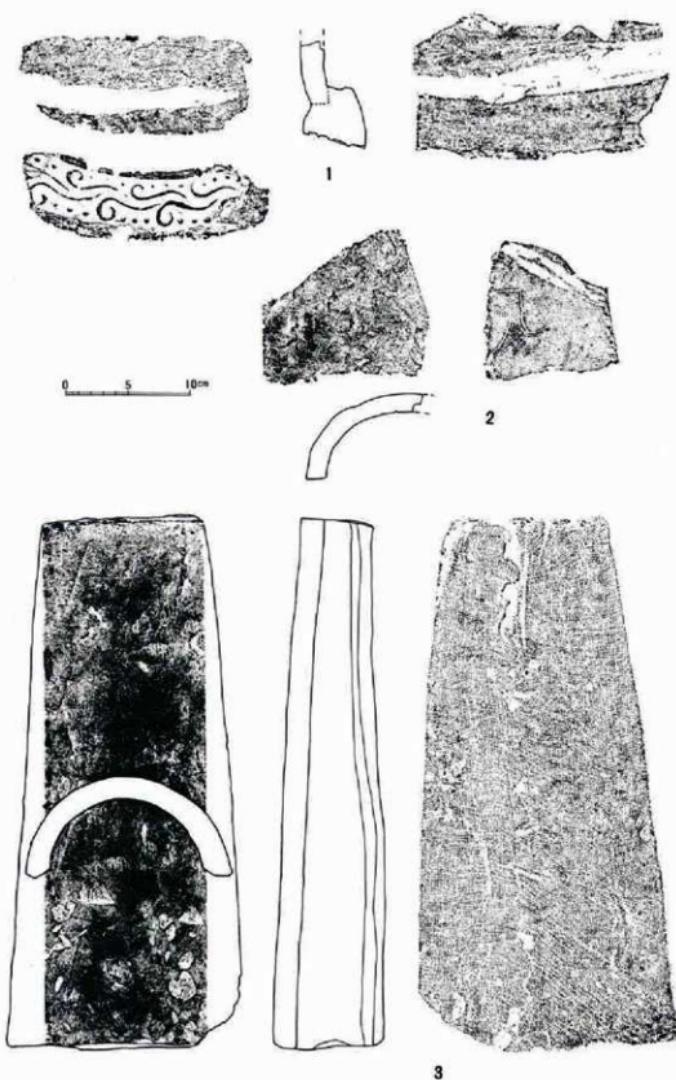
第19圖 5人孔出土遺物  
表土・2・6、黑褐色土・1・3・4、暗茶褐色土・5

出 土 遺 物

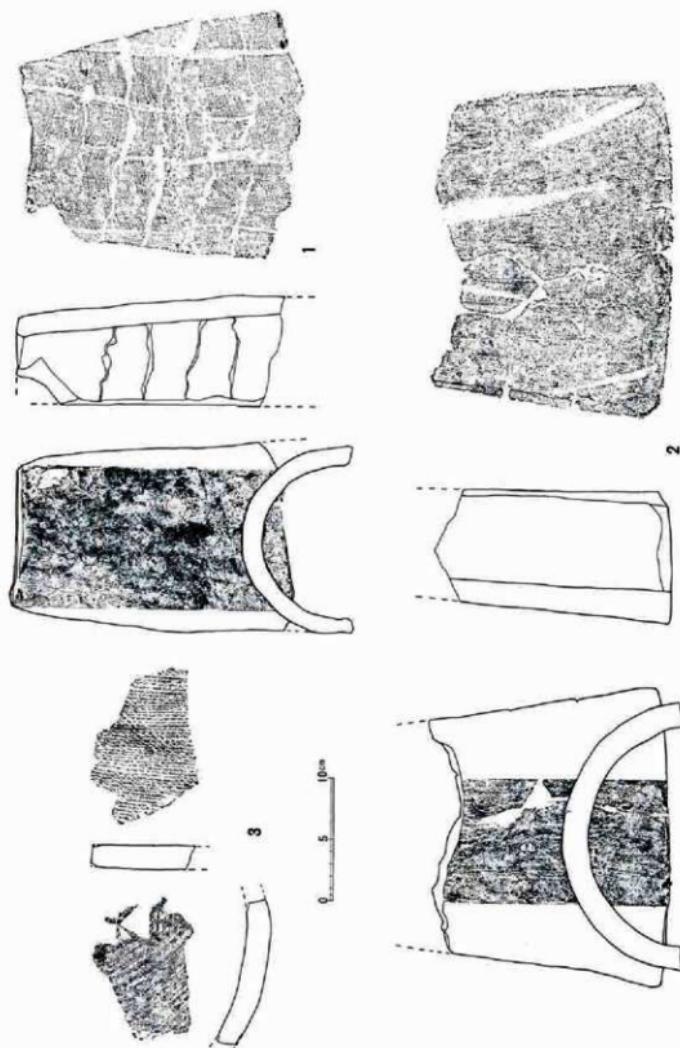


第20図 5・6人孔出土遺物  
表土・1・2・3、暗茶褐色土・4

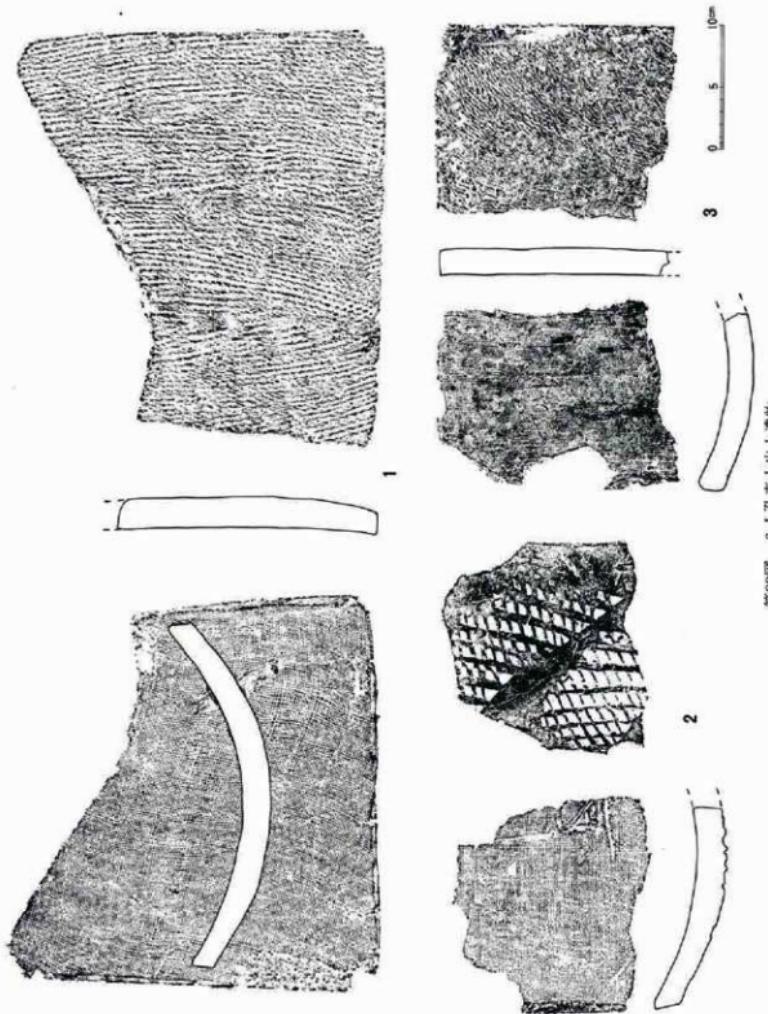
出 土 遺 物



第21図 6人孔出土遺物  
表土・2・3、暗茶褐色土・1

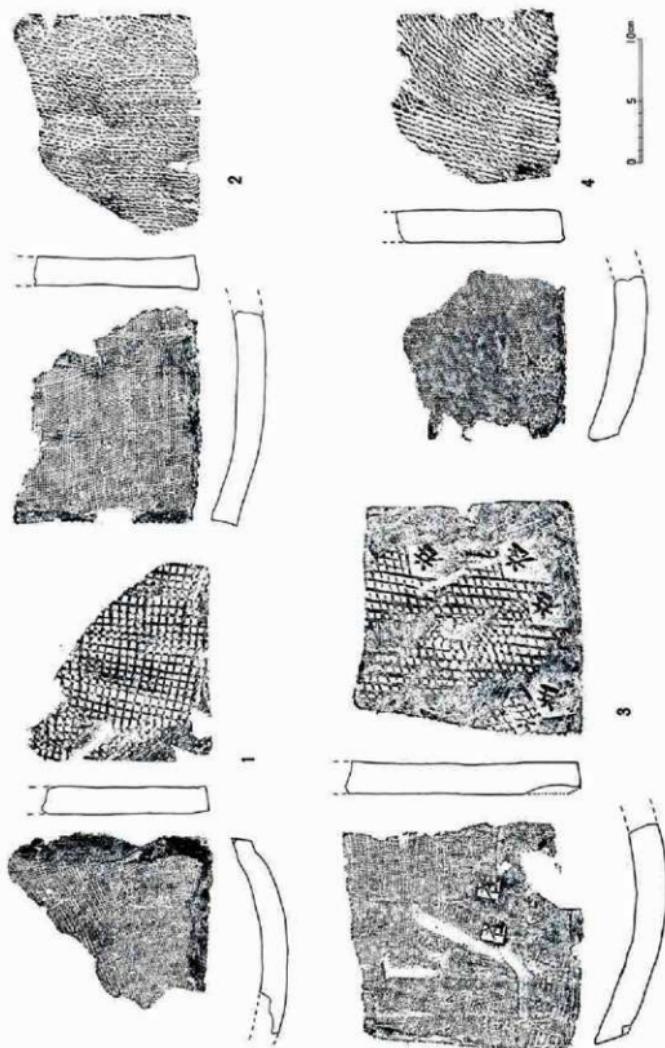


第222圖 6人孔表土出土遺物



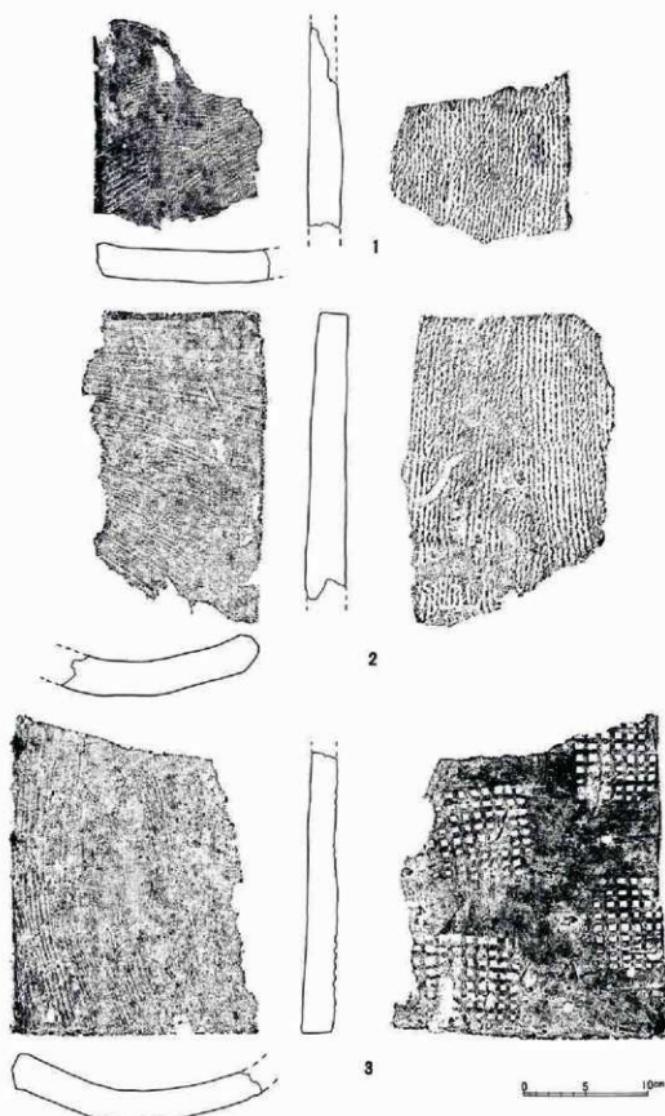
第23圖 人孔表土出土遺物

出 土 遗 物



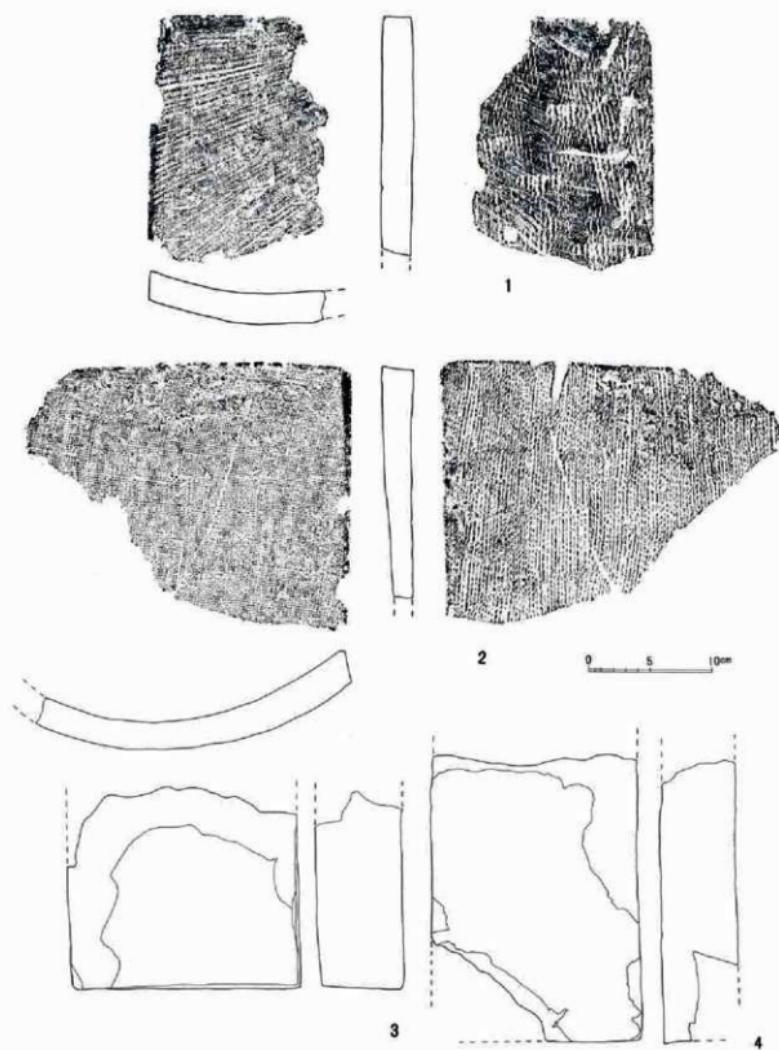
第24圖 6人孔表土出土遺物

VI 出 土 遺 物



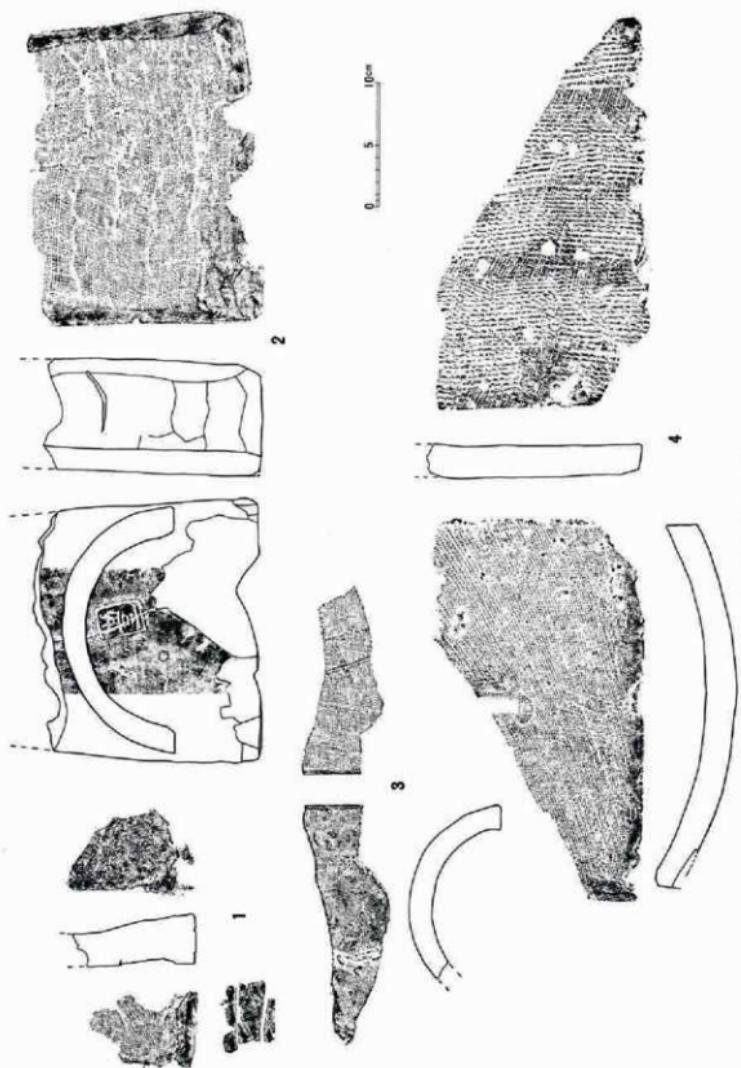
第25図 6人孔表土出土遺物

出土遺物

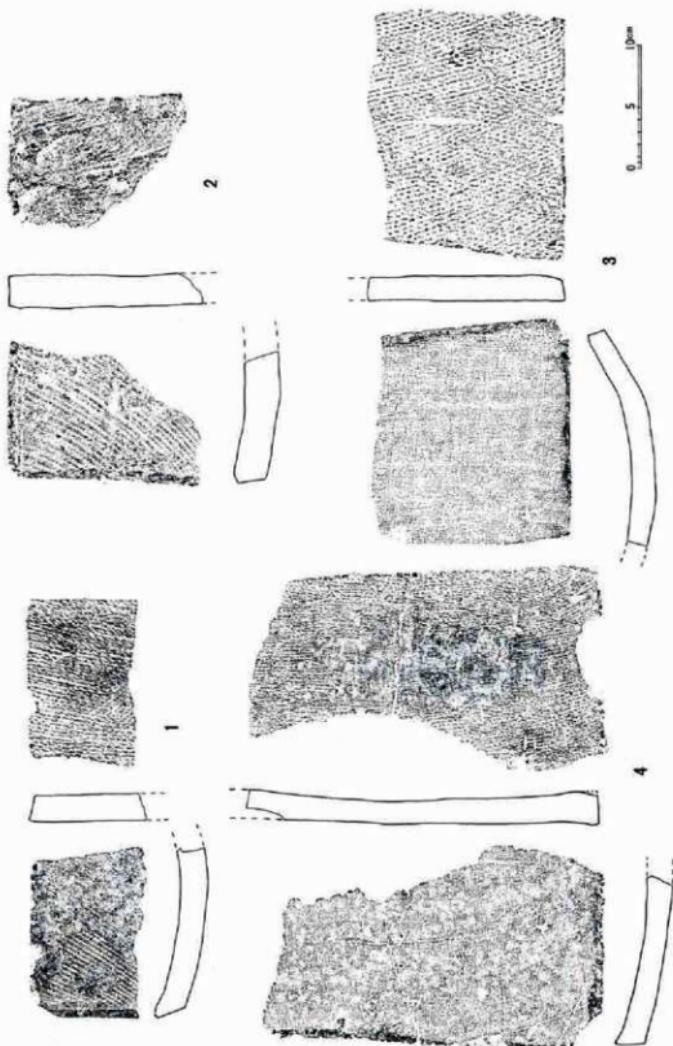


第26図 6人孔表土出土遺物

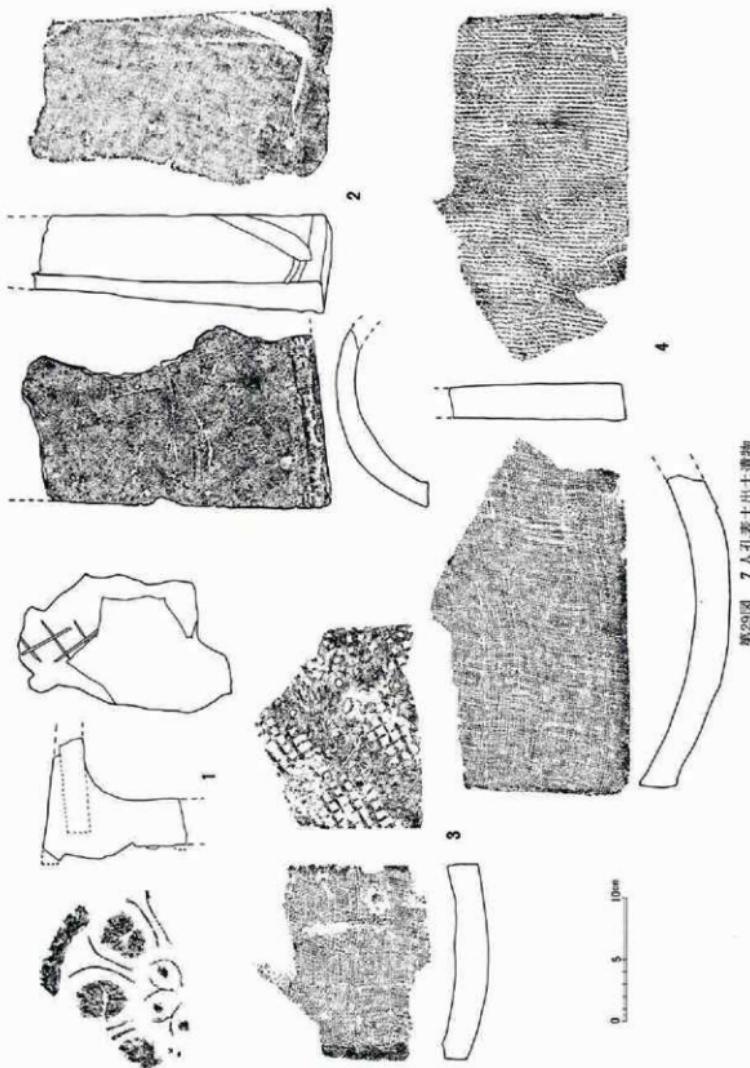
VI 出 土 遺 物



第27圖 7A.751SD751出土遺物

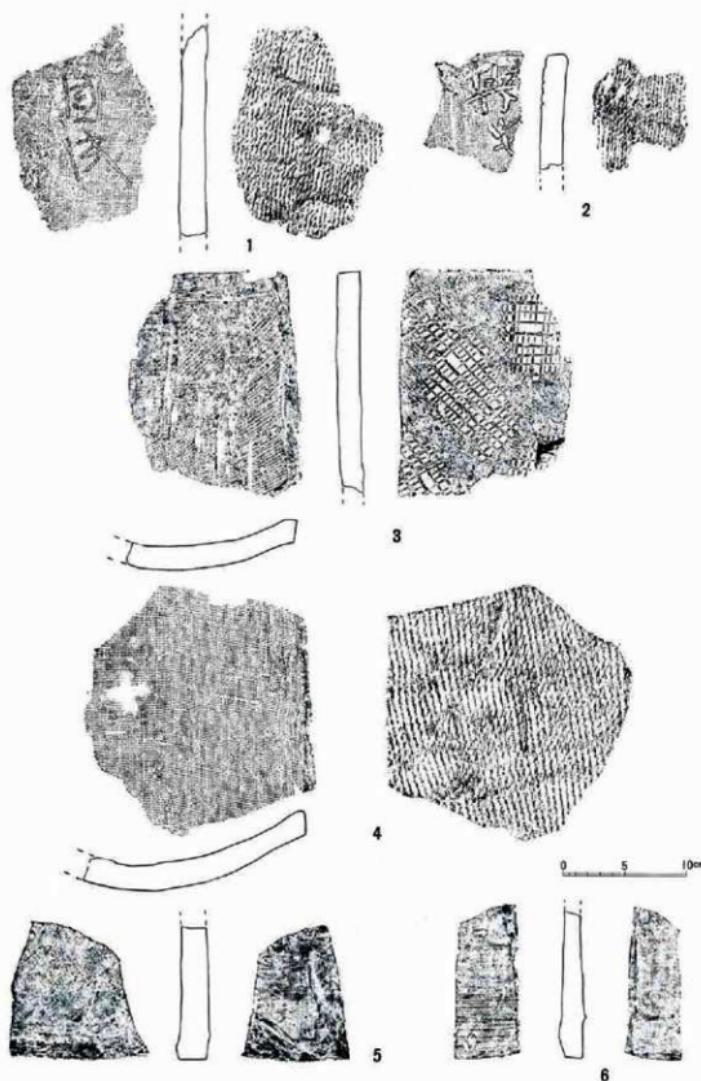


第28圖 7人孔SD73出土土遺物



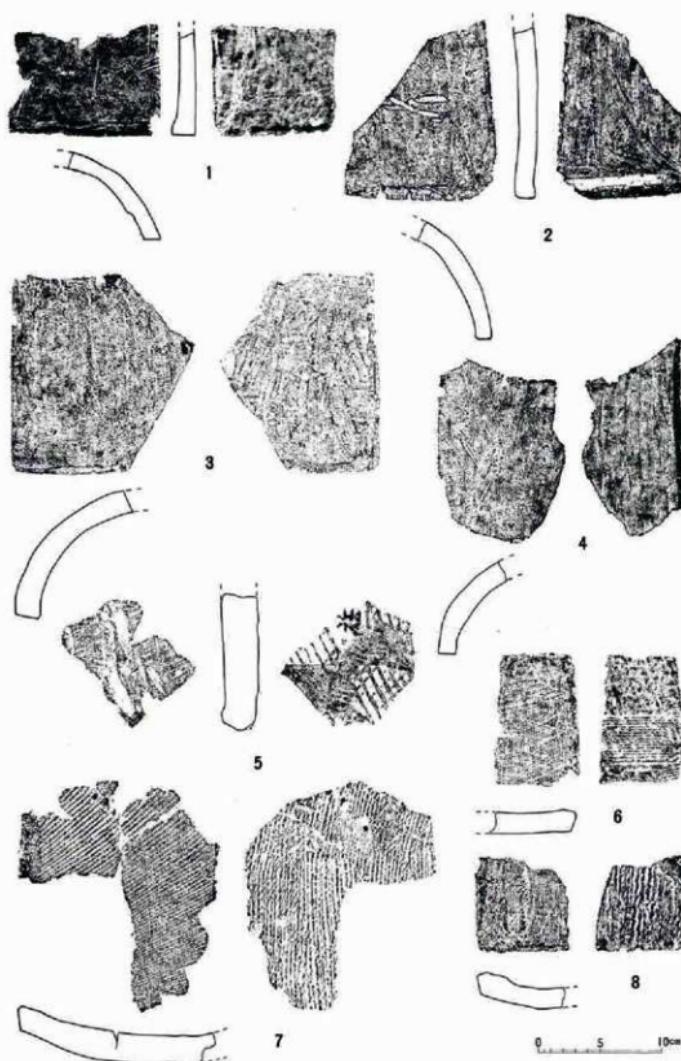
第29圖 人孔出土遺物

VI 出 土 遺 物

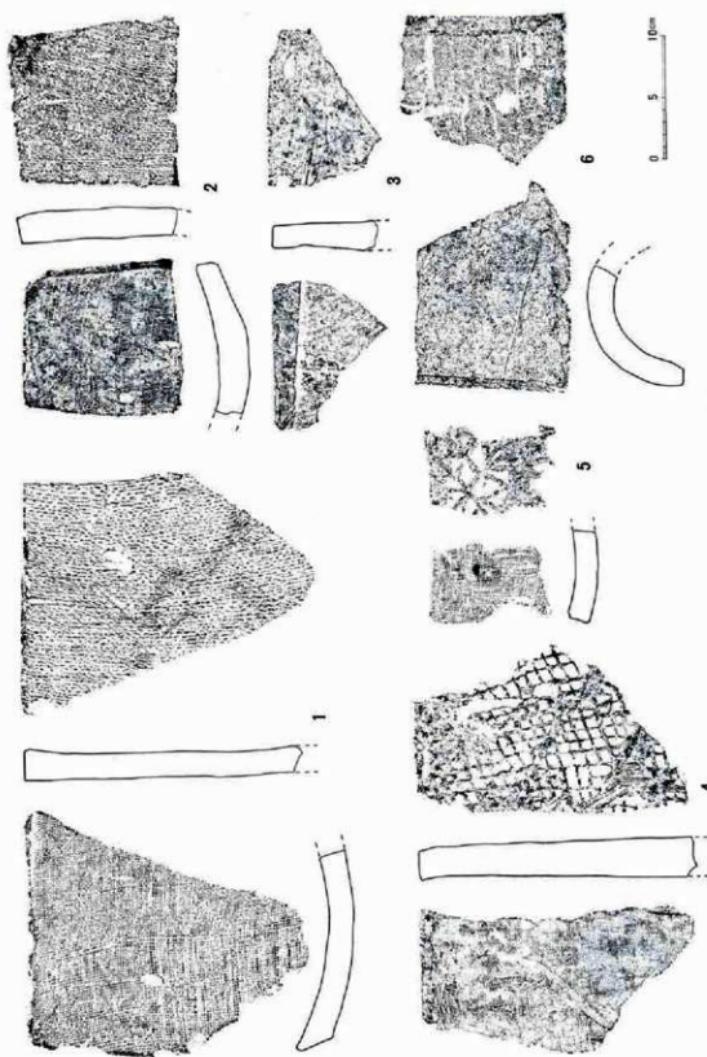


第30圖 7・8人孔出土遺物  
表土・1・2・3・4、SD73A期・5・6

出 土 遺 物

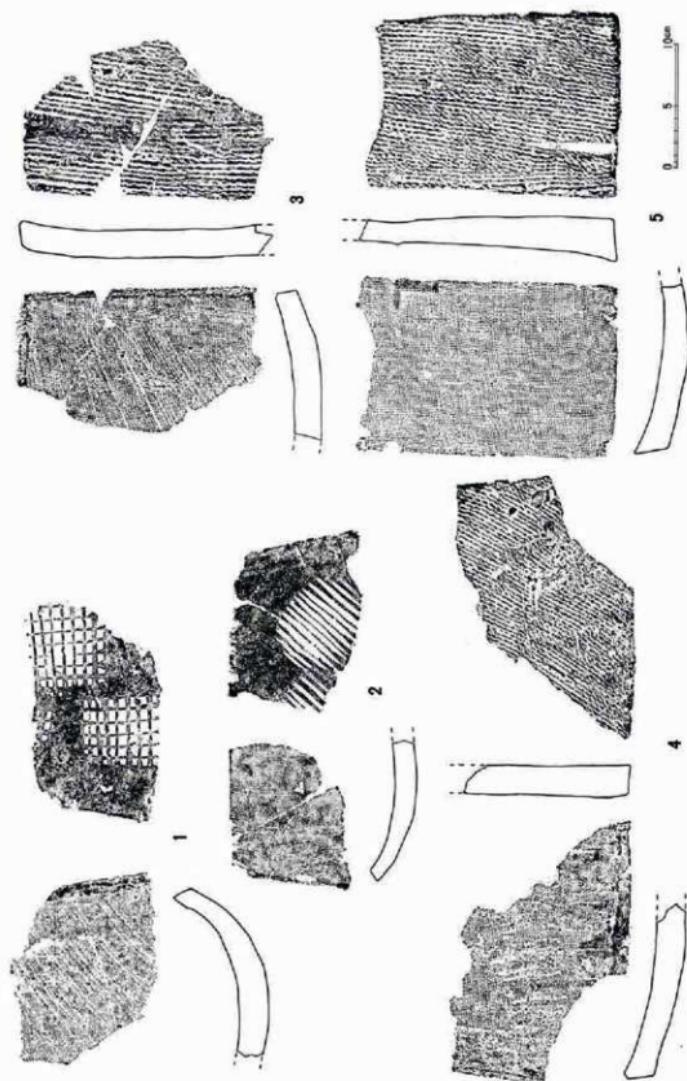


第31図 8人孔SD73A期出土遺物



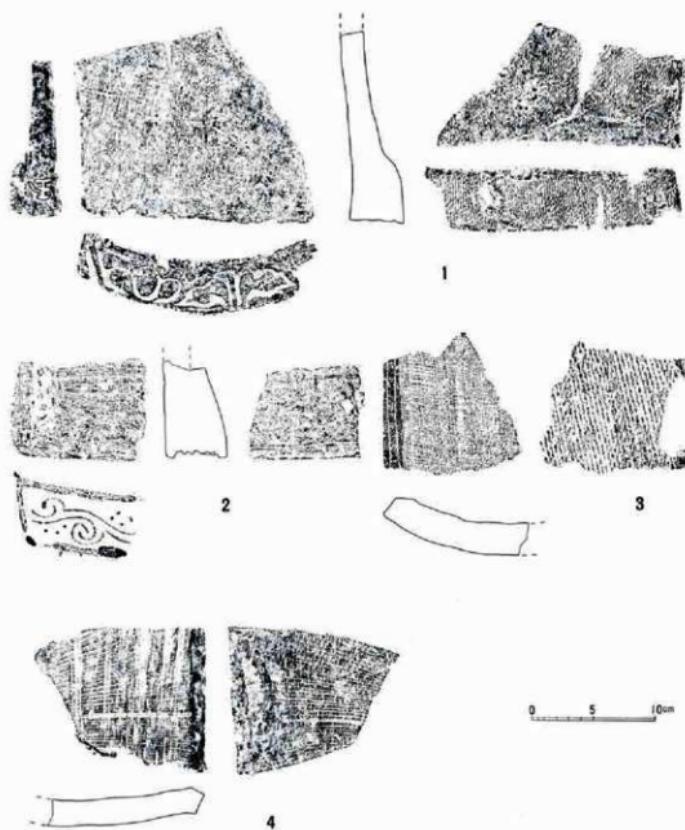
第32圖 8 A TLSD73A剖出土遺物

出 土 遺 物



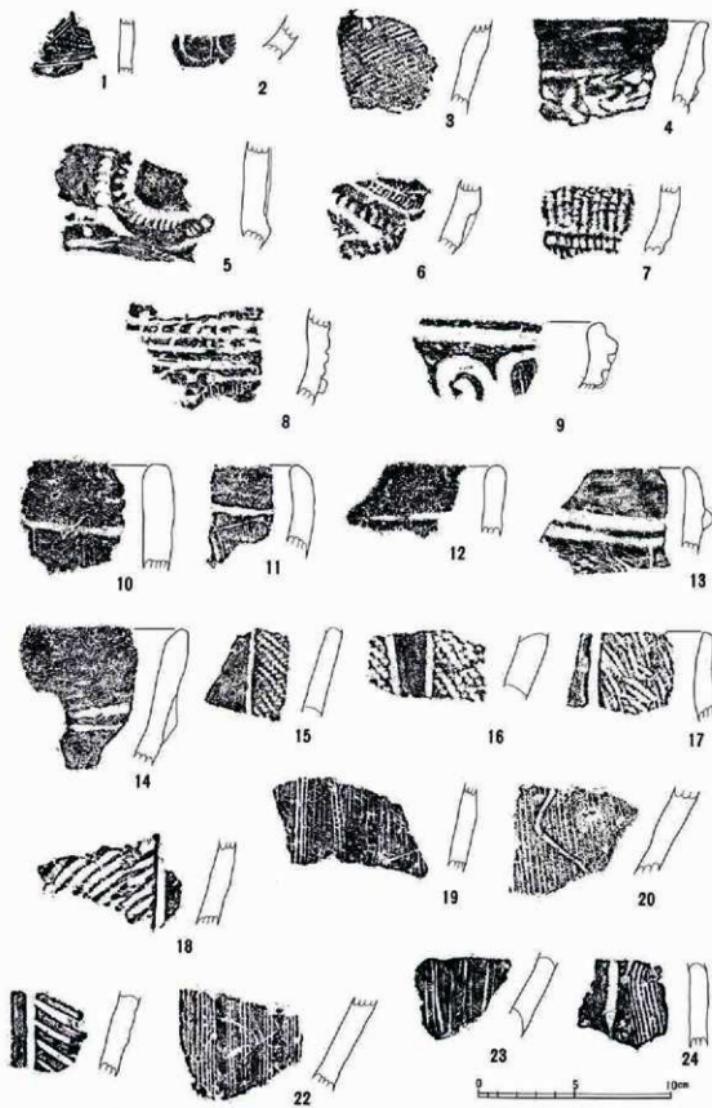
第33圖 8 人孔 SD73B期出土遺物

出 土 遺 物



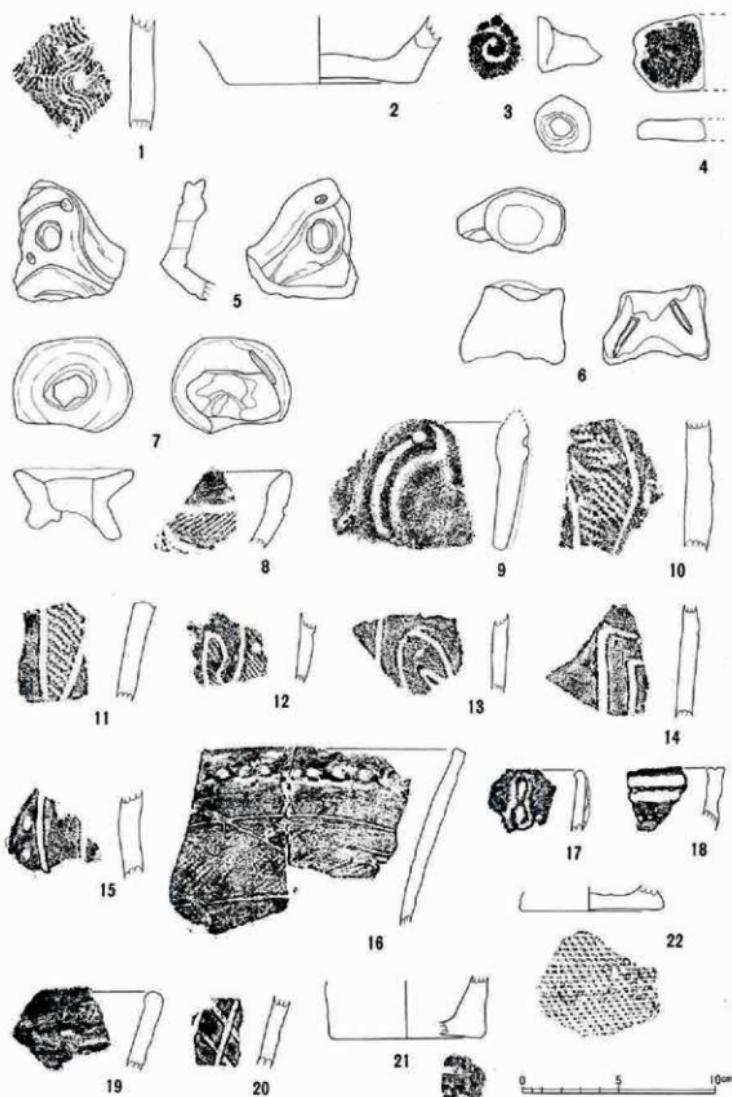
第34図 8・9世紀出土遺物  
表土・1・2・3、SK286・4

出土遺物



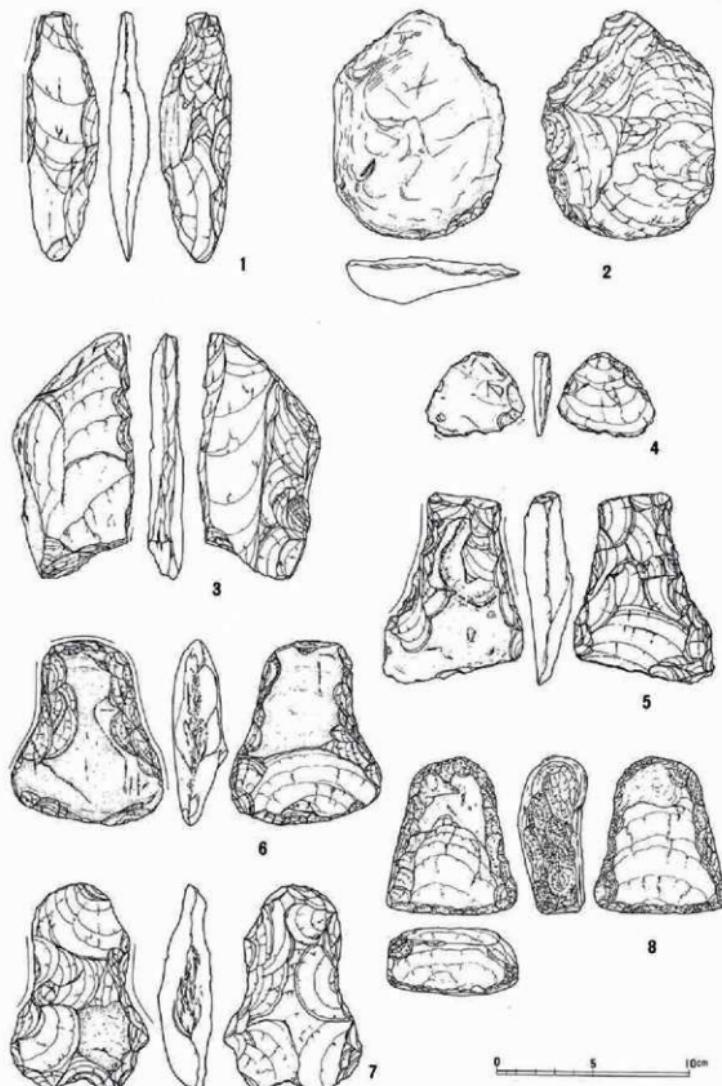
第35図 5・8人孔出土遺物

町出土遺物



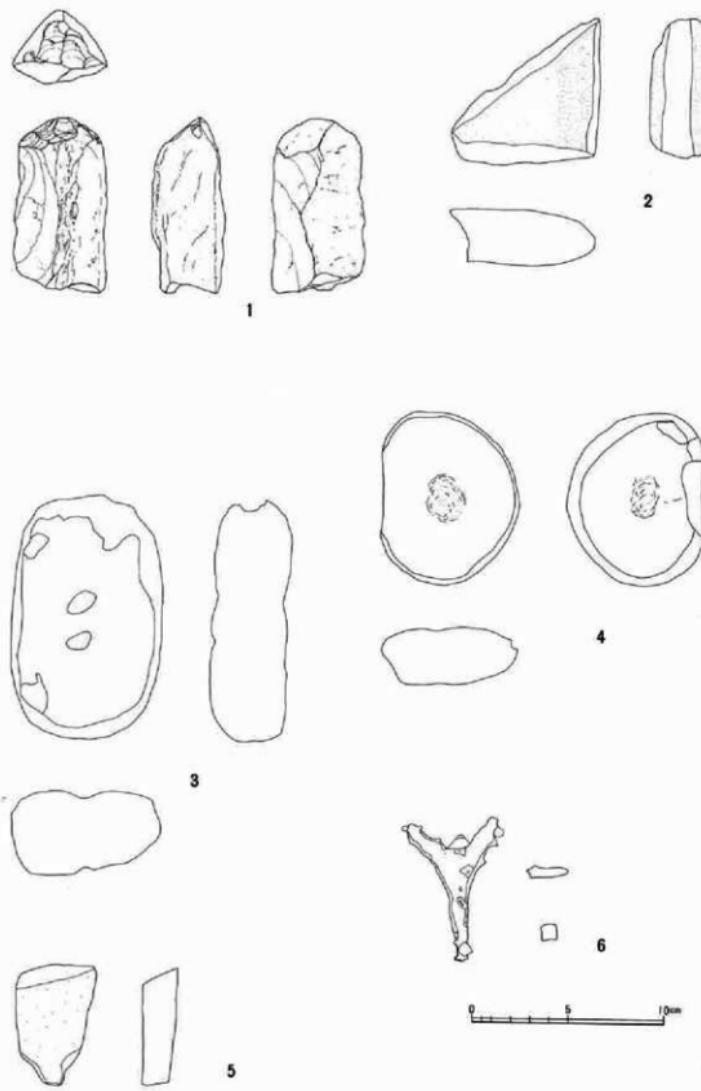
第36図 8人孔出土遺物

石出土遺物



第37図 5・7・8人孔出土遺物  
SS-21・1、SS-13・7

青出土遺物



第38圖 7·8人孔出土遺物

## VII 小 結

### 1. 奈良・平安時代検出遺構について

今回の調査で検出された、奈良・平安時代の遺構の中でNo.4人孔にて検出された硬質面と、No.7・8人孔にて検出されたSD73溝跡について若干の考察を加えたい。

#### 硬質面について

No.4人孔において僧寺々域SD23溝跡のフク土上面にて検出される硬質面と同質なものが検出される。SD23溝跡上端面から検出される硬質面は、深さが平均して25cm前後で、溝内の堆積土がレンズ状から水平堆積になった時点で認められる。また、硬質面を境に上方では、遺物が多量に出土することが確認される。(1) No.4人孔の硬質面は、当初住居跡床面ではないかと考えられていたが、調査区断面の観察により、壁や周溝が認められないこと、硬質面の下に構築時の掘込み等が検出できることなどから、住居跡とは認められず、単に平面的に広がりを示すだけでその性格は不明である。

#### SD73溝跡について

No.7人孔において1条、No.8人孔においてA期、B期の2条が認められた。両者は僧寺中軸線より北へ78mに位置し同一の東西溝であると考えられる。

溝の堆積土は、砂礫が多量に含まれていることが共通した特徴で、遺物も瓦片、土器等が多量に混入している。また、No.8人孔B期溝跡底面から約20~40cmの間隔をもって、水に混った鉄分が浸透した褐鉄鉱のラインが付随していることが断面にて観察されることにより、僧寺々域SD23溝のような素掘で、底面にロームブロックを主体となる土により下底面を整地され開口している(2)のではなく、水路として、水が流れた可能性があると考えられる。

溝底面の高低差を比較してみると、7人孔溝底面の標高より8人孔A・B期溝の方が40~70cm高いことが計測される。従って、SD73溝跡に水が流れたと考えるなら、西から東方向にむかって流路をとり、6人孔、5人孔の断面観察で若干砂礫層が確認されていること。僧寺々域内については、第13次調査四中配水管設工事立会の際、または今回の調査で4人孔、3人孔等には溝のフク土である砂礫層が検出されてないことにより、僧寺々域西辺SD23溝跡より東側に伸びている可能性は薄い。

調査区の概観でも述べたように、国分寺崖線直下には現在でも数ヶ所湧水が認められる。これ

らの湧水は一つの流れとなって、東元町2丁目付近で野川本流に合流する。また、僧寺西側地域には湧水を集めた野川支流によって形成され黒鐘谷と呼ばれる浅い開折谷が存在し、谷底低地は立川段丘よりも1~2m低位に位置し、従来は沼か低地として考えられていたが、当調査地付近は、第28次調査で検出されたSB39掘立柱建物跡や、瓦積み基壇状遺構の存在があきらかになり(3)、この低地にこれらの遺構が築かれるにあたり、また、僧寺々域内の整備をおこなうために、崖線下湧水地域には、SD73溝跡のような湧水や雨水を流した配水路の機能を持つ遺構が必要であったと考えられる。

#### SD73溝跡の出土遺物について

各人孔より出土した遺物の量は膨大であるが、表土層より出土したものが大部分で、遺構に伴なった資料はNo.7人孔、8人孔SD73溝跡に廃棄されたと考えられる遺物のみである。SD73出土遺物の中で須恵器環A(還元焰焼成)のものについて、南多摩窯跡群須恵器環および北武藏の窯跡群須恵器と対比を試み、法量、技法などから分類した。先に当調査会、武藏国府と共に、武藏国分寺出土土器の変遷を試案として見解を発表し(滝口宏 1980)、また、市立第四中学校建設に伴う調査報告にて、須恵器環の分類を行っている(西脇俊郎 1980)。その成果を

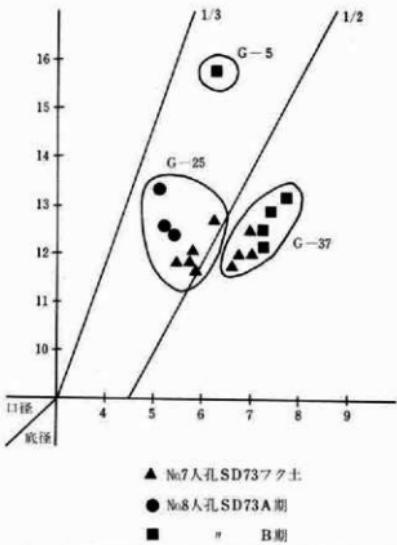


表-2 SD73溝跡出土須恵器環A/口径・底径対比図表

ふまえて、SD73溝跡の時期について考えたい。その補助として他の器種、灰釉陶器の共伴関係を明記したい。

#### No.7人孔 SD73溝跡

須恵器環底部整形技法は、回転糸切りのみで再調整されたものはない。底径、口径の法量は底径×2>口径のもの(第8図、2、6、7、8)、南多摩窯跡群G-37窯期須恵器環に対比されると考えられる。次に底径×2<口径のもの(第8図、3、4、5、9、10)に対比される窯跡は、南多摩窯跡群G-25窯期と考えられる。

#### No.8人孔 SD73A期溝跡

須恵器環底部整形技法は、回転糸切りのみで再調整されたものはない。底径、口径の法量は底径×2<口径のもの(第12図、7、8、9)である。南

多摩窯跡群 G-25窯期須恵器環に対比されると考えられる。

#### No.8 人孔 SD73B期溝跡

須恵器環底部整形技法は、回転糸切り後、外縁部回転ヘラ削りが施されたもの（第14図、9）、回転糸切りのみで再調整されてないもの（第14図、10、11、12）である。これらの法量はNo.7 人孔 SD73溝跡出土須恵器環の法量に比較して、底径×2>口徑の差が大きくなる法量を持ち、北武藏の八坂前4号窯期須恵器環（底部回転糸切りが主体をしめるが、一部外周のヘラ削り調整が残る）、南武藏における南多摩窯跡群G-37窯期須恵器環に対比されると考えられる。次に底径×2<口徑のもの（第15図、2）対比される窯跡は、南多摩窯跡群G-5窯期と考えられる（4）。（表2参照）

灰釉陶器の共伴関係をみてみると、No.7 人孔 SD73溝跡より、折戸53号窯期と平行する、東濃系大原-2号窯期のもの（第9図、5）、产地不明のもの（第9図、3、4、9）が伴出している。No.8 人孔 SD73A期溝跡において、黒釜14号窯期と平行の尾北窯跡岡-47号窯期のもの（第13図、7）、黒釜90号窯期（第13図、8）、黒釜90号窯期と平行の東濃系光ヶ丘-1号窯期のもの（第13図、13）が伴出している。No.8 人孔 SD73B期溝跡において、井ヶ谷78窯期もしくは黒釜14号窯期のもの（第16図、5）、折戸53号窯期のもの（第16図、4）、猿投窯と考えられるが、窯は不明のもの（第16図、6、7）が伴出している（5）。

灰釉陶器の編年観は、最近の猿投窯、尾北窯、美濃窯（東濃）等における発掘調査の成果から従来の編年に対して再検討を必要とする問題点が存在することにより（6）、今回は溝の年代を考える上で、須恵器環を使用し、灰釉陶器は除外した。

次に武藏国府、国分寺跡出土土器変遷図（7）と南多摩窯跡群の須恵器環の編年（8）にあてはめ、SD73溝跡より出土の須恵器環Aの時期を対比させると、国分寺跡出土土器変遷図、第III期の時期に位置づけられる（9）。第III期第1段階では、須恵器環底部回転糸切り後、外周ヘラ削りするものと、回転糸切りのままのものが伴出し、第III期第2段階以降は、須恵器環は底部回転糸切りのままとなる（10）。また、第III期は第4段階まで区分されており、第1段階は南多摩窯跡群G-37窯期、第2段階はG-59窯期、第3段階はG-25窯期、第4段階はG-5窯期に対比されると考えられる。これらの窯には、G-37は9世紀前半より9世紀中葉、G-59は9世紀後半より9世紀末まで、G-25は10世紀初めより10世紀前半、G-5は10世紀前半から10世紀後半までの年代が与えられる（11）。

従って須恵器環の編年観より、SD73溝跡に年代をあてはめるならば、8人孔B期溝跡は、9世紀中葉まで、A期溝跡は、9世紀中葉より10世紀前半まで溝の機能を果していたものと考えられる。また7人孔 SD73溝跡についても、攪乱により遺構の区分ができなかつたが、ほぼ同時期に存在したものと推測される。

- 註1** 遠口宏他 1980 「特集武藏国府と国分寺」 文化財保護第12号
- 2** 註1と同じ
- 3** 註1と同じ
- 4** SD73B期出土遺物、須恵器坏は、G-37窓期のものが主体をしめている。また、A期・B期溝跡の間に約5cmの間層が確認されているが、A期フク土の遺物がB期フク土にまぎれこむ可能性は十分に考えられることにより、G-5窓期と考えられる坏は溝の時期を考察する上で除外した。
- 5** 灰釉陶器の窓跡との対比は齊藤孝正・守屋雅史氏の御教示を得た。
- 6** 椎崎彰一・齊藤孝正 1981 「依投窓編年の再検討について」シンポジウム『平安時代の土器』発表要旨
- 7** 註1と同じ
- 8** 服部敬史・福田健司 1981 「南多摩窓跡群における須恵器編年再考」『神奈川考古』 第12号
- 9** 第III期の時期については、註1で発表したものと一部異なるために、修正しておきたい。
- 10** 対比される窓跡については、註1で発表したものに追加してある。修正しておきたい。
- 11** 服部敬史 1982 「東京考古」 南武藏における古代末期の土器様相、編年表（A案）使用

## 2. 繩文時代検出遺構について

今回の調査では、2基の集石が検出され、その概要是、V検出遺構で述べたとおりである。2基の集石の規模、集石を構成する硬の様相は異なるが、集石は平面的に広がりをしめすこと、底面に土坑状の掘込みが検出されないことに共通点が認められる。8人孔SS-13には、一部焼甕が含まれている。また8人孔II層黒褐色土中より、繩文中期後半より後期前半を主体とする土器片が出土していることよりほぼこの時期の遺構と推察される。遺構が検出された7人孔、8人孔は、I調査地区の概観で述べた「黒鐘谷」地域にあたり、すくなからずIII層暗茶褐色土上面ないしは中位に、縄文時代の遺構が確實に存在することが確認された。

これら個別遺構の意味については、今回の調査では明らかにし得ないが、その存在の意味は看過できないものがある。すなわち、国分寺崖線上（武藏野段丘）に展開する集落遺跡との関係を示唆し、さらには、崖線下の湧水地および黒鐘谷に面する立川段丘上における該期の遺跡が存在することが、前原遺跡、貫井南遺跡を例として窺えるのである。

## 参考文献

- ア、浅野晴樹 1980 「埼玉県出土の平安末期の施釉陶器」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第2号
- サ、坂詰秀一・小林昭彦 1981 「武藏・八坂前窯跡」 第II次調査概報  
佐原 真 1972 「平瓦桶巻きづくり」 考古学雑誌 第58卷第2号
- ス、鈴木隆介・片山恒雄 1974 「震災対策基礎調査報告書(地形・地質・地盤編)」 国分寺市都市整備部公害防災課
- ジ、J・E kidder 1976 「前原遺跡」 前原遺跡調査会
- タ、滝口宏他 1977 「武藏国分寺遺跡発掘調査概報III」 武藏国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会  
〃 1979 「武藏国分寺遺跡調査会年報1974 武藏国分寺跡」 武藏国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会  
〃 1980 「武藏国府と国分寺」『文化財の保護』 第12号  
〃 1980 「武藏国分寺遺跡発掘調査概報IV」 鉄道学園幹線実習館建設に伴う調査 武藏国分寺遺跡調査会  
〃 1981 「武藏国分寺遺跡発掘調査概報V」 市立第四中学校建設に伴う第1次調査 武藏国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会  
〃 1979 「多摩ニュータウン遺跡調査報告VI」 多摩ニュータウン遺跡調査会
- ナ、永峯光一他 1974 「貫井南」 小金井市貫井南遺跡調査会
- ハ、服部敬史・福田健司 1979 「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』第6号  
〃 〃 1981 「南多摩窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古』第12号
- 服部敬史 1981 「南多摩窯址群—御殿山地62号窯址発掘調査報告書」 八王子バイパス鍛水遺跡調査会  
〃 1982 「東京都八王子市大法寺裏遺跡の調査」『神奈川考古』 第13号  
〃 1982 「南武藏における古代末期の土器様相」『東京考古I』
- フ、福田健司 1978 「南武藏における奈良時代の土器編年とその歴史的背景」『考古学雑誌』第64卷第3号



# 図 版



## 第1図版 調査地区



1.調査地点遠景(南より)



2.調査地点遠景(東より)



3.調査風景

第2図版 1・2人孔



1. 1 人孔調査区全景  
(北より)

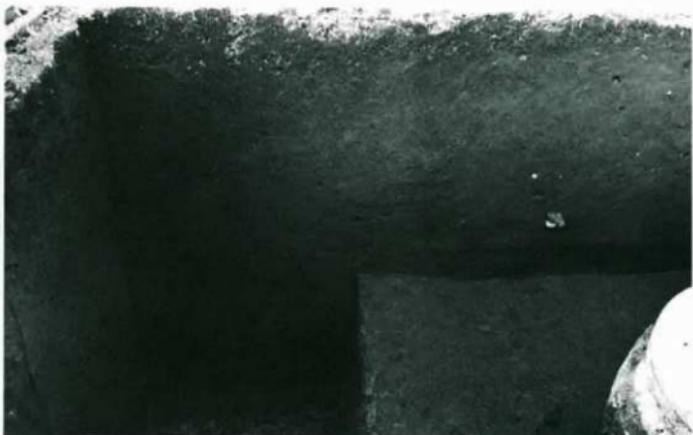


2. 2 人孔調査区全景  
(東より)



3. 2 人孔調査区西壁断面

第3図版 3・4人孔



1. 3 人孔調査区北壁断面



2. 4 人孔調査区全景  
(西より)



3. 4 人孔調査区北壁断面

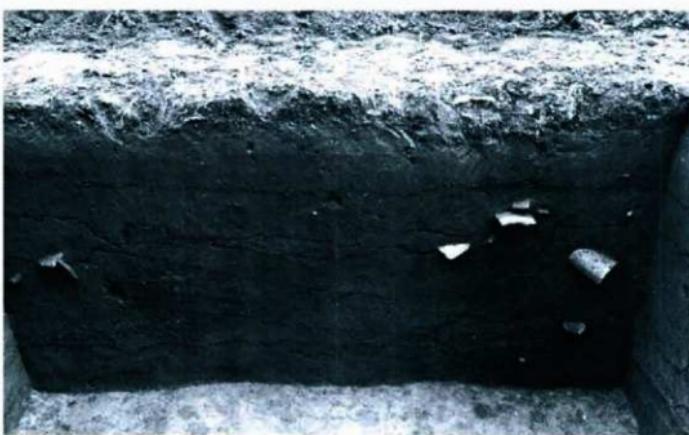
第4図版 5・6人孔



1. 5 人孔調査区全景  
(東より)



2. 6 人孔調査区全景  
(東より)



3. 6 人孔調査区南壁断面

第5図版 7人孔



1. 7人孔調査区全景  
(東より)

2. 7人孔調査区西壁断面



3. 7人孔SD73溝跡全景(東より)





1. 7人孔焼土堆積状態  
(東より)



2. 7人孔SS21集石出土  
状態(南より)



3. 7人孔SS21集石出土  
状態(西より)

第7図版 8人孔

1. 8人孔 SD73A期溝跡  
全景(東より)



2. 8人孔 SD73B期溝跡  
全景(東より)



3. 8人孔 SD73A・B期  
溝跡断面





1. 8人孔SS13集石出土  
状態(西南より)



2. 9人孔SK286土坑全景  
(東より)



3. 9人孔SK286土坑断面

第9図版 4・6・7人孔出土遺物



7-1



7-9



7-4



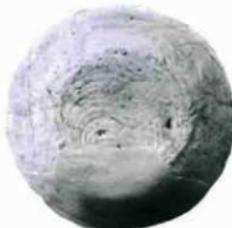
7-8



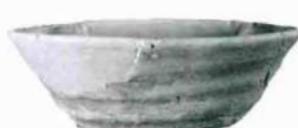
7-6



8-1



7-7



8-2



8-3

第10図版 7人孔出土遺物



8-4



8-8



8-11



8-13



9-1



9-9



9-2

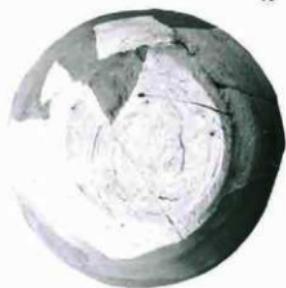
第11図版 7人孔出土遺物



10-1



10-5



10-7



10-2



10-4



10-14



第12図版 7・8人孔出土遺物



10-8



12-3



12-4



12-7



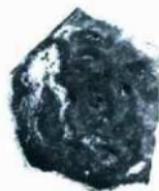
12-8



10-13



12-13



11-1



第13図版 8人孔出土遺物



13-13



14-7



13-14



14-9



13-16



14-10



13-18



14-11



13-19



15-5

第14図版 8人孔出土遺物



15-6



16-9



15-7



15-11



16-10



16-3



16-5



16-8



16-12

第15図版 1・2人孔出土遺物



17-1



17-2



17-3



17-4



17-5



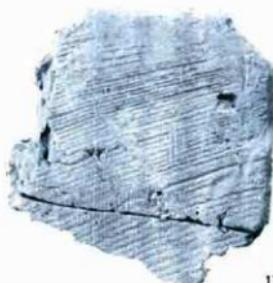
第16図版 3・4人孔出土遺物



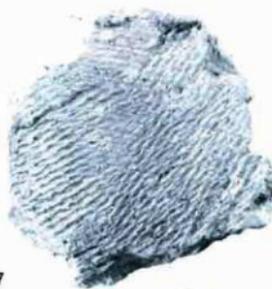
17-6



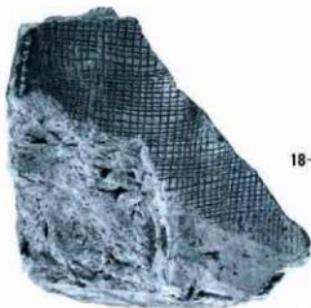
17-8



17-7



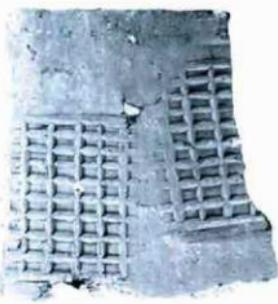
18-1



18-2



18-5



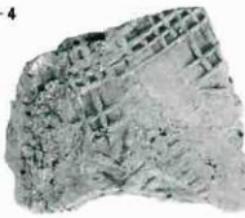
第17図版 4人孔出土遺物



17-3



17-4



17-6



第18図版 5人孔出土遺物



19-1



19-4



19-2



19-3



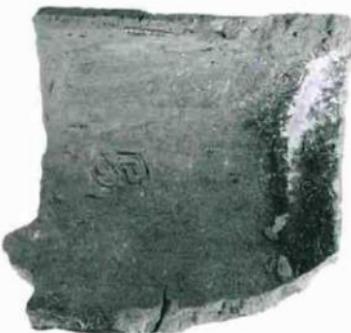
第19図版 5人孔出土遺物



19-5



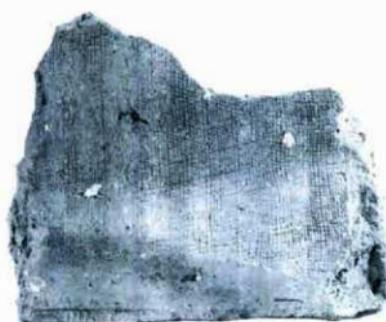
19-6



20-1



第20図版 6人孔出土遺物



20-3



20-2



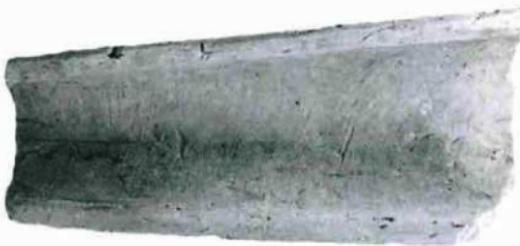
20-4



第21図版 6人孔出土遺物



21-2



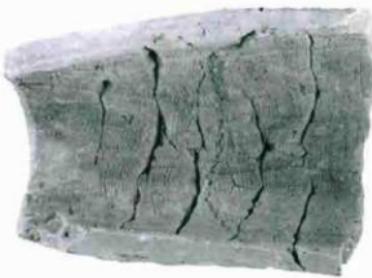
21-3



21-1



22-1



第22図版 6人孔出土遺物



22-2



22-3



23-1



23-2



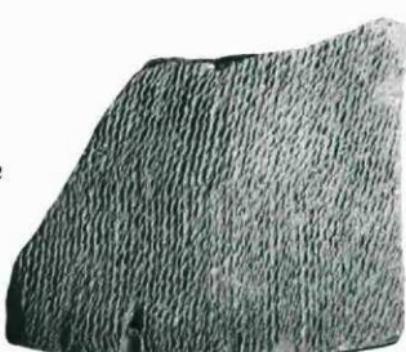
第23図版 6人孔出土遺物



23-3



24-1

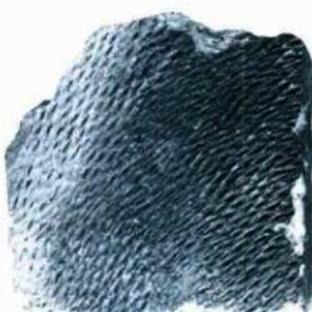


24-2

第24図版 6人孔出土遺物



24-3



24-4



25-1

第25図版 6人孔出土遺物



25-2

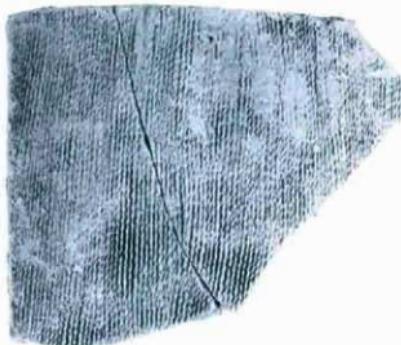


25-3



26-1

第26図版 6・7人孔出土遺物



26-2



26-3

26-4

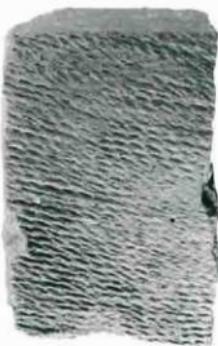


27-1

第27図版 7人孔出土遺物



27-2



28-1



27-4



27-3



第28図版 7人孔出土遺物



28-2



28-3



28-4

第29図版 7人孔出土遺物



29-1



29-2



30-2



29-3



第30図版 7人孔出土遺物



29-4



30-1



30-3

第31図版 7・8人孔出土遺物



30-4



30-5



30-6



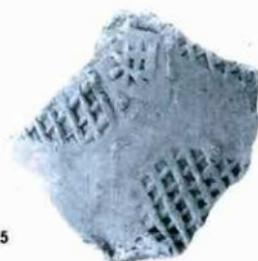
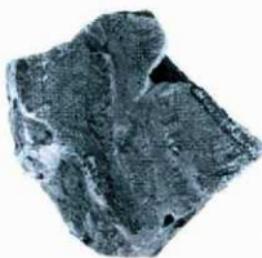
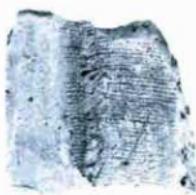
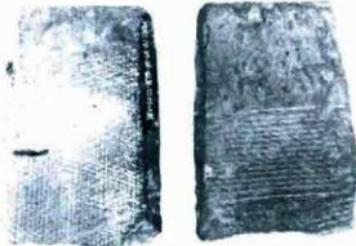
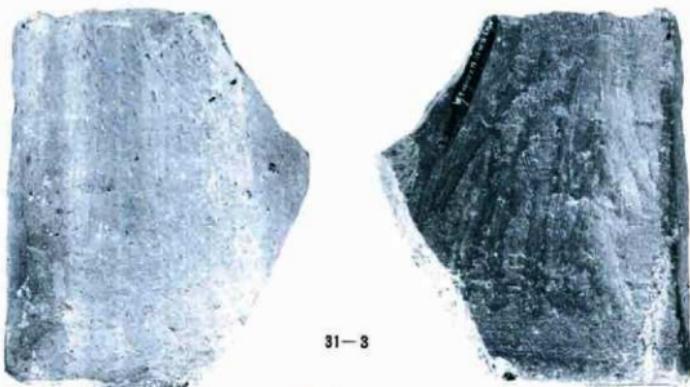
31-1



31-2



第32図版 8人孔出土遺物



第33図版 8人孔出土遺物



31-7



32-1

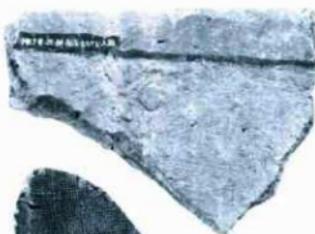


32-2

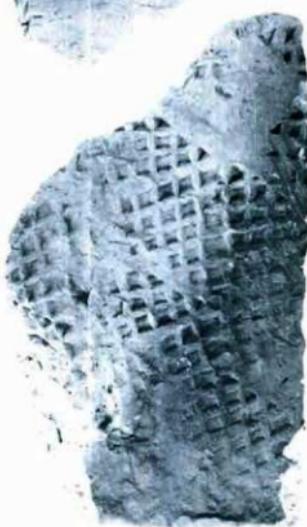
第34図版 8人孔出土遺物



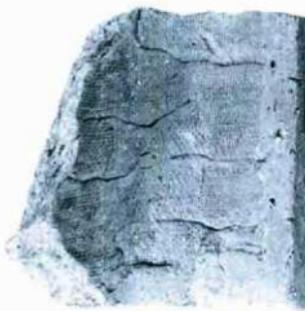
32-5



32-3

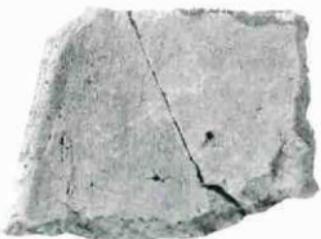


32-4



32-6

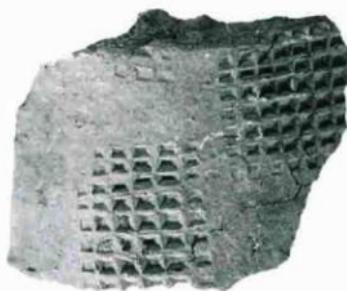
第35図版 8人孔出土遺物



33-2



33-1



33-3



第36図版 8人孔出土遺物



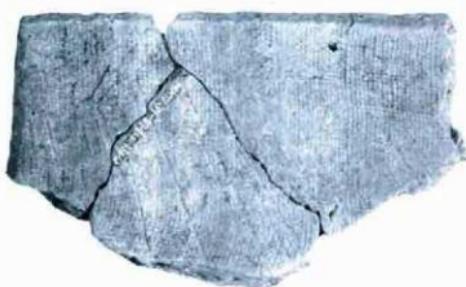
34-2



33-4



33-5



第37図版 8・9人孔出土遺物



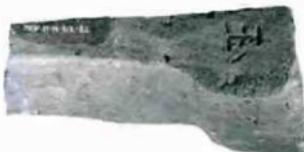
34-1



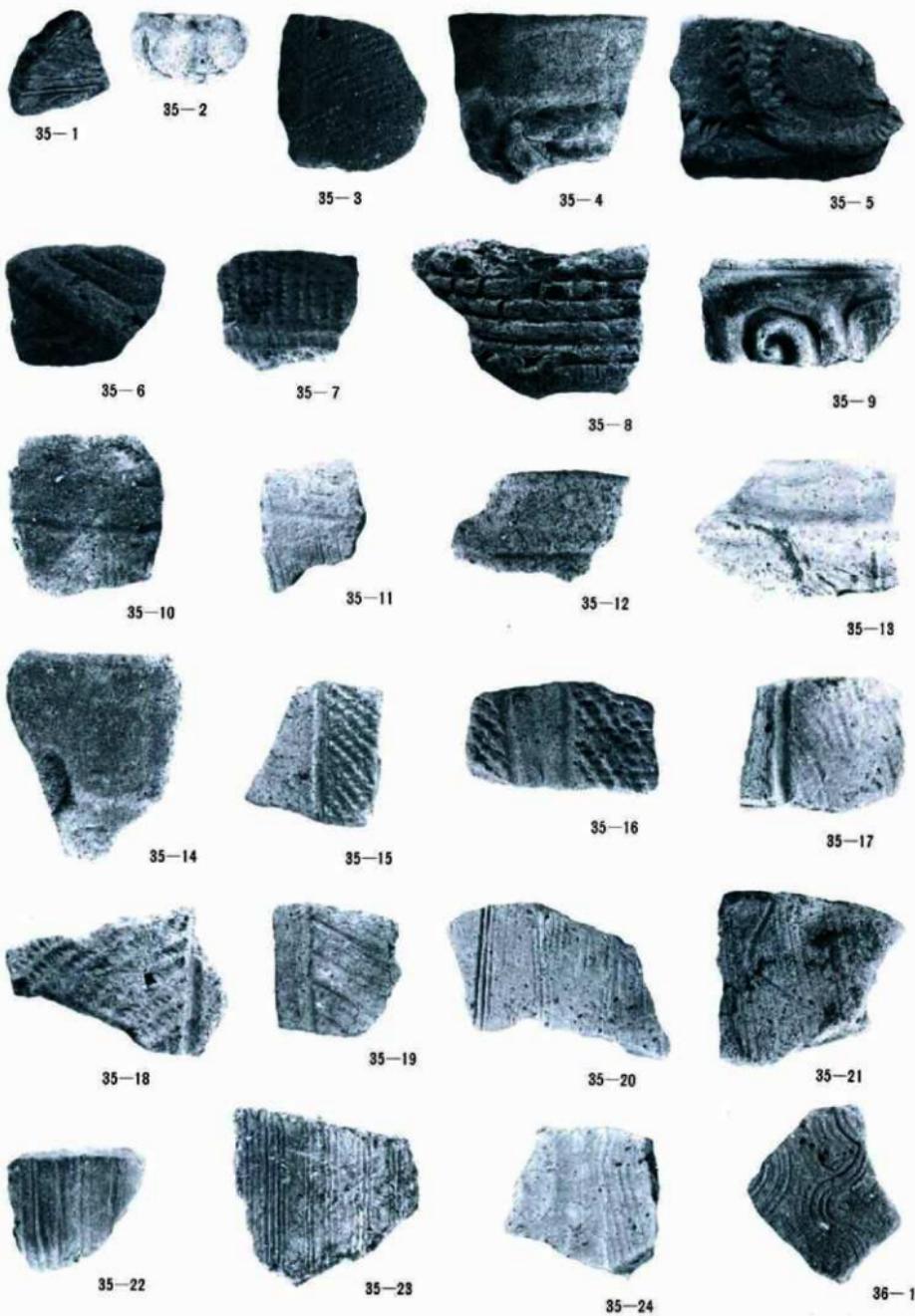
34-2



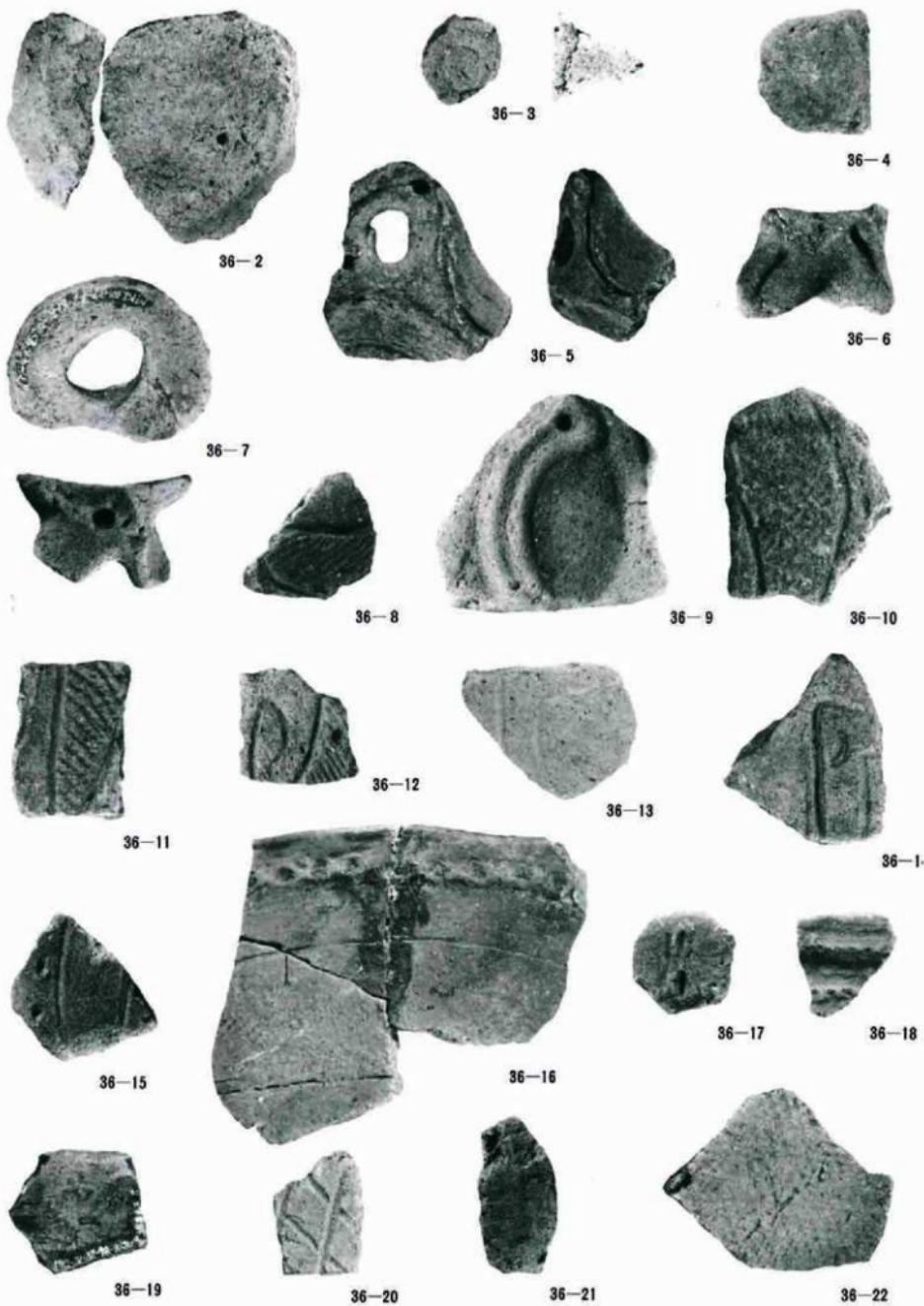
34-3



第38図版 繩文土器



第39図版 繩文土器



第40図版 石器



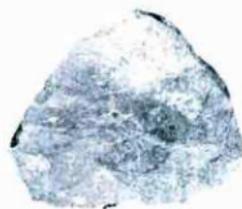
37-1



37-2



37-3



37-4



37-6



37-5



37-7



37-8



第41図版 石器・鉄器



38-1



38-2



38-3



38-4



38-5



38-6



武藏国分寺遺跡発掘調査概報 VI  
市公共下水道南部地区15号工事に伴う調査

---

昭和57年 3月31日

編著 武藏国分寺遺跡調査団  
（団長 滝口 宏）

発行 武藏国分寺遺跡調査会  
東京都国分寺市教育委員会

印刷 第一法規出版株式会社

---

令和4年(2022)3月9日 デジタル版作成